

第 77 回日本学校農業クラブ全国大会
令和 8 年度 南四国大会

クラブ員代表者会議
会 議 資 料



大会スローガン

柑橘香る阿波と土佐 渡し受け継ぐ渦の華 我らの農ク 踊り咲け
燃え上がれ！ 我ら農ク魂 藍色の四国の地へ

期 日 令和 8 年 10 月 20 日（火）～10 月 21 日（水）
会 場 高知県立春野高等学校
実施担当校 高知県立春野高等学校
〒781-0303 高知県高知市春野町弘岡下 3860 番地
TEL 088-894-2308 FAX 088-894-2907

ようこそ「黒潮と太陽が育む園芸王国」土佐へ

クラブ員代表者会議実施委員長
高知県立春野高等学校
校長 大原 弥

全国からお越しいただいた農業クラブ員の皆様、そして引率の先生方、南国土佐・高知へようこそお越しいただきました。心より歓迎申し上げます。

本日、ここに『第77回 日本学校農業クラブ全国大会 令和8年度 南四国大会「クラブ員代表者会議」』を開催するにあたり、実施担当校を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本大会は、「柑橘香る阿波と土佐 渡り受け継ぐ渦の華 我らの農ク 踊り咲け」「燃え上がれ！我ら農ク魂 藍色の四国の地へ」というスローガンのもと、徳島県と高知県による「南四国大会」として開催されます。ここ高知県では、このクラブ員代表者会議や農業鑑定競技会などが執り行われます。

高知県は、県土の約84%を森林が占める日本一の「森林県」です。同時に、黒潮の恩恵を受ける温暖な気候と全国屈指の日照時間を活かしたハウス園芸、いわゆる「促成栽培」の先進地でもあります。ナスやショウガ、ミョウガ、シシトウ、ニラなどの生産量は全国一を誇り、まさに「施設園芸の先進地」として日本の食を支えてまいりました。

一方、山間地域や清流の流域では、棚田での稲作や土佐あかうしをはじめとする畜産業、豊かな水資源を活かした特産品づくりが行われており、四万十川や仁淀川、室戸岬など、雄大な自然も大きな魅力です。

今回、会場となる本校は、南に雄大な太平洋を臨み、近くには水質日本一の清流「仁淀川」が流れる自然豊かな環境にあります。周囲は、高知県が全国に先駆けて進める次世代型施設園芸プロジェクト「IoP（Internet of Plants）」をはじめとする最先端技術を駆使したキュウリやメロン、トマトの栽培が盛んであり、まさに高知県農業の縮図であり、次世代農業のフロンランナーとも言える地域です。

さて、いま農業や私たちを取り巻く社会は、大きな変革の時を迎えています。少子高齢化による担い手不足という深刻な課題に直面する一方で、ドローンやAIを活用したスマート農業の進展、環境保全を目指す「みどりの食料システム戦略」の推進など、農業のあり方は急速にアップデートされています。これからの時代を生きる皆さんに求められるのは、単に従来の技術を学ぶことだけではありません。多様な仲間と協働し、変化を恐れずに新しい価値を創造する力、そして持続可能な社会を自らの手で築く力です。

このクラブ員代表者会議は、全国のリーダーが集う最高の学びの場です。皆さんには、それぞれの地域での実践事例を持ち寄り、これからの農業クラブ、そして日本の農業の未来について、時間の許す限り熱く語り合ってくださいと思います。全国の志を同じくする仲間との対話やネットワークは、皆さんの視野を広げ、これからの人生においてかけがえのない財産となるはずです。

結びに、本会議の開催にあたり、本校の生徒・教職員が一丸となって準備を進めてまいりました。行き届かない点もあるかと思いますが、土佐の「おもてなしの心」をもって温かく皆様をお迎えいたします。本会議が皆様にとって実り多きものとなり、地域や農業を担う次世代のリーダーとして、今後ますますご活躍されることを心より祈念いたしまして、歓迎と開催の挨拶とさせていただきます。

生徒実施委員長挨拶

クラブ員代表者会議生徒実施委員長

高知県立春野高等学校

総合学科 3年 須夜崎 美月

全国の農業クラブの皆様、こんにちは。ようこそ高知へお越しくださいました。

「日本最後の清流」と称される四万十川と「奇跡の清流」と呼ばれる仁淀川、2つの清流を持ち、よさこい祭り発祥の地でもあるこの高知県で第77回日本学校農業クラブ全国大会令和8年度南四国大会クラブ員代表者会議を迎えることができ、春野高校一同心より嬉しく思います。

このクラブ員代表者会議では、全国の農業クラブ員の活動事例をもとに情報交換や意見交換を行い、老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流、農業クラブ員全員が興味・関心を持てるもの、農業従事者が減っていく中での農業のイメージアップについて話し合いが行われます。全国で考えられていることは全く異なるかもしれません。だからこそ、この機会に学びや失敗に気づけると思います。同じ農業クラブ員同士協力し、高め合い、たたえ合う。そんな会議になるよう心から願っています。

昨年の山梨大会から「感謝と友情のバトン」を引き継ぎました。どうすれば大会を良いものにできるか考え、準備を進めてきました。大会マスコットである「かん吉」と春野高校オリジナルキャラクターである「はるのん」を描いたカウントダウンボードの制作、人に対する礼儀や姿勢、失礼にならない言葉遣いなど、大会の成功のために、そして何より全国の農業クラブ員の皆様の笑顔のために、どんな小さなことでも全力で心を込めて準備してきました。

また、今回の全体会の講演会では、見元園芸の見元一夫様によるご講演を頂きます。春野高校があるここ高知が持つ、皆様が知らない深い魅力を知り、皆様の思い出に残るようなものになれば幸いです。

そして最後に、農業クラブの3大目標である科学性、社会性、指導性。この会議を通して、それぞれの活動や報告、レポートによって科学性を、他校の仲間と話し、意見をまとめることによって社会性を、まとめた意見をもとに未来を見て語る力から指導性を育てることができると考えています。今の私たちにできることを考え話し合い、まとめたものが、いつか農業を支えられるものになるよう、私たちはこの会議を全力でサポートし、運営を行います。皆様のご協力をよろしくお願いします。

クラブ員代表者会議概要

1 期 日 令和8年10月20日（火）～21日（水）

2 会 場 高知県立春野高等学校

3 目 的 テーマに沿った農業クラブ活動の事例をもとにした情報交換と連盟運営に関する意見交換を行い、クラブ員の資質の向上と、クラブ活動の発展を図るとともに、農業クラブ員の主体的な活動の取組みを推進する。

4 実施担当校 高知県立春野高等学校

5 実施委員

生徒実施委員長	高知県立春野高等学校	総合学科3年	須夜崎 美 月
生徒実施副委員長	高知県立春野高等学校	総合学科3年	田 島 瑠 虎
実 施 委 員 長	高知県立春野高等学校	校 長	大 原 弥
実 施 副 委 員 長	高知県立春野高等学校	教 頭	高 野 佳 香
実 施 主 任	高知県立春野高等学校	教 諭	小 川 雅 司
実 施 副 主 任	高知県立春野高等学校	教 諭	恒 石 芳 彦
実 施 副 主 任	高知県立春野高等学校	教 諭	仙 頭 妙 子

6 指導助言者

指導助言者代表	高知県立幡多農業高等学校	校 長	近 森 公 夫
指導助言者			
【第1分科会】	愛媛県立大洲高等学校	教 諭	岡 田 嘉 浩
【第1分科会】	香川県立笠田高等学校	教 諭	宮 本 礼 司
【第1分科会】	高知県立幡多農業高等学校	教 諭	山 中 洋 平
【第2分科会】	香川県立高松南高等学校	教 諭	寺 岡 正 人
【第2分科会】	高知県立幡多農業高等学校	教 諭	安 部 誠一郎
【第2分科会】	愛媛県立伊予農業高等学校	教 諭	亀 岡 慎 平
【第3分科会】	高知県立高知農業高等学校	教 諭	池 さおり
【第3分科会】	愛媛県立西条農業高等学校	教 諭	山 本 潤 也
【第3分科会】	香川県立飯山高等学校	教 諭	伊 藤 基 司

7 日 程

(1) 事前打ち合わせ全体会・分科会 10月20日（火）

13:30～14:00 受 付（本館 正面玄関）

14:00～14:45 事前打合会（全体会 体育館）

14:45～16:30 事前打合会・リハーサル（各分科会会場 教室）

※参加者：分科会司会者・記録者、指導助言者代表、指導助言者、事例発表校

(2) クラブ員代表者会議 10月21日（水）

8:30～ 9:00 受 付（生徒昇降口前）

9:10～ 9:40 開会式（体育館）

9:50～11:50 分科会（各分科会会場 教室）

11:50～12:50 昼食（各分科会会場 教室他）

14:20～15:20 全体会・閉会式（体育館）

15:00～16:00 分科会報告・閉会式（体育館）

※分科会司会者・記録者、指導助言者代表、指導助言者は午後の日程が以下ようになります。

11:50～12:50 昼 食（各分科会会場 教室他）

12:50～14:10 分科会まとめ（パソコン室）

14:20～15:20 全体会（体育館）

15:30～16:00 総まとめ会（会議室）

※総まとめ会参加者：指導助言者代表、指導助言者、実施委員長、実施主任

8 分科会テーマ

分科会	テーマ	会場
第1分科会	「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」	第1会場
		第2会場
		第3会場
第2分科会	「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」	第4会場
		第5会場
		第6会場
第3分科会	「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」	第7会場
		第8会場
		第9会場

9 運営担当校

分科会	会場	運営担当校	司会者	記録者	指導助言者
第1分科会	第1	愛媛県立 大洲高等学校	清水 大雅	赤松 陽 萩森 徠夢	岡田 嘉浩
	第2	香川県立 笠田高等学校	平尾 健真	大西 結万 田代 悠稀	宮本 礼司
	第3	高知県立 幡多農業高等学校	尾形 銀太	國見 悠斗 山下 悠	山中 洋平
第2分科会	第4	香川県立 高松南高等学校	野崎 誉稀	石井 寿弥 土居 心結	寺岡 正人
	第5	高知県立 幡多農業高等学校	岡崎 万桜	岡 紫菜 藤本 桃花	安部 誠一郎
	第6	愛媛県立 伊予農業高等学校	三好 紫珠沙	塩見 美桜 山本 めくみ	亀岡 慎平
第3分科会	第7	高知県立 高知農業高等学校	山下 真心	小松 愛莉 西村 和真	池 さおり
	第8	愛媛県立 西条農業高等学校	石川 いろは	宇野 真織 西坂 聖愛	山本 潤也
	第9	香川県立 飯山高等学校	山西 純	宮武 紗希 坂下 葵	伊藤 基司

10 事例発表校

分科会	会場	事例発表	発表者	指導責任者
第1分科会	第1	北海道ブロック 北海道旭川農業高等学校	香西 結月・入江 光輝 田井 萌乃香	國井 愛
	第2	北信越ブロック 新潟県立加茂農林高等学校	五十嵐 梓・伊藤 夢華 増子 育美	若杉 祥彰
	第3	中国ブロック 島根県立益田翔陽高等学校	福原 宗嬉・松本 颯大 湊谷 智弥	重本 和宏
第2分科会	第4	東北ブロック 山形県立置賜農業高等学校	鈴木 優斗・鈴木 陽輝 江本 充輝	齋藤 慎吾
	第5	東海ブロック 愛知県立猿投農林高等学校	坂口 花・三橋 怜央 鶴田 苺依	太田 幸希
	第6	四国ブロック 香川県立笠田高等学校	岡田 隼人・石井 享次朗 森川 翼	田原 実加
第3分科会	第7	関東ブロック 栃木県立真岡北陵高等学校	島田 知歩・板木 海斗 齋藤 楓	舘野 雅美
	第8	近畿ブロック 滋賀県立八日市南高等学校	北川 莉愛・河村 奏歩 嶋 楓駕	野田 宏
	第9	九州ブロック 宮崎県立高鍋農業高等学校	大山 柚紀・松元 音弥 鶴丸 玄樹	川越 恵子

参加者課題レポート

第 1 分科会 第 1 会場

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流は
どのようなものがあるだろうか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第 1 会場	北海道旭川農業高等学校	愛媛県立大洲等学校

第1分科会 第1会場

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	茨城県	坂東清風高等学校	農と食科	3	猪瀬 心愛
2	群馬県	吾妻中央高等学校	生物生産科	3	山下 花音
3	埼玉県	羽生実業高等学校	園芸科	3	佐藤 黎
4	東京都	園芸高等学校	園芸科	2	黒木 理央
5	神奈川県	相原高等学校	畜産科学科	3	荒井 天照
6	長野県	下高井農林高等学校	地域創造農学科	3	滝澤 祐真
7	長野県	南安曇農業高等学校	グリーンサイエンス科	2	山浦 蒼奈
8	愛知県	鶴城丘高等学校	総合学科	3	西ノ村 美緒
9	滋賀県	甲南高等学校	総合学科	2	蒔田 情
10	島根県	松江農林高等学校	生物生産科	3	與倉 ななほ
11	広島県	沼南高等学校	園芸デザイン科	1	渡邊 一爽
12	佐賀県	高志館高等学校	食品流通科	3	田口 永和
13	沖縄県	南部農林高等学校	生物資源科	2	崎浜 由衣

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	北海道	旭川農業高等学校	食品科学科	3	香面 結月
15	北海道	旭川農業高等学校	食品科学科	2	入江 光輝
16	北海道	旭川農業高等学校	農業科学科	2	田井 萌乃香

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	愛媛県	大洲農業高等学校	生産科学科	1	清水 大雅
18	愛媛県	大洲農業高等学校	食品デザイン科	1	赤松 陽
19	愛媛県	大洲農業高等学校	生産科学科	1	萩森 侑夢

「伝統を持続可能な未来へ繋ぐ

～世代間交流を核とした地域協働活動の実践～

北海道ブロック 北海道旭川農業高等学校

食品科学科 3年 香面 結月

食品科学科 2年 入江 光輝

農業科学科 2年 田井萌乃香

1 はじめに

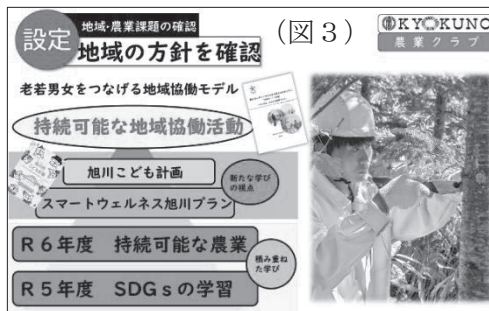
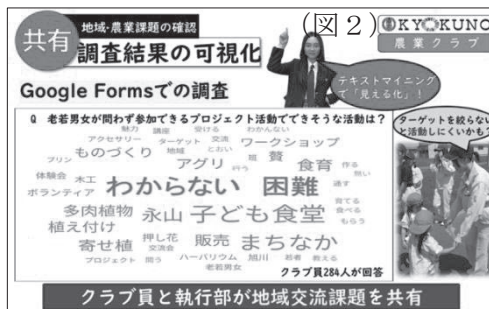
大正12年3月17日、道北の農業指導者養成の命を受け産声を上げた私たちの旭農。「誠実 勤労 剛健」の校訓の基、大正から令和まで、伝統的手法からAI技術の導入などの変化に即しながら、一貫した農業教育活動を実践してきました。卒業生は1万6千名を超え、多くの同窓生が地域農業の担い手として活躍。私たちは地域の方々に支えられながら農業学習に励んでいます(図1)。



本校OB 永山地区 (株)北永農場 で実習するクラブ員 (図1)

2 課題設定

昨年度、上川振興局管内の農業従事者の高齢化率を学習した私たちは、「持続可能な農業」を子どもたちに継承する活動を実践。永山魅力発見隊事業などで子どもたちと関わる中で、執行部は地域の繋がり希薄化、子どもを取り巻く社会問題の深刻化を目の当たりにしました。そこで、全クラブ員から地域交流の課題を調査し、テキストマイニングで可視化(図2)。「老若男女問わず参加できる」活動は「困難」との声が多いという結果を受け、執行部は「スマートウェルネス旭川プラン」、「旭川こども計画」を読み解き、老若男女を繋げる活動を検討。農業学習を通じ地域全体がつながる持続可能な世代間交流と地域協働を目指したいと考え課題を設定しました(図3)。

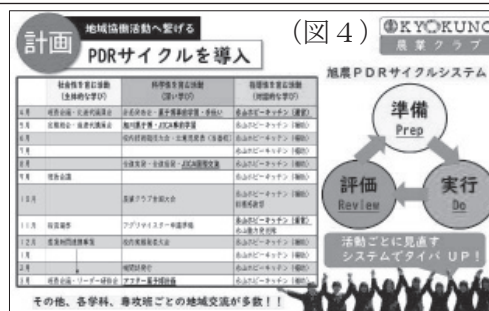


3 目標

- (1) クラブ員の個別最適な学びの設計と「地域協働」意識の醸成【主体的な学び 社会性向上】
- (2) 「地域協働」の視点を導入したプロジェクト学習の充実【深い学び 科学性向上】
- (3) 世代間交流を通じた「地域協働」体制の構築 【対話的な学び 指導性向上】

4 計画

短期スパンで活動を見直せる Prep、Do、ReviewのPDRサイクルで計画しました(図4)。



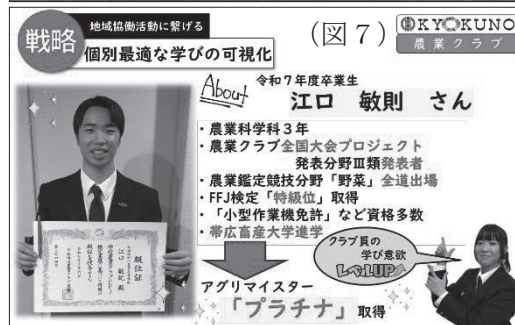
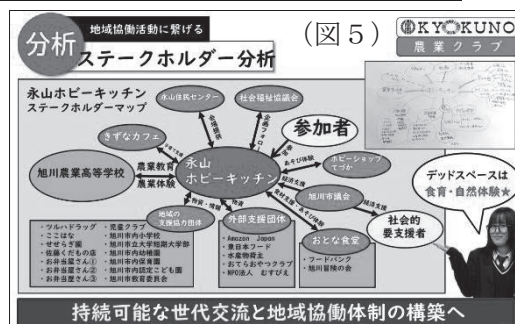
5 実践

(1) クラブ員の個別最適な学びの設計と「地域協働」意識の醸成

執行部はリーダー研修会で、子ども食堂「永山ホビーキッチン」代表浅利和慶様と「農業を通じた世代間交流と協働」を創出するためのステークホルダー分析を実施しました(図5)。クラブ員の農業に対する学びとプロジェクト学習の成果を子ども食堂の運営に還元することで、持続可能な世代間交流と地域協働体制が生まれると推察し、年度始総会でステークホルダーマップをクラブ員と共有しました。

個別最適な農業の学びを深めるため、まずは農業科学科のクラブ員4名が科目「農業と環境」「課題研究」を軸に、「JICA 筑波 農業高校生 国際協力実体験プログラム」に参加。国際的な農業・農村開発の課題を学習し、地域協働活動に応用できる即戦力を身につけました(図6)。

また、農業学習の成果を可視化するため、アグリマイスターの価値を高める工夫を実践。執行部は農く入会式での説明やプラチナ取得者の声を届けることで、自己の学びを深める工夫をしました(図7)。

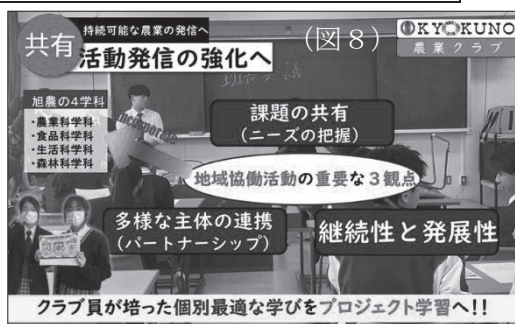


(2) 「地域協働」の視点を導入したプロジェクト学習の充実

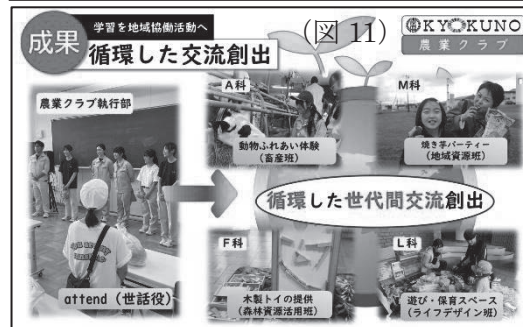
個別最適な農業の学びを深めたクラブ員の力を、プロジェクト学習での地域協働活動に応用し、老若男女問わず参加できる活動の構築に繋がたいと考えました。そこで、プロジェクト班長会議にて学校と地域が双方方向循環するための、重要な3観点を確認(図8)。高度なプロジェクト学習の実践を行いました。

生活科学科ライフデザイン班と食品科学科地域資源活用班は、ホクレンなどと協働し下國伸シェフ監修の『贅コクぷりん』を開発。第28回全国菓子大博覧会・北海道「あさひかわ菓子博」での販売のみならず子どもたち向けの製造講習会を実施、高度なプロジェクト学習の還元が見られました。

また、生活科学科園芸福祉班は「スマートウェルネス旭川プラン」に基づき、幼稚園や高齢者介護施設などでの園芸交流を実施。高齢者の生きがいや交流の場を創出し世代間交流の架け橋となりました(図9)。



執行部はクラブ員が培った農業技術を地域に還元し、「地域協働」活動の充実を図るため年間2回の子ども食堂の運営に取り組みました。「永山ホビーキッチン」に執行部とクラブ員が毎月スタッフとして参加し参加者の状況や危機管理を学習（図10）。また、保育、食育のみならず資金の申請やフードバンクなど子ども食堂運営に関わる様々な社会の仕組みを学びました。



(1) クラブ員の個別最適な学びが充実し、地域協働意識が醸成できた。

分析

学習も地域活動活動へ

学び定着の根拠

(図 12)

KYOKUNO

農業クラブ

アグリマイスター取得人数
(令和3年度～7年度)

年度	取得人数
R3	18
R4	22
R5	28
R6	35
R7	43

プラチナ1名
ゴールド11名
シルバー36名

執行部の働きかけ&日々の学習

→アグリマイスターの取得価値向上

クラブ員に成果を還元できた。

優秀
 学習を地域協働活動へ

全国大会の結果

 13

 KYOKUNO
 環境クラブ

全国大会
 第13回協働
 分野Ⅲ期 優秀賞

令和7年度その他入賞実績一覧

● 北海道意見発表大会(剣道)
 分野1期、Ⅲ期 最優秀賞・1期、Ⅱ期、Ⅲ期 優秀賞
 ● 山形県全県学生総合文化コンクール(器楽)
 フォー・アレンジャーメント 観技 出場

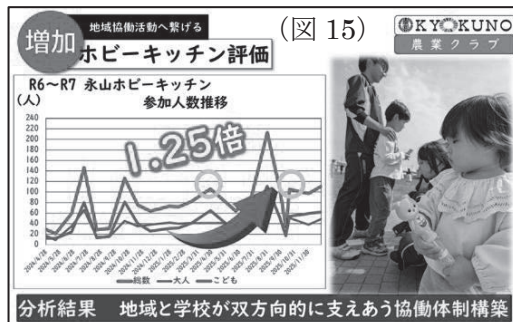
全国大会
 第13回協働
 分野Ⅲ期 優秀賞

令和7年度その他入賞実績一覧

● 全道実績発表大会(遠征音楽)
 クラブ活動、分野1期、Ⅱ期、Ⅲ期
 ● 全道技術競技大会(界隈尺)
 商業認定競技(生活/森林) 最優秀賞

(3) 「地域協働」活動を地域に還元し、継続的な地域との協働体制が構築できた。

執行部の2名、クラブ員の4名が永山ホビーキッチンのスタッフとして通年で活躍したほか、のべ79名の本校クラブ員がボランティアで活躍したことにより、執行部、クラブ員共に自主的に地域協働活動が実施できたと分析します。また、本校との連携により永山ホビーキッチン参加者数が1年で1.25倍に増加したことから農業学習の還元により学校と地域が共に支え合う関係が生まれ、継続的な協働体制の構築に繋がったと判断しました(図15)。



7 課題

- | | | |
|-------------------------------------|----------|-----|
| (1) 農業クラブ活動の主体的な参加。地域協働活動の継続 | (主体的な学び) | 社会性 |
| (2) 三大事業の入賞レベルの向上。全国大会最優秀賞入賞者の輩出 | (深い学び) | 科学性 |
| (3) 横断型、縦断型農業クラブ活動。地域コミュニティでの指導環境整備 | (対話的な学び) | 指導性 |

8 評価

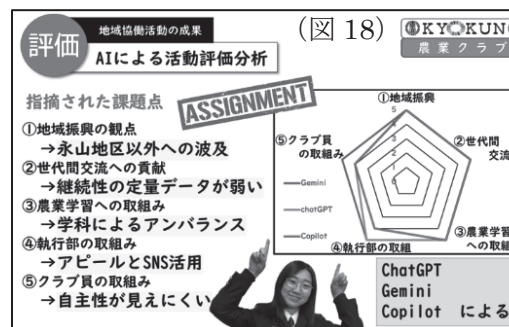
執行部の自己評価は4.5、クラブ員は4.3と昨年度から大きなポイントアップはみられませんでした。外部4機関からはクラブ員の「地域協働活動」への取組みに対し4.6と高い評価をいただきました(図16)。永山ホビーキッチンのスタッフの皆様への調査では、老若男女問わず地域の人に参加できる活動や企画に対する評価平均4.7と高い評価をいただきました。



また、「子どもたちの世界が広がっていると同時に私たち運営スタッフの世界も広がっている」との声から、執行部とクラブ員の取組みが地域に期待され、幅広い世代を繋ぐ架け橋となっていると評価しました(図17)。



AIによる活動評価からは、データの継続収集や学科によるアンバランスなどの課題が指摘されたため、今後の改善につなげます。(図18)。



9 おわりに

「地域協働」を実現した旭農生。私たちはこれからも伝統を未来へ繋ぎ、学校と地域が共に支えあう持続可能な地域協働の実現を目指し、活動を進めていきます。



クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 茨城県立坂東清風高等学校
農と食科 3年 猪瀬 心愛

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、周辺にお住まいの一般の方々を対象に毎年12月にシクラメンの即売会を開催しています。毎回、朝6時過ぎには行列ができていて、地域の人たちにとっても楽しみにされていると感じています。行列に並んでいる方の中には、ご年配の方やお子さんもいらっしゃり年齢を問わず多くの方々に参加していただいています。今はシクラメンですが、今後は植物バイオテクノロジーの授業で培養技術の向上のために取り扱っている胡蝶蘭も、販売会ができるようにしていきたいと思います。それらを通じて地域の人との交流の機会にしたいです。

また、本校では毎年1回、近隣の農家さん10軒程に研修として生徒が2～3人伺って、1日農作業のお手伝いをするという実習を行っています。稼業として行われている農業を身をもって体験することで、厳しさややりがい、コスト意識など授業だけでは学べない大切なことを教えていただく貴重な機会となっています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

地域の特産品になるような作物を選定し栽培を行い、その作物を使った商品を開発していきたいです。本校には農業コース、都市園芸コース、食品コースの3つのコースがあります。農業コースで栽培を行い、食品コースで加工食品の開発、都市園芸コースで加工品の開発や販売、という全員参加での販売会などを行うことができれば、より興味関心を持って活動に参加できるようになると思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

現在は、実習で収穫したジャガイモを、市役所へお届けしてこども食堂などで活用してもらったり、収穫したネギを小中学校の給食で提供する活動を行っています。

今後はより広範囲の小学校、中学校などで生徒による出張授業を行っていきたいと思っています。具体的には、フラワーアレンジメントとしてコサージュの制作をしたり、苔玉の制作、プランターで育てた作物の収穫体験など農業高校の活動内容を知ってもらう機会にして、将来の後輩を増やしていきたいと思っています。

また、近年はSNSも若者だけでなく親世代も普通に活用する時代になってきています。TiKTOKやInstagramなどのツールを活用し、農業高校のイメージアップになるような投稿を行っていきます。そのようにして、小中学生だけでなく保護者にも農業についての認知の向上を図っていききたいと思っています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立吾妻中央高等学校
生物生産科 3年 山下 花音

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・農産物販売会【春の苗販売会、秋の農産物販売会、文化祭、各種販売イベント参加】
- ・ふれあい動物園【地元の幼稚園生等を対象とし年間5回程度】
- ・農業を通じた学び合い（教え合い）【提案】

例）高齢者から農業技術を教えてもらう。

高校生が高齢者に ICT 技術などを教える。

地域農家と交流し農業の魅力を聞く。

- ・アグリカルチャーサロンの開催【提案】

例）様々な年代の人が参加できるアグリカルチャーサロンを開く。

お茶会（農家さんが育てた野菜でみそ汁や漬物を作り、提供する）を開く。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・ひとりひとりが自分の得意分野を活かせる活動を増やす。【提案】

例）各学校の農業クラブ活動に関する動画を作る。

編集が得意な人、写真を撮るのが得意な人、台本を考えるのが得意な人などに分かれてそれぞれの得意分野を活かせるようにする。

- ・農業クラブに所属している他の学科と共同プロジェクトをする。【提案】

例）各科で学んでいる分野を活かして目標を達成する活動をする。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・SNS を使った発信（Instagram、YouTube、TikTok、X など）。【Instagram 実施】

例）各高校が実習などで行なっていること。

地域とのイベントの様子。

スマート農業を使っている様子。

- ・農業の大変なところも含めて魅力であるという考え方への変化を求める活動。【提案】

例）高校生や地域の農家のリアルの声（大変だけどやりがいを感じている話など）

相談ができる機関・団体等を紹介する。

- ・地域の食堂&ショップづくり【提案】

例）地域の農家が作った野菜だけをつかって作る料理提供や農産物販売

農家の経営に係る工夫や農業の魅力を伝えるポスター展示

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立羽生実業高等学校

園芸科 3年 佐藤 黎

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・体験・見学： 播種・収穫体験、田植え・稲刈り、農場開放、搾乳・重機操作体験、花植え
- ・食育・料理： 多世代型子ども食堂、収穫物での料理会・パン作り、地産地消の食事交流
- ・イベント： 収穫祭・マルシェ、農業クイズ・カルタ大会、スポーツ・音楽イベント
- ・学び・交流： 農家講演会、今昔の農法を学ぶ世代間交流、特産品の紹介
- ・地域貢献： 除草・清掃、農作業ボランティア、防災訓練・ハザードマップ作成

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・個性の活用： 得意分野別の役割分担、分科会での調べ学習、マルシェプロデュース
- ・探究・SDGs： 実習の課題解決・改善の議論、SDGs 目標と活動の紐付け
- ・広報・発信： 公式 SNS・HP・ポスターでの活動記録と目標の可視化
- ・組織・他校連携： 他校との交流・データ収集、本部と役員の連携強化
- ・実践・楽しさ： 収穫物での調理、クイズ、遊びを取り入れた農作業やボランティア

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- SNS・動画： 作業風景や若手農家のやりがい発信、偏見を払拭する Q&A・インタビュー
- 先端技術・制度： スマート農業や海外技術、雇用就農・補助金制度の紹介
- 次世代教育： 小中学生向け出前授業・講習、早期の農業・自然体験
- 外部連携： 影響力のある人の体験発信、地元企業・飲食店とのコラボ
- 本質・SDGs： 環境配慮農法・食品ロス削減の発信、「命を支える誇り」の周知
- 体験・販売： 直売所での PR、文化祭出店、スイカボウリング等のユニーク企画

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立園芸高等学校

園芸科 2年 黒木 理央

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の方向けに、ガーデニングに関するワークショップの実施方法について考える。基本的な庭づくりや草花の栽培等を行い、ガーデニング(庭づくり)で使用した草花を使い、簡単に活用できるアレンジメントのワークショップ等を行う。また、庭の花が咲いた後の楽しみ方まで知れるようなワークショップについて考えられると咲いて枯れるだけではないもっと素敵な楽しみ方の選択肢が増えると思う。最近では定年後にガーデニングをするという年配の方や、インテリアや癒しとして緑を育てる方も増えているので、そのような方々が、座って行うアレンジメントの時間を通して話す機会が増えると思う。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が取り組むためには明確な目標や行動の可視化が必要だと思う。色々な個性を持つ人がいる中で、明確な正解が分からない状態では全員が意欲的に取り組むのは難しいと感じる。

全員のできる活動では、自分達が今まで実習で培ってきた知識と経験を生かした、地域の人との交流などがあると思う。例えばプランターや近くの市民農園を想定した家庭菜園のワークショップなどが挙げられる。野菜を作るのは大変なことも多いが、採れたての野菜はとてもみずみずしく新鮮で格別に美味しいため地域の人にも自分で作る新鮮な野菜を食べてみてほしいと思う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

「農業は力仕事が多く、炎天下での作業も多くて大変そう」などといった考えを改善していく必要があると思う。例えば、スマート農業を前面に押し出した広告のような農業の効率化した先の魅力を発信していくのも一つの方法だと思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立相原高等学校

畜産科学科 3年 荒井 天照

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」
誰でも気軽に参加できるイベントを開くことと学校の授業などを通し、地域の奉仕活動や体験をすることの2つを行うことが効果的だと思います。具体的には、公園などで、老若男女問わず誰もが気軽に参加できる季節のイベント（正月のお手玉や羽根つき、夏のスイカ割りやBBQ、冬の雪合戦、定期的なビンゴ大会など）を開催し、日常的な交流のきっかけを作ります。さらに、学校と連動した地域活動を通じて、子どもたちと住民の絆をより深めていきます。例えば、小学校低学年は近所のゴミ拾いや草むしりといった奉仕活動を通じて地域の方々に活動を知ってもらい、中学年・高学年では、自分たちで育てた野菜や果物を近所のスーパーや直売所で販売することで、より地域に根ざした活動を行います。このように、世代を問わないイベントによる交流と、子どもたちの地域に根ざした活動を進めることで、地域全体が仲良く、より温かく活気のあるコミュニティを築くことができると思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」
まず、同じ高校の異なる学科の授業を体験し、自分の学科以外のクラブ員がどのような勉強をしているのかを知ることで、お互いをリスペクトする気持ちが大事だと思います。次に、農家の方々のもとを訪れて実際の現状を学び、自分たちの学んでいることが社会においてどれほど重要であるかを実感することで、日々の授業に対するモチベーションを高め、さらに、県内だけでなく県外の学校とも連携し、他校の取り組みを学ぶことで視野を広げる。そして、農業クラブ本部役員だけでなく、一般のクラブ員も県連などの行事に参加してもらうことで、自分もクラブの一員であるという意識を高めていく。こうした多様な経験や交流を通じて、全員がやりがいを感じながら活動に参加できる環境をつくっていくことが重要です。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」
まず、幼少期から土や動物へ触る機会を増やすことが大切だと思います。例えば、小学校の授業で作物を育てる時間を設け、育て方や実際に育てる楽しさを身をもって知ってもらったり、遠足などで動物園やふれあい動物園に行き、動物と触れ合うことで、小さい頃から動物や農業に興味を持ってもらいます。次に、私たち農業高校生が、日々の授業や活動を通して感じている等身大の気持ちやリアルな体験を、SNSを通じて発信する。高校生の言葉で伝えることで、農業のありのままの魅力や楽しさが身近に伝わります。さらに、私たちが地域の小学校へ出前授業に行ったり、小学生や幼稚園、保育園の子達を高校に招き、自分たちが普段やっている授業の内容やその楽しさを直接伝える活動を行います。このように、小さい頃からの体験学習や、農業高校生によるSNSでの発信、子どもたちとの直接的な交流を組み合わせることで、農業に対する親しみやポジティブなイメージを効果的に広げていくことができると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県下高井農林高等学校

地域創造農学科 3年 滝澤 祐真

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の方が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

老若男女問わず地域の方が参加できる活動や交流として、地域で行われるお祭りやイベント、地域の花壇管理やごみ拾いなどのボランティア活動、地元食材を使い郷土料理を作る交流会などが考えられると思います。地域で行われるお祭りやイベントでは、伝統文化の体験や農業体験など様々な活動で交流することができます。また、ごみ拾いなどのボランティア活動では会話をしながら活動することで、地域を綺麗にするだけでなく世代を超えたつながりをつくることができます。さらに郷土料理を作る交流会では、地域に昔から伝わる料理を子どもから高齢者まで一緒に作ることで親睦を深めることができます。と思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に活動するためには、活動の内容だけでなく、参加することで得られる経験やメリットを分かりやすく伝えることが大切だと思います。例えば、イベントやボランティア活動に参加することで、地域の方々と交流できたり、普段の授業ではできない経験ができることを紹介し、クラブ員に参加してみたいと思ってもらうことが大切だと思います。また、活動後に写真や感想を共有し、参加していないクラブ員にも活動の楽しさを伝えることも必要だと思います。

また、クラブ員全員ができる活動には、地域の課題解決につながるボランティア活動があると思います。本校では、地元自治体と協力して、地域の観光資源である「菜の花」に見た目が似ている外来植物「ハルザキヤマガラシ」の駆除活動を毎年行っており、クラブ員にもボランティアとして参加を呼び掛けています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためには、SNS や地域との交流を通じて、農業の楽しさや魅力を積極的に発信していくことが大切だと思います。例えば、農作業の様子や作物が成長していく過程、収穫する楽しさなどを SNS で紹介することで農業を身近に感じてもらえることができます。さらに、農業体験や収穫体験など、実際に農業に触れることのできる機会を設けることも重要だと思います。子どもから大人まで参加できるイベントを開催し、種まきや収穫などを体験してもらうことで、農業への興味や関心を持ってもらえると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県南安曇農業高等学校

グリーンサイエンス科 2年 山浦 蒼奈

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

南安曇農業高校は3学科9コースに別れていて、各コースが食品研究部、草花研究部、果樹研究部、植物バイオ研究部、動物研究部、微生物研究部、設計研究部、土木研究部、環境研究所の9つの研究部があり、安曇野市生涯学習推進講座の一環として、安曇野市と協働して、学校開放講座があります。学校開放講座とは農業クラブ活動の柱となる活動のひとつです。9つある研究部それぞれで特色ある講座を企画し、地域の方を学校にお招きし、生徒達が講座を企画から運営まで行うことはもちろん、生徒が講座の先生となって、学んできた農業の技術や知識を教えるというイベントを年間通して各研究部が2回～4回実施しています。今年度は小学生から70代までの幅広い年齢層から参加者が集まり、まさに、老若男女問わず地域の人に参加できる活動だと考えています。

他にも安曇野市内の小学校や地域の公民館に行き、果樹や花の寄せ植えなど安曇野地域の幅広い年齢層の方と交流をしています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

各コース、食品研究部、草花研究部、果樹研究部、植物バイオ研究部、動物研究部、微生物研究部、設計研究部、土木研究部、環境研究所の9つの研究部があり、全生徒はそのうちのどこかの研究部に所属し、プロジェクト活動を行っています。年1回、校内発表会で全ての研究部がプロジェクトの成果は発表しています。

また、FFJ環境調査では、全校生徒が環境調査を実施し、全員から提出してもらっています。

このように全校が参加して協力していくことによって、農業クラブに興味・関心を持ち、意欲的な取り組みを行っていければと考えています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

若者の農業就業意欲の低下による後継者不足といった高齢化やそれに伴う人手不足などで農業従事者が減っており、本校では地域の保育園、小学校との交流、各研究部が年間を通して学校開放講座を開講して地域の方々に多く参加していただくことで地域との繋がりを持ち、授業の様子や栽培経過などを学校のHP、InstagramなどのSNSを有効活用して、農業の魅力を発信していければと考えています。

また、現在ではトラクターなどの農業機械の自動操縦やドローンなどによるスマート農業が行われています。本校でも外部講師に依頼して田植え機による自動操縦、ドローンの操作など最先端技術を学び、農業のイメージアップや魅力を発信していければと考えています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立鶴城丘高等学校

総合学科 3年 西ノ村 美緒

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

(1) 地域イベントへの参加・販売

老若男女問わず地域の人に参加できる活動といえば、地域イベントが挙げられる。その場を活用し、各校で生産した農産物を使ってラベンダースティックやしめ縄作りなどの体験活動、農産物の販売活動を実施することで農業学生と地域の人との交流を図ることができる。

(2) 世代間交流

地域の小学校や幼稚園を農業高校へ招待し、農業体験をしてもらうことにより、農業への興味関心を持ってもらう。また、地域の農家さんに協力してもらい種まきや収穫体験をすることで、高齢者には昔の農業の知恵を教えてもらい、子供には農業体験をしてもらい、農業学生がその橋渡しをするという繋がりができる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

一部の役員だけでなく「全員参加」にすること

(1) 活動内容の共有・可視化

農業クラブ員全員が活動に興味関心を持つためには、活動内容を分かりやすく共有することが大切である。そのため、活動の予定や内容、活動している様子を掲示物やSNSなどで発信し、クラブ員全員が活動について知る機会を増やす。また、活動の成果や様子を写真や動画で記録することで、自分たちの活動を振り返ることができ、次の活動への意欲向上にもつながる。

(2) 農業鑑定競技会

農業鑑定競技会は出題範囲が広く、どこから勉強を始めればいいのかわからないという声をよく耳にする。そこで、分野ごとの勉強会を実施したり、デジタル化した模擬農業鑑定競技会を行ったりすることで、学習しやすい環境を作る。デジタル化することで、いつでもどこでも勉強することができ、結果を記録することもできる。その結果から自分の苦手分野を把握し、具体的な目標を設定することで、計画的に学習することができる。これにより、農業鑑定競技会への参加意欲や学習意欲を高めることができる。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業＝「汚い・きつい・大変」というマイナスイメージだけではないと伝えること

(1) SNSでの情報発信

農業の魅力を多くの人に知ってもらうためには、SNSを活用した情報発信が効果的だと考える。農業高校生の活動風景や、農産物が成長していく様子、農業機械を使った作業などを写真や動画で発信することで、農業の楽しさや魅力を伝えることができる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立甲南高等学校

総合学科 2年 蒔田 情

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

農産物の販売や季節ごとのイベント（田植え、苗の定植、収穫体験、バーベキュー、稲刈り体験、芋ほり、焼き芋、餅つきなど）を通じて、地域の誰もが気軽に参加できる交流の場を提供します。こうした体験活動は、地域の伝統的なノウハウや文化を次世代へ継承する貴重な機会となり、若者にとって農業をより身近なものにしていくことにつながります。さらに、都市住民と農村地域を結ぶグリーンツーリズムの拠点としても機能し、訪れる人々が自然と触れ合い、地域住民との温かいコミュニケーションを通じて、多様な人々が交流できる場を目指します。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

FFJ の環境調査の取り組みをきっかけとして、身近な環境や農業に着目する機会を、高校入学時に上級生から新入生へ引き継ぐ場をつくります。その経験をベースに、各自が興味を持った作物や野菜、動物などの観察や調べ学習を行い、発表し合うことで、農業に対する新たな視点や魅力に気づくことができます。また、各学校が独自の工夫を凝らした取り組みを展開することで、自分たちで新しい企画をつくり上げる楽しさを味わい、意欲的に活動へ向き合う姿勢を育みます。たとえば、販売会に向けたのぼりやはっぴなどのオリジナルデザイン作成、アイデアを競い合うコンテストの実施など、実践的な活動を通じて学びを深めていけると思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業は私たちの生活に欠かせない食糧生産を担うだけでなく、自然環境を保全する重要な役割も果たしています。こうした農業の価値を体験イベントを通じて発信し、種まきから収穫に至るまでの苦労とその先にある喜びややりがいを広く知ってもらう必要があります。具体的には、SNSを活用して生産現場の裏側など普段は消費者が目にするものがない魅力を発信します。さらに、スマート農業などの最新技術を紹介し、省力化やデジタル化が進むことで特別な知識がなくても誰でも取り組めるという、これからの農業の姿を積極的にアピールしていく必要があると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 島根県立松江農林高等学校
生物生産科 3年 與倉 ななほ

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- 地域の人と一緒に農業体験
 - * 野菜の植え付け・収穫体験 * 田植えや稲刈り体験 * 季節ごとの農作業体験
- 地域交流イベント
 - * 収穫祭 * 地元の食材を使った料理教室 * 野菜や加工品の販売会
- 世代間交流
 - * 高齢者から昔の農業や地域の伝統を教えてもらう
 - * 小さな子どもに高校生が農業を教える * 昔遊びや郷土料理を一緒に体験する
- 地域をきれいにする活動
 - * 地域の清掃活動 * 花壇づくり * 学校や地域での緑化活動

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ①全員が興味・関心を持つための工夫
 - * クラブ員一人ひとりの意見やアイデアを聞く機会をつくる
 - * 自分たちで活動内容を考え、企画する * 学科や学年を超えて交流できる活動を増やす
 - * 活動の目的や成果を分かりやすく共有する
 - * SNS や校内放送、掲示などで活動を知ってもらう
 - * 楽しさだけでなく、達成感を感じられる活動にする
 - * 小さな役割でも全員に担当を持ってもらう * 参加しやすい雰囲気づくりを大切にする
- ②クラブ員全員ができる活動
 - * 校内の清掃・環境美化活動 * 花壇やプランターの整備 * 野菜や草花の栽培
 - * 地域の清掃活動やボランティア * 農産物販売やイベントへの参加
 - * 学校行事での農業クラブ活動のPR * 収穫物を活用した調理・加工
 - * 地域の人との交流活動 * 募金活動やSDGsに関する活動
 - * 農業に関するクイズやレクリエーション * SNSなどを活用した活動報告

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ①現在の農業に対するイメージ（マイナスイメージ）
 - * 大変そう * 収入が不安定そう * 体力が必要そう * 若者には人気がない* 古い仕事
- ②農業の魅力
 - * 最新技術を活用したスマート農業 * 自分で経営やアイデアを生かせる
 - * 食を通して人の生活を支えられる * 自然と関わることができる
 - * 6次産業化など仕事の幅が広がっている
- ③魅力を発信する方法
 - 1. SNS を活用する
 - 写真や動画で発信、特に若者に向けて発信するためには、「大変さだけでなく、楽しい部分やカッコいい部分」を見せることが重要。
 - 2. 実際に農業を体験してもらう
 - 農業に興味がない人でも、実際に体験することでイメージが変わる可能性がある。
 - 3. 農業高校生自身が魅力を発信する
 - 私たち農業クラブの生徒が、農業について学んでいる立場から発信することも大切。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 広島県立沼南高等学校
園芸デザイン科 1年 渡邊 一爽

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

1つめは、道の駅での農産物の販売です。学校から近い道の駅で、私たちが栽培・収穫した野菜などの農産物の販売実習を行っています。その際に地域の方や遠くから来ているお客さんと交流できます。そして、地域の伝統野菜である青大キュウリや下志和地青ナスも販売しています。地域の伝統野菜を販売することで地域に興味・関心をもってもらい、地域との交流につながると考えました。

2つめは、食育活動です。本校では、栽培・収穫した野菜を地域の学校給食に提供をする取組があります。去年は、ダイコンを提供しました。今年は、去年に引き続き、ダイコンと地域の伝統野菜である下志和地青ナスを提供します。そして、提供した野菜が給食として出される日に小学校に行き、給食の材料がどのように作られているかを、小学校の児童に教えます。そうすることが食育活動になり、地域の世代を超えた活動や交流につながると考えました。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

道の駅での生産品販売です。本校では、私たちが授業の時間や夏休みの期間中に栽培・収穫した野菜などの農産物を、学校から近い道の駅で校外実習として販売しています。

テントや机、椅子を貸していただいて、道の駅の建物の前に販売エリアを設置するところから始めるのですが、その段階から道の駅に買い物に来られた方々に声をかけていただけます。販売が始まってからも声をかけてくださったり、「沼南高校の子か～」と感心をもってくださいる地域の方々が多いです。

学校外での販売活動を実施することで、私たちが栽培・収穫した生産品が地域の方々の手に渡り、私たちの自信になって、意欲の向上につながると思いました。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

学校で栽培した野菜を地域の学校給食に提供することです。本校では、地域の方に地域の伝統野菜である下志和地青ナスの苗をいただいて栽培しています。その栽培した下志和地青ナスを地域の学校給食で提供し、地域の小・中の児童生徒に食べていただいています。その際に小学校で、下志和地青ナスの伝統や栽培方法について説明し、食育活動につなげたいと考えています。そして、説明を聞いて給食を食べた小学生が家に帰ってその話を家族にすることで、農業・農業高校生のイメージアップすると考えます。

本校では、農作物の栽培に興味をもつとともに、農業機械に興味をもっている生徒も多くいます。日常では見ないような農業機械を学び、農業機械の操作方法について実習で学んでいます。

このような農業機械についての学習の写真や動画を SNS で発信することで興味をもち、魅力を感じてくれると考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立高志館高等学校

食品流通科 3年 田口 永和

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

1つ目に「農業体験イベントの実施」である。田植えや収穫、野菜の袋詰めなどを一緒に行う。作業後には収穫した農産物を使った料理を囲むことで、世代を超えた交流につながれると考える。

2つ目に「地域農産物を使った料理交流会」である。地元の野菜や米を使って、郷土料理や簡単な料理を参加者と一緒に作る。農業に詳しくない人でも参加しやすく、地域の食文化を知るきっかけにもなると考える。

3つ目に「農業・地域交流フェスティバル」の開催だ。農産物の販売や農業クイズ、餅つき、野菜の収穫体験など、幅広い世代が楽しめる企画を行う。農業を身近に感じてもらうとともに、地域住民同士が交流できる場を作ることができる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

1つ目に「クラブ員主体の活動を企画する」ことである。例えば、学校で栽培した農作物を使った加工品の商品化などクラブ員自身がアイディアを出して行動する活動を行う。自分たちの考えをカタチにすることで、責任感や達成感が生まれ活動への意欲を高めることができる。

2つ目に「農業イベントの開催」である。地域イベントでの食農体験や、班対抗の栽培コンテスト、新商品コンテストなど、楽しみながら農業や食について学べる活動を行う。レクリエーションを取り入れることで学年や学科を超えてクラブ員同士が交流する機会にもなる。

3つ目に「活動の成果を目に見えるカタチにする」ことだ。例えば、クラブ員を班にわけ班ごとに一つの作物を育て、その過程で収量や品質を記録し、農業クラブの SNS や学校内の掲示板、発表会などで活動の様子を発信し紹介することで自分たちの活動がどのような成果につながったのかを実感でき、次の活動への意欲にもつなげることができる。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

1つ目に「農業の“楽しさ・面白さ”の発信」だ。作物の成長過程や収穫の喜び、育てた農産物を食べる楽しさなど実際に体験しなければ分からない魅力を写真や動画で発信する。特に農業高校生だからこそ伝えられる「農業のリアルな楽しさ」を発信することが大切である。

2つ目に「農業を身近に感じてもらえるイベントの実施」である。収穫体験や農産物販売、地域の方を対象とした農業体験。そして子ども向けの食育イベントなどを行うことで、幼い頃から農業に興味を持ってもらうことができる。実際に見て・触れて・食べる体験を通して農業の魅力を伝えていくことが大切である。

3つ目に「農業と最新技術のかかわりの発信」を行うことである。地域の農家や農業法人、JAなどと連携し、スマート農業やドローン、AI を活用した現代農業や農業を職業として選んだ人の想いや生き方を知ってもらうことで、農業を進路の1つとして考えるきっかけを作る。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 沖縄県立南部農林高等学校

生物資源科 2年 崎浜 由衣

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・南部農林高校では、地域振興のため、販売会(南農市、南農祭)や地域の特色を活かした体験(パン作り、農作物収穫、ミニ動物園、木工パズル作り、スノーボール作り)をしています。しかし、リーダー研修や他校との交流を重ねるうちに活動のPR方法についての問題点を発見したため今回のクラブ員代表者会議では、他の高校の取り組みを柔軟に受け取り、学校に持って帰って改善策発案に充てたいです。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・私たちは、興味関心や意欲的態度を高めるために農業クラブ員として、イベント活動内容の掲示や、農業クラブの活動で豆記者(他クラブ員へのインタビュアー)を1年生で行い、農業クラブ新聞の発行を行っています。それを踏まえさらに生徒の興味関心を高められるように他校の皆さんの意見や活動を聞いて自校の活動に取り込みたいです

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・南部農林高校では、イメージアップのため近隣の中学校に農業クラブや農業高校についての説明会、盲学校、特別支援学校の生徒児童を招き農業体験や交流をし、HPでは各学科の紹介や学科通信の発行で情報を広げる活動をしています。しかし、ターゲット層が限られるなどの課題点があるため、そこについての情報を今回のクラブ員代表者会議で集め持ち帰りたいです

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道旭川農業高等学校

食品科学科 3 年 香面 結月

食品科学科 2 年 入江 光輝

農業科学科 2 年 田井 萌乃香

1 第 1 分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の人が老若男女問わず参加・交流できる活動として挙げられるのが、年齢に関係なく参加できる「こども食堂」だと思います。本校ではこども食堂の高校生スタッフとしてクラブ員が活動していますが、子どもから高齢の方まで一緒に楽しめる農業体験や調理などは世代間交流につながると感じています。また、高齢の方が昔の遊びや地域の歴史を教えてくれたり、若者が SNS の使い方や今の流行を教えたりすることで、お互い知らなかったことを知る交流機会にもなります。農業体験や、学校での学びを介した交流機会を農業高校が創出することで、地域の方が安心できる第二の居場所として存在できるようになると考えます。私たちが地域の課題に関心を持ち、地域の魅力を発信し、一人でも多くの人に興味を持ってもらうことで、より良い地域活動につなげたいです。

2 第 2 分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全員の興味を引き出すには農業を学ぶだけでなく、実際に体験したり、学年や学科を越えて交流したりする機会を増やすことが大切だと考えます。楽しみながら参加できる活動を行うことで、日々の学習や農業クラブ活動に関心が薄いクラブ員にも興味を持ってもらえると思います。例えば、野菜の栽培や収穫体験、農業クイズなど、誰でも気軽に参加できる農業クラブ行事を取り入れることが効果的だと思います。また、先輩方から農業の知識や技術を学び、自分が学んだことを他のクラブ員に伝えることで、互いに刺激を受けられます。さらに、クラブ員全員で協力して一つの活動をつくることも大切だと思います。一人ひとりが得意なことを生かして役割を持つことで参加意識が高まり、より意欲的に活動できると思います。交流で受ける刺激や、自分の「やってみたい」を実現できる環境こそが、クラブ員の興味・関心を引き出すと考えます。

3 第 3 分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者が減っている現状を防ぐには、「稼げない」「きつい」などというネガティブイメージを変えて、現代的な魅力を発信していく必要があると思います。具体的に考えた二つの解決策の一つ目は、スマート農業によるデジタル化の姿をアピールすることです。本校でも活用しているドローンや自動運転トラクターなどを活用した「先進的で格好いい仕事」としての姿を SNS などで広めることで、若い世代の関心を惹きつけられると考えます。

二つ目は、「食を支える起業家」としての側面を強調することです。単に作物や野菜を栽培するだけでなく、加工や販売まで自分たちで手掛けたり、ブランド化してしっかり利益を出したりするビジネスとしての可能性を示すことが重要だと考えます。技術を使って働きやすくすることと、ビジネスとしてのやりがいの双方を伝えていくことが、農業のイメージ向上と若い世代の参入につながると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 愛媛県立大洲高等学校

生産科学科 1年 清水 大雅

食品デザイン科 1年 赤松 陽

生産科学科 1年 萩森 徠夢

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校の前身である大洲農業高校では、施設園芸や特産の果樹（キウイ・ブドウ等）、水稻など多岐にわたる大洲の農業基盤を活かし、近くの小学校に案内して農業体験をする「大農うきうきわくわくスクール」（年3回）、学校の真裏にあるこども園の園児対象にした交流会（年2回）、比較的年齢層の高い方々の来場が多い「大州・小田エビネ展」、肱川河川敷花いっぱい運動（ひまわり・コスモス・菜の花）、福祉・介護施設への訪問などがあるがこれらは、年齢や対象が限られてしまう。年齢や性別を問わず交流できるのは農業祭（11月上旬の土曜日）だが、交流活動とは言い難い。

以前は肱川河川敷菜の花の時期に大洲農業高主催の「菜の花フェスタ」を実施していた。吹奏楽・和太鼓・教員による手品などのステージ発表、部活動や学科の販売物・学校近隣の商店に outlets を募り、新聞広告まで出して盛大に開催していた。開催が3月20前後の忙しい時期だったため、平成13～25年で終了となったが、2年前の令和7年3月に新・大洲市制20周年のとき大洲市主催で実施された。このような全世代が主役になれるイベントを大洲高校の生徒・生産物・加工品を使った何かを活かし、大洲農業高校の伝統と、新設された大洲高校農業科の新たな活力を融合させ、全住民が農業を軸に繋がり続ける持続可能な地域コミュニティの拠点を築いていきたいと考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全員が意欲を持つには、個人の得意分野と結びつけることが大切で、例えば、料理が好きな人はレシピ開発、パソコンが得意な人はデータ管理、デザインが好きな人は製品のラベル作りなど、一人ひとりが「自分の強み」を活かせる役割を見つけることが関心につながると考えます。全員ができる活動としては、地域の特産品を生かした加工品の開発することで、当事者意識が生まれ、農業の多様な楽しさを実感しながら意欲的に取り組むことができると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージアップには、最先端機器の活用を見せることが重要。具体的には、大洲農業高校にあるスマート田植え機・ラジコン草刈り機の技術の活用やドローンによる見回り、土壌スキャンによる肥培管理など、高校生の視点でSNSを使い、短い動画などで視覚的に発信します。また、大洲特産のカキやナシなどを使った「見た目が華やかで映える」限定スイーツを企業と共同開発し、その裏側の苦労や楽しさをストーリーとして発信することも有効です。高校生が生き生きと農業を楽しむ姿や、自分たちの手で地域を豊かにしていく達成感をリアルに伝えることで、若い世代に「農業は新しくて魅力的な仕事だ」というイメージを届けられます。

参加者課題レポート

第 1 分科会 第 2 会場

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流は
どのようなものがあるだろうか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第 2 会場	新潟県立加茂農林高等学校	香川県立笠田高等学校

第 1 分科会 第 2 会場

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	北海道	剣淵高等学校	総合学科	2	北嶋 晃羽
2	栃木県	宇都宮白楊高等学校	食品科学科	2	出井 美桜
3	群馬県	大泉高等学校	生物生産科	3	田村 小雪
4	埼玉県	鳩ヶ谷高等学校	園芸デザイン科	3	奥野 百々叶
5	東京都	農芸高等学校	食品科学科	2	清水 はつね
6	神奈川県	三浦初声高等学校	都市農業科	3	鈴木 晴捺
7	長野県	須坂創成高等学校	園芸農学科	3	阿部 佑惟
8	福井県	若狭東高等学校	生活創造科	3	山崎 真愛
9	愛知県	半田農業高等学校	農業科学科	3	浦野 珠愛音
10	滋賀県	八日市南高等学校	花緑デザイン科	3	西村 優澄
11	岡山県	高松農業高等学校	畜産科学科	3	坂本 悠輔
12	山口県	田布施農工高等学校	生物生産科	2	廣谷 心春
13	佐賀県	伊万里実業高等学校	フードビジネス科	3	徳田 美紗子
14	沖縄県	南部農林高等学校	生物資源科	1	田尻 宙

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
15	新潟県	加茂農林高等学校	生産技術科	3	五十嵐 梓
16	新潟県	加茂農林高等学校	生物工学科	3	伊藤 夢華
17	新潟県	加茂農林高等学校	生産技術科	2	増子 育美

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
18	香川県	笠田高等学校	植物科学科	3	平 尾 健 真
19	香川県	笠田高等学校	農産科学科	3	大 西 結 万
20	香川県	笠田高等学校	農産科学科	3	田 代 悠 稀

「地域とともに学び、未来へつなぐ」

北信越ブロック 新潟県立加茂農林高等学校

生産技術科 3年 五十嵐 梓

生物工学科 3年 伊藤 夢華

生産技術科 2年 増子 育美

1 はじめに

北信越ブロック連盟は新潟県9校、長野県11校、富山県5校、石川県4校、福井県3校の5県32校で、日々、農業クラブ活動に取り組んでいます。新潟県連盟には、新発田農業高校、加茂農林高校、長岡農業高校、高田農業高校の4校の農業高校と、村上桜ヶ丘高校、佐渡総合高校、巻総合高校、十日町総合高校、柏崎総合高校の5校の総合高校があり、合わせて9校の単位クラブ、2,065名（全国13位）のクラブ員で活動しています。

私たちが住む新潟県は、日本海に面し、広い平野と豊かな自然に恵まれ、山間部には多くの森林や河川があり、日本有数の豪雪地帯として有名です。そして、その自然豊かな地でコシヒカリをはじめとする水稻栽培が盛んに行われています。

2 加茂農林高校について

私たちが通う加茂農林高校は、明治36年に新潟県立農林学校として開学し、創立124年を迎える県内屈指の伝統校です。校門は、当時の東京大学農学部を模した赤レンガづくりの「赤門」と呼ばれ親しまれ、その赤門から続く植物園は、季節によりさまざまな表情を見ることができます。広大な実習地や充実した施設・設備を活用した実践的な学習に加え、近年ではスマート農業やICTを取り入れた教育にも力を入れ、地域の企業、大学などとも積極的に連携し、地域の課題を私たち自身が発見し、主体的に学び、解決する力を育んでいます。



図1 加茂農林高校「赤門」

本校には、生産技術科、環境緑地科、食品技術科、生物工学科の4学科があり、1年時には農業科として、農業の基礎・基本を幅広く学び、2年時から4学科8専攻に分かれ学習しています。

<学科の学び>

生産技術科 作物専攻、野菜・花専攻 果樹専攻、動物専攻	農業の社会的・経済的意義を理解し、農業経営に関する基礎や農業生産に関わる植物栽培・動物飼育の知識・技術の習得を通して、人間性豊かで、広く社会に貢献できる能力・資質を育成します。
環境緑地科 緑地工学専攻 環境土木専攻	森林・農地の保全、森林資源の利用、都市環境・公共施設の緑化・デザインなどについての知識や技術を習得し、身近な環境緑化に関わる業務に従事する者として必要な能力と態度を身につけます。
食品技術科 食品製造専攻	農産物の生産や特性を踏まえ、その流通や加工に関する知識や技術を習得し食品産業等の農業関連産業に関わる人材を育成します。
生物工学科 生命情報専攻	農業生産に活用できるバイオテクノロジー技術の基礎的・基本的な知識・技術の習得を図るとともに、より高度な知識や技術を体験的に学びます。

3 地域とともに学ぶ加茂農林高校

私たち加茂農林高校は、地域との関わりを特に大切にしています。日頃の挨拶をはじめ、地域の方々との何気ない会話や交流も、私たちにとって大切な学びの一つです。

日々の授業で実習をしていると、地域の方から、「この作物は何?」「どうしたらこんなに大きくなるの?」と声をかけていただくことがあります。私たちが愛情を込めて育てている作物について説明し、それを地域の方が興味を持って聞いてくださることは、とてもうれしいことです。

私たちは地域とのつながりを身近に感じ、そして、「地域に支えられている私たちだからこそ、今度は地域に貢献したい」という思いを持ち、地域とともに学んでいます。



図 2 専攻学習

4 実践1 子どもたちと農業をつなぐ ～次世代との交流～

本校では毎年、青海会が中心となり、小学生を対象とした「アグリ・スタディー・ツアー」を開催し、サトイモやサツマイモなどの植え付けや収穫体験しています。自分たちの手で植えた農作物が成長し、収穫できるまでを体験することで、農業の楽しさや、食べ物を育てることの大切さを感じてもらいたいと考えています。また、ブドウの収穫体験では、糖度の測定や皮を使用した実験なども行っています。こうした活動を通して、地域の子どもたちに農業の魅力を伝え、農業や地域に興味を持つきっかけをつくりたいと考えています。



図 3 アグリ・スタディー・ツアー

現在は、小学生を対象とした活動が中心ですが、将来的には、子どもから高齢者まで、幅広い年代の方々に参加できる活動へと発展させたいと考えています。

私たち高校生が農業の知識や技術を伝える一方で、地域の方々からは、これまで培ってきた農業の経験や昔の暮らしについて教えていただく。

このように、「教える側」と「教わる側」を固定するのではなく、それぞれが持っている知識や経験を持ち寄り、互いに学び交流するなど、世代の違う人たちが一緒に農業を体験することで、新しいつながりが生まれ、こうした地域との交流が必要だと考えています。

5 実践2 地域課題への挑戦 ～竹資源の活用～

近年、全国的に放置竹林が問題となっています。高齢化や担い手不足などによって竹林の管理が難しくなり、利用されない竹が増えているのです。そこで、地域にある竹を「廃棄するもの」ではなく、「地域資源」として活用する活動を行っています。

新潟薬科大学との共同研究では、竹に常在する乳酸菌に着目しました。竹の乳酸菌を活用した商品づくりを目指して研究を進め、キムチなどの田上町の特徴を生かした食品



図 4 竹チップの研究

を作ること検討しています。また、放置竹林から切り出した竹をチップ化し、肥料として活用する取り組みも行っています。この竹チップ肥料の特徴を明らかにすることで、地域の農家の方々にも竹チップ肥料の存在を知っていただき、放置竹林の減少や竹林管理の負担軽減につなげたいと考えています。

また、田上ブランド協議会が主催する町おこし活動にも参加しました。竹チップを混ぜた畑でサツマイモを栽培するなど、地域の資源を地域の農業に生かす活動にも取り組んでいます。

このように私たちは、地域の課題を農業高校の学習につなげ、地域の方々や大学などと協力しながら、その解決方法を探っています。

6 実践3 地域の自然と文化を守る

私たちが大切にしている地域資源は、農業や竹林だけではなく、地域の自然や伝統文化を守り、次の世代へつなぐ活動にも取り組んでいます。その一つが、ホタルの保護活動です。本校内を流れる大皆川に生息するホタルを保護し、人工飼育した幼虫を放流しています。そして、小学校の児童を招き、保護者の方々と一緒にホタルを観賞する機会を設けています。

この活動を通して、子どもたちに地域の自然の美しさを知ってもらうとともに、地域の環境を守ることの大切さを感じてもらいたいと考えています。今後は、小学生とその保護者だけでなく、地域の方なら誰でも参加できる鑑賞会へと発展させたいと考えています。

また、加茂市の伝統工芸である「加茂紙」の原材料となるトロロアオイや楮も栽培しています。収穫した原材料を使用し、私たちも加茂紙づくりを体験しています。

私たち高校生が地域の技術を教えていただき、実際に加茂紙をつくることで、地域の伝統を学び、それを多くの人に伝えていくことが重要だと考えています。今後は、高校生だけでなく、小学生や中学生、地域の大人や高齢者の方々にも参加していただける体験会を開催し、世代を超えて加茂市の伝統を学ぶ場にしていきたいと考えています。

農業を学ぶ私たちだからこそできる方法で、地域の自然や伝統文化を守り、未来へつないでいきたいと思います。

7 これからの加茂農林高校 ～もっと多くの人とつながるために～

これまで私たちは、地域の方々と直接交流することを大切にしてきました。これからは、さらに発展させ、老若男女を問わず、地域の誰もが参加できる交流の場をつくらせていきたいと考えています。

春には田植え、夏には野菜の収穫やホタル観賞、秋には稲刈りやサツマイモの収穫、冬には加工品づくりや伝統文化の体験など、季節ごとに参加できる活動を企画します。子どもは農業を体験し、若い世代は地域の魅力を発信する。そして、大人には、これまでの経験や知恵を教えてください。それぞれの世代が役割を持って参加することで、単なるイベントではなく、地域全体で



図 5 町おこし活動

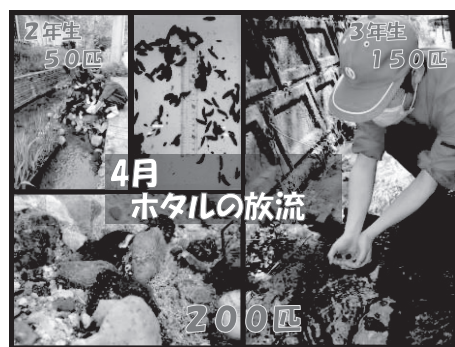


図 6 ホタルの保護活動



図 7 楮の皮むき

学び合う交流になります。

そのための新しい取り組みとして、今年から Instagram を始める予定です。週に一度、各専攻の活動を発信し、すべての専攻にスポットを当て、魅力を伝えていく計画です。

5月の田植えや9月の稲刈りなど、その時期にしか見ることのできない農業の姿があります。その時の「主役」を大切にし、実習の現場からリアルな農業の姿を発信していきたいと考えています。また、Instagram で活動を知らせるだけではなく、「参加してみたい」と思ってもらうための入口として活用したいと考えています。

あわせて、Google フォームなども活用し、農産物や商品のアンケートや味についての感想、「こんな作物が欲しい」といった地域を集める仕組みをつくり、次の活動に生かしていけるような、「作って終わり」ではない、「地域声を聞き、次の活動につなげる農業」を目指します。

また、地域の伝統文化についても、さらに連携を深めていきたいと考えています。加茂市を代表する伝統工芸品「加茂桐箆笥」の学習や組み木製作など、実際に手を動かして体験する機会を増やすことで、伝統工芸をより身近に感じてもらい、興味を持つきっかけをつくりたいです。

地域の農業、自然、伝統文化を、私たち高校生が学び、発信し、次の世代へつないでいく。

それが、これからの加茂農林高校が目指す地域連携です。



図 8 学校紹介動画



図 9 伝統工芸研修

8 まとめ

私たち加茂農林高校は、地域の方々と連携しながら、さまざまな地域課題に向き合ってきました。子どもたちへの農業体験、放置竹林の活用、ホタルの保護活動、加茂紙の原材料生産など、活動の形はそれぞれ違います。

しかし、これらの活動には共通するものがあります。それは、「地域から学び、地域とともに考え、地域の未来につなげる」という思いです。私たちは、地域との交流について考える中で、「誰かのために活動する」のではなく、「誰もが参加し、一緒に活動できる場をつくる」ことです。

子どもたちは、農業の楽しさを学ぶ。

高校生は、農業の知識や技術を伝える。

地域の大人は、これまで培ってきた経験や地域の歴史を教える。

それぞれの世代が持っている知識や経験を持ち寄り、新しい農業や地域の未来を考えていくことが、大切だと考えています。その交流を Instagram など発信することで、地域の中だけでなく、地域の外にも加茂農林高校の活動を届けたいと思います。

私たちが目指しているのは、学校と地域が一方通行でつながるのではなく、地域と学校が互いに学び、支え合い、ともに未来をつくっていく関係です。そして、その最初の一步は、地域の身近な場所にあります。

私たちは、地域の誰もが参加できる交流の場をつくり、そこで生まれた学びとつながりを未来へつないでいきます。

これからも加茂農林高校は、地域の中で学び、地域とともに成長し、未来に向かって挑戦していきます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道剣淵高等学校

総合学科 2年 北嶋 晃羽

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私が通う剣淵高校は、北海道北部上川地方にあり、農業が基幹産業の人口2,700人の小さな町にある町立高校です。地域に根ざした学校のため地域の方々と関わりを深めてきた行事がたくさんあります。地域の保育園、小学校、中学校との交流学习では、自分たちが普段学んでいることを子供たちの発達段階に合わせて伝えるようにしています。保育園児には絵本を読み聞かせや手遊び、小学生には田植えや花壇・菜園造成、中学生には草花の鉢替えや野菜の糖度調査、介護体験などをやってもらいます。これらをしっかり計画を立て実施することで、自分たちの技能や知識定着に繋げています。また、地域のお年寄りを学校に招くふれあい昼食会では、自分たちが考えたレクリエーションを行った後、全員で給食を取り交流を深めます。このように学校全体で日々学んでいることを伝達する異世代交流を行っています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

私が通う剣淵高校は全校生徒40名の小さな学校です。そこで私たちの学校では、人数が少ないという「フットワークの良さ」を活かし、個々の思いをすぐに反映できる農ク活動を目指しています。年度始総会は、クラブ員の意見を直接聞ける重要なものなので、議案書をクラスルームにアップし、各クラスでタブレットを見ながら審議してもらいます。また質問や要望があればスプレッドシートにアップしてもらい、その後の行事へ活かします。さらに今年度から各種委員会に執行部が入るようにしたことで意見交換がスムーズになり、農ク推進委員会では、「農ク三大大行事を盛り上げよう！」と行事カウントダウンボードを新設しました。農ク三大大行事では、上部大会に出場した先輩による事前講習会を実施。農業鑑定競技では執行部が作った模擬問題を掲示したり、実物に触れてもらうため廊下に設置しています。先生にこれらの問題や物品から実際の校内大会に出題してもらうことで、全体の学習意欲向上を目指しています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

本校には農家出身者が数えるほどしかいません。このため「農業と環境」で初めて農業を体験する生徒がほとんどで、カボチャ栽培を中心として様々な農業実習を行います。炎天下での実習は大変ですが、採りたての野菜・作物を食べたり、調理したり、自分たちで作ったものを町内へ販売に行くなど、農業の様々な魅力をたくさん経験します。また、農場では多品目の農産物を作っているので、それらの魅力を地域の方にも知ってもらおうと、昨年度ピザ窯を製作しました。そのピザ窯を活用し、収穫祭や中学生1日体験入学、農業クラブの大会でもピザを作って、他校のクラブ員や先生、審査員の方々にも味わってもらおうと大好評でした。私自身、このような経験を積んできたためか、農業に対する悪いイメージは無く、非農家の先輩も卒業後農業関連従事者になる人が何名もいます。また、他の職種に就く人も「農業実習は楽しかった。」という人が多いので、農業のイメージアップには、農業体験活動の充実が大切だと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立宇都宮白楊高等学校
食品科学科 2年 出井 美桜

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

◎本校は立地が駅近くで人が集まりやすいことを生かし、学校農場を区分けして市民農園のように体験ができる機会が設けられないかと考えました。作物を播種から収穫、そして食を通して体験することで、農業の楽しさを伝えたいと思いました。

◎小中学生を対象に、学科ごとの学習内容を体験してもらう研修プログラムの計画を考えました。小中学生や一緒に来てくれた保護者の方も含めて、農業の幅広い学習に関心をもってもらいたいと思いました。また、小中学生が、農業高校へ進学するきっかけにもなり得ると考えました。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

◎県内外の他校へ赴き、農場やどのような授業をしているのか交換留学のように見学することで、自分の学校にはない良い点を見つけたり、自分の学校の良い点を見つけることができ、学習への意欲も高まると考えました。

◎学科を超えたプロジェクト学習を推進することで、他学科の知識を得た上で、より深く専門的に学ぶことができると考えました。また、学科を問わずにプロジェクト学習が行えた場合、学校外へのPRとしても話題性が高まると思います。

◎クラブ員全員に参加できる行事の1つとして、鑑定競技が挙げられると思います。学科代表は1名ですが、そこに向かうまでの学習に力を入れるため、農業クラブ役員を中心とした勉強会や取り組みができるのではないかと考えました。

◎学校行事としてクラブ員全員で校内外の環境整備を行ったり、収穫祭などの行事を行うことで、意識をまとめることができると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

◎「食」を支える仕事としての魅力

農業は大変というイメージをもたれやすいですが、自分が育てた農作物が誰かの食卓につながっているということは、大きなやりがいにつながると考えます。農業は私たちの「食」を支える大切な仕事であることを発信することで、大変な仕事というイメージを払拭したいです。

◎地域に貢献できる魅力

農業は、農作物を生産するだけでなく、地産地消などを通して地域活性化につながります。自分が住む地域に貢献できる仕事であることを発信することで、農業の大切さを改めて知ってもらうきっかけになると考えます。

◎発信するために、地域のイベントや小中学校との交流会などへの参加などにより、機会を創造することが重要だと考えます。また、「農」や「食」をテーマとしたコンテストなどに応募することも、「地域」のPRになると考え、積極的に参加することが農業高校生ができる活動の1つだと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立大泉高等学校

生物生産科 3年 田村 小雪

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・親子で体験できる料理教室（学校で生産した野菜を使用し、生徒が一般人を教える）
- ・収穫祭や即売会などのイベントを学校開催したり、地域のイベント（産業祭や文化祭・夏祭り）に参加したり、住民との交流を図る
- ・学校の生産物を収穫体験した後、学校で調理しみんなで食べる。
- ・野菜苗植え方教室や田植え体験。お米の収穫後は体験者を対象とした試食会なども行う。（おにぎり祭り）

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・一人一人が意見を言いやすいポータルサイトの設置（良い意見を持っているのに、恥ずかしくて発言できない人もいる）
- ・話し合いに参加しやすい雰囲気づくり
- ・農クの活動を報告する機会をつくる。リーダーシップは現在、デジタルデータになっているが、ユーザー名やパスワードを入力する必要があるため、余計見ない人もいるのではないかと冊子で配布されていた方が、意識的に全員が見る。
- ・以前は群馬県内でも県内の農業高校生1年生全員対象とした年次大会（1年間の活動報告等）などを実施していて、普段農業クラブに関わっていない生徒も、農クとは何か知る機会があったが、コロナ後中止され、そういった機会が失われてしまった。この年次大会に参加すると、県内で行われているプロジェクト研究の内容や自分たち以外にも多くの農業高校生がいることがわかり、農業クラブへの参加の意義を喚起された。（先輩談より）
- ・タンポポ調査のように一人一人が参加できる企画を作る
- ・SNSで学校行事や農ク活動を配信する
- ・野菜などの栽培・収穫を科ごとの縦割りではなく、他学科と協力して行う

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・SNSを使い、日々の様子をアップする
- ・イベントでの農産物販売や試食会、スマート農業などの新技術を紹介する
- ・稼いでいる農業従事者方々のトーク会や情報を農業高校生対象にも積極的に行っていく
- ・先進的な農業経営についても学べる機会（インターンシップなど）を中高生を対象に実施する

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立鳩ヶ谷高等学校

園芸デザイン科 3年 奥野 百々叶

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

老若男女を問わず、地域の人に参加できる活動として、地域のお祭りや清掃活動、スポーツ大会などが挙げられます。世代を超えて交流することで、お互いのことを知り、地域のつながりを深めることができると考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員一人一人が楽しめて、自分の得意なことを活かせる活動を取り入れることが大切だと思います。例えば学校や地域の特色を活かした、世代や学年を超えて協力できる活動や地域交流などを行うことが必要だと考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業の大変さだけでなく食を支えることのやりがいや、自然の中で働く魅力などを発信していくことが大切だと思います。また SNS などを活用し、若い世代に農業を身近に感じてもらうことが大切であると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立農芸高等学校

食品科学科 2年 清水 はつね

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私は学校で収穫した生産品を販売するマルシェや文化祭での製品販売の手伝い、援農ボランティアに参加している中で、老若男女を問わず地域の人々とのつながりや交流の輪ができていることに気がつきました。

そこでできたつながりを一つのチャンスとして、単に商品を買ってもらい、販売するだけの関係ではなく、私たちが日頃どのようなプロジェクトを行っているのか、また、農業クラブではどのような活動をしているのかについて話をすることが大切だと考えます。そうすることで、互いのことをより理解し、地域の方々とのつながりをさらに深めることができるのではないのでしょうか。

また、そのつながりを次の世代にも引き継ぎ、より地域に親しまれる高校にしていくべきだと思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

私の学校では農業クラブという存在・仕組みをほとんど知らない人や、積極的に取り組みたいと思っても、どのようにすれば活動に参加できるのかを知らない人が、学年を問わず多くいるという現状があります。

そのため、農業クラブの簡単な概要や活動内容を新聞のような形でまとめ、いつでも気軽に知ることができる環境づくりが大切だと思います。

まずは農業クラブについて知ってもらうことで、少しずつ意欲的に活動をするクラブ員が増えるのではないのでしょうか。

また、クラブ員全員でできる活動としては、全国大会やプロジェクト活動に参加していない生徒でも気軽に参加できるよう、実習の下準備や活動の手伝いなどを行えるイベントを開催すると良いのではないかと考えました。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

私は、「農業と環境」の学習や援農ボランティアを通して、農業の楽しさと大変さの両方を知りました。農作業は想像以上に体力と根気が必要ですが、自分が植えた苗が育ち、野菜となって誰かに届くことには大きなやりがいを感じました。

そのため、農業のイメージアップは、良い面だけを伝えることではないと考えます。暑さや重労働、人手不足などの課題を隠さず、ドローンやセンサーなどを活用して改善しようとする取組も伝えることが大切です。また、農業で働く人の工夫や思い、栽培の過程などをSNSや動画で発信することで、農業をより身近に感じてもらえると思います。農業高校生として、農業高校生の一日や農作業における工夫などを紹介する動画を各校で作成し、全国に向けて発信する取り組みを行うことで、より多くの人に農業への関心を持ってもらえるのではないかと考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立三浦初声高等学校
都市農業科 3年 鈴木 晴捺

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・体験（収穫、寄せ植え、製造、ふれあい、フラワーアレンジメント）
- ・広報（SNS を利用した若者への呼びかけ、幼稚園・小学校・中学校への農業の説明）

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・今まで栽培したことのない作物を栽培させ、興味を湧かせる
- ・FFJ の歌を踊り、農業クラブを盛り上げる。
- ・行事事前説明会、農業クラブの説明会を行う
→ どのような目的で行っているか、「現状」を知ってもらう。
- ・農業系レクリエーション（収穫物加工体験など）、企業とコラボ
→（発展として地域に PR・活性化へ）← 学校で培った知識や技術を応用させる）
- ・農業衰退の説明をし、農業系仕事紹介も行う

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・農業に関するクイズ大会
→ 参加した人に農業を簡単に学べるキットを作成し、配布する。
- ・農業へのマイナスイメージをプラスイメージに変える。
→ 「あ、楽しいな」と思ってもらう。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県須坂創成高等学校

園芸農学科 3年 阿部 佑惟

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

学校単独のイベントだけでなく、地域の公共スペースを利用し、団体と連携した活動を行うのが良いと考えます。授業で栽培、製造した、農作物、ジャム、ジュースなどの販売活動を軸にしながら、地域の方々が日常的にクラブ員との交流を行うことができます。

地元商業施設や地元企業と連携した、施設内の庭づくりやオリジナルスイーツの開発、販売イベントにも取り組み、これからの活動を通して、地域との関りと、普段学校に足を運べない幅広い層の人たちとも接点を持つことができます。

また、地元の小学生を対象として野菜の定植作業や収穫体験を行います。その活動にはクラブ員が先生役として参加し、手順はもちろん、農業の楽しさも伝える世代間交流を行います。

こうした多様な連携により老若男女問わず地域全体を巻き込んだ交流が可能だと考えています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全員が興味関心を持ち意欲的に取り組むためには、全員が役割を持って協力できる場を作ることが重要だと思います。その具体的な活動として、販売会やイベントへの参加が挙げられます。実際に長野県須坂創成高校で開催されている創成フェアは、クラブ員全員で役割を持って取り組んでいます。課長を筆頭に、一人一人に役割が与えられ、農産物の販売を中心に活動します。集団行動の中で一人一人が与えられた仕事をこなしながら、さらにやるべきことを考え行動することができます。こうした全員参加型イベントを通して、一人一人の意欲を引き出しクラブ全体の活動を活性化させると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

これからの未来を担っていく小中学生に興味関心を持ってもらうために、農業体験を通して魅力を肌で感じてもらうことが大切だと考えます。その体験が心に残る思い出となり、農業が進路選択の一つになることを期待します。また、作物を育てることで命の尊さを学び、農業者の方たちへの感謝の気持ちや地域への愛着が深まることも重要だと考えます。そこから、日々の食生活だけでなく農業が抱える課題へと視野が広がっていけば、農業活性化の原動につながると考えます。さらに、より幅の広い世代の人たちにも農業の現状や魅力を知ってもらう必要があります。その手段として、様々な種類の SNS で写真や動画を積極的に発信し、多くの人目に留まる工夫をすることで、農業全体のイメージアップと農業の持続可能な発展につながると考えています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 福井県立若狭東高等学校

生活創造科 3年 山崎 真愛

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

野菜の収穫祭や地域の人が参加できる運動会、〇〇作り体験などの「参加したい！行ってみよう！」と思ってもらえるようなイベントを企画する。宣伝は、ホームページやInstagram、広告の配布や地元テレビの取材によりイベントの情報をアピールすることで、幅広い年代の目や耳に入るのではと考える。また、イベントの中で「野菜の詰め放題」や「豪華な参加賞がもらえる」、「みんなでギネスに挑戦！」などを取り入れ、来てよかった、また来たいと思えるイベントにすることで学校や学科のPRにもつながると思う。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

季節ごとの活動している写真を撮りカレンダーを作成したり、身近にある花や学校で栽培した花を使いしおりやドライフラワーを作成したり、自然の植物を使用しキーホルダーや小物を作成したりすることで興味や関心を持ってもらう。また、芝生アートや草刈りアート、田植えコンテスト（誰が丁寧に早く植えることができるか）など競争性のある活動を取り入れることで、クラブ員全員が参加できるとともに、達成感も得られる活動になると思う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージとして、仕事がきついわりに給料が安いというイメージがある。まずは、儲かる農業とは何かと考えた際に、ブランド野菜を作り付加価値をつけて販売することや、規格外は加工し販売できる商品へと生まれ変わらせること、真夏や真冬の労働を機械に任せられるようにすることが意見として挙がった。

農業の魅力を発信していくためには、幼い頃からの農業体験において興味関心をもってもらうことが大切だと考える。年齢に合わせて小学生や保育園児向けには、田植え体験や野菜の収穫体験、中学生には、栽培から収穫、販売、調理などの過程を体験してもらうことで、農業の楽しさや今後の課題を共有し合い、一緒に学べる環境を作る。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立半田農業高等学校
農業科学科 3年 浦野 珠愛音

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

(1) 農産物即売会の実施

来場される方も気軽に参加することができ、また、消費者と生産者である高校生との交流の場にもなると考える。

(2) 生徒による一般の方に対しての農業講習会の実施

家庭菜園に役立つ畑作業について生徒が教えたり、地域の方々と一緒に畑づくりをしたりする。農業にあまり関わらない人にとって、一番身近な農業は「家庭菜園」だと感じるため、参加がしやすいと考えられる。また、生徒が地域の人に直接教えることで世代を超えた交流の場ともなると考える。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

(1) 農業クラブ員同士が交流する機会の実現

農業クラブ執行部だけでなく、単位クラブの農業クラブ員にも他校と交流する機会を設ける。私自身、他校との交流が農業クラブ活動の刺激になった。そのため、各校の活動を報告しあったり、コミュニケーションをとったりする中で、お互いに刺激を受けることができ、興味関心を持ってくれるのではないかと考える。同じ農業高校の仲間が他にもいることを知ること、農業クラブ活動の意欲向上につながると考えられる。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

(1) 地域住民に対する農業体験

親子や地域の人に対し、収穫などの管理作業を実際に体験してもらい、農業の楽しさややりがいなどを肌で感じてもらう。実際に体験することで、農業の魅力や楽しさが伝わるのではないかと考える。

(2) 農業分野における最新技術の紹介・発信

ドローン技術など、最新技術を組み込んだ農業をイベントなどで紹介し、「農業＝大変」というイメージをなくす。

(3) 農業の1日の仕事密着

実際の農家に取材を行い、農作業の流れを撮影させていただく。それを動画にし、一般の方などに向けて配信することで、農業を身近に感じてもらいきっかけづくりになると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立八日市南高等学校
花緑デザイン科 3年 西村 優澄

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の人たちが年齢に関係なく交流するためには、誰でも簡単に参加でき、楽しめる活動を行うことが大切だと考えます。

例えば、体育館などの室内で簡単なスポーツを行う活動が考えられます。ボールを使った簡単なゲームや、年齢に合わせた軽い運動であれば、子どもから高齢者まで参加しやすいと思います。また、体を動かすことが難しい人でも参加できるように、折り紙やお絵描き、工作など、椅子に座ったままできる活動を用意することも重要です。少人数のグループであれば、会話も生まれやすくなると思います。

このように、体を動かす活動だけでなく、座ってできる活動や見るだけでも楽しめる活動を組み合わせることで、老若男女が参加しやすい地域交流の場を作ることができると思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が意欲的に活動するためには、一部の人だけが活動するのではなく、全員が役割を持ち、自分が活動に関わっていると感じられることが重要だと考えます。

そのための活動として、まず農業クラブの活動内容や魅力を紹介する動画を作成することを提案します。動画の撮影、編集、出演、企画などの役割を分担すれば、農業に詳しい人だけでなく、動画制作や発表が得意な人も参加できます。完成した動画を校内やSNSなどで発信することで、農業クラブを知らない人にも活動を知ってもらうことができると考えます。また、他校の農業クラブ員との交流会を開催することも有効だと考えます。それぞれの学校で行っている活動や研究内容について情報交換することで、新しい知識やアイデアを得ることができ、活動への興味や意欲に繋がれると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

現在、農業に対して「大変そう」「体力的にきつそう」といったイメージを持っている人が多いと思います。そのため、農業の大変さだけではなく、農業ならではの魅力や楽しさ、やりがいを分かりやすく発信することが重要だと考えます。

例えば、実際に農業をしている人の仕事の様子を動画にまとめ、SNSなどで発信する方法があります。様々な作物の栽培作業風景や、作物が成長していく様子、収穫したときの喜び、調理や加工の様子などを映像で伝えることで、農業をより身近に感じてもらえると考えます。さらに、小学校や中学校を訪問し、農業の大切さを伝えるイベントを行うことも効果的だと考えます。野菜の栽培体験や収穫体験など、実際に農業を体験してもらうことで、子どもたちに農業の楽しさや、自分で栽培した作物の美味しさを知ってもらうことができます。このように、SNSや動画などの現代的な情報発信と、実際に農業を体験してもらう活動を組み合わせることで、農業のイメージアップに繋がると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立高松農業高等学校

畜産科学科 3年 坂本 悠輔

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

○現状および課題

地域開放型のイベントを学科ごとに開催しているが、年齢層によって参加しているイベントが異なり、中には参加人数が少ないイベントもある。また、販売会はあくまで販売に力を入れていて、交流を行うための催しが存在していない。

○対策

校外外で全年齢が参加しやすい農業体験会などの交流型のイベントを開催する。土日に幼児や高齢者でも参加可能な各学科の特徴を生かした体験を実施し、その中で交流機会となるイベントを企画する。野菜や米の重量当てを行い、重量をぴったり当てられた人や誤差 5g 以内の人には、重量を当てられた野菜や米を景品としてプレゼントする。このようなイベントを行うことにより、どのような年齢層の方にも農業や学校の魅力を知ってもらえる他、地域の方々との交流によってクラブ員の社会性が高まるなどの効果が期待できる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

○現状および課題

農業クラブ活動そのものがどのようなものか知らない、あるいは興味のない生徒が多く、興味を持てるような機会を創出できていない。

○対策

現在行っている活動をより多くの人に知ってもらえるよう既存の行事以外の新たなイベントを計画し、その中で競技会の実演などを含めた紹介を行うことでより具体的かつ詳細に活動を知ってもらう。例えば、活動が「面白い」ものだと感じられるようにクイズ大会を開催することで、学科の枠組みを超えた交流を図るとともに農業クラブ活動への関心を持ってもらうことができる。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

○現状および課題

農業の魅力発信のために行っている SNS の存在を知らない人が多く、農業に触れる機会が少ないため農業に興味を持ちにくかったり、将来が不安な仕事だと思われやすいため興味があっても手を出すことができなかつたりする。

○対策

稲作などの体験会やクイズ形式の出前授業を行って、実際に行った人のインタビュー動画を SNS にアップすることで、多くの人にリアルな声を知ってもらうことができる。そのような SNS でのリアルな情報や魅力の発信、交流型の体験活動を通じて、若い世代が農業の魅力を感じやすい環境を創出することが求められる。そして、農業の持つ達成感や働き方の自由度の高さへの理解を深めてもらうことで、最終的に農業のイメージアップに繋がると考えられる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 山口県立田布施農工高等学校
生物生産科 2年 廣谷 心春

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の方々と一緒に野菜や花を育てる栽培体験や収穫体験、学校で生産した農産物や加工品の販売会などを行うことで、地域の人とのつながりを深めることができる。また、高齢者にスマートフォンの使い方を教える活動や、子どもたちを対象としたものづくり教室や自然体験教室を開催することも考えられる。



さらに、地域の清掃活動や花壇整備、防災訓練、地域行事や祭りの運営補助などに参加することで、地域社会の一員としての責任感や協力する力を養うことができる。こうした活動を通して、多世代の人々に関わる機会が増え、コミュニケーション能力や社会性を身につけることができるだけでなく、自分たちの学びを地域に還元することにもつながる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

一人ひとりが「やってみたい」と思える活動を取り入れることが大切である。そのためには、クラブ員の意見やアイデアを積極的に取り入れ、自分たちで企画・運営する機会を増やす必要がある。また、地域の人に喜んでもらえたり、自分たちの学習成果が役立ったりすることを実感できれば、達成感ややりがいにつながり、参加意欲の向上が期待できる。

農業クラブ員全員で取り組める活動として、地域の清掃活動や花壇整備、農産物や草花の販売会、収穫体験イベントの運営などが考えられる。また、学校で生産した野菜や花を地域へ提供したり、高齢者施設や保育園を訪問して交流したりする活動も有効である。こうした活動は、専門的な知識や技術だけでなく、協力する力やコミュニケーション能力を高めることにもつながる。

さらに、学科や学年を超えて協力できる活動を増やすことで、クラブ員同士のつながりが深まる。地域との交流を通して学びを地域社会に還元できることを実感することが、農業クラブ活動への意欲向上につながると考える。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

「大変な仕事」という印象だけでなく、農業のやりがい・楽しさ・将来性を積極的に発信することが大切である。そのためには、農業の魅力を体験や身近な情報を通して伝える必要がある。

例えば、SNS や動画で農作業の様子や収穫の喜びを発信したり、収穫体験や農業体験イベントを開催したりすることで、多くの人に農業を身近に感じてもらうことができる。また、スマート農業やドローンなどの先進技術を紹介し、農業が進化している産業であることを伝えることも重要である。

このように、農業の魅力や可能性を分かりやすく発信し、体験する機会を増やすことが、農業のイメージアップと将来の担い手確保につながると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立伊万里実業高等学校
フードビジネス科 3年 徳田 美紗子

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

1. 実態

生産物販売会やこども食堂などを通して、年齢に関係なく人々が交流できる活動が行われている。

2. 問題点

参加する人が同じだったり、交流が一時的になりやすい。

3. 解決策

SNSや地域の広報などを活用して活動を広く知らせたり、定期的に活動を行う。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

1. 実態

自分が農業クラブ員という自覚を持っていない人が多い。また、主体的に発言や行動をする生徒が固定化しやすい。

2. 問題点

農業に強い関心がある生徒とそうでない生徒の温度差があり、興味・関心の差が大きい。

3. 解決策

他の農業高校との交流を積極的に実施したり、活動の内容を広めるためにSNSを活用することが必要である。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

1. 実態

担い手の数が減少しており、農業の高齢化や就農する人が少なくなっている。

2. 問題点

若者に農業の魅力が十分に伝わっていない。

3. 解決策

SNSや体験活動などを、若者目線で魅力を発信する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 沖縄県立南部農林高等学校
生物資源科 1年 田尻 宙

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・ 5, 6, 7月に収穫した野菜や加工科で製造している焼き菓子、飲料、パンを販売している、12月には、即売会を実施し学校に地域の人たちを招いている。
しかし販売することが目的となっているから、もっと他の人たちと関わるような行事をつくりたい。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・ 県大会などで出場した人を農業クラブ員が豆記者としてインタビューし「農ク通信」を作成し、校内の全校生徒に活動内容を伝えている。
- ・ 大会での実績を農業クラブ員が横断幕作成し、校門前に設置をしている。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・ 保育園や特別支援学校、中学生との交流や県内の行事（産業教育フェアや花と食のフェスティバル等）の参加、近隣の中学校に行き、学校説明会をしている
- ・ 学校ホームページで学科紹介を行っている。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 新潟県立加茂農林高等学校

生産技術科 3年 五十嵐 梓

生物工学科 3年 伊藤 夢華

生産技術科 2年 増子 育美

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私たちは、地域との交流を深めるため、アグリ・スタディー・ツアーというふれあい農園を行い、サツマイモなどの定植と収穫、木のワークショップ、果樹の収穫など、農業を体験し、農業に触れる機会を作ってきた。この活動を知ってもらうため、今後は SNS での告知や農産物販売でチラシを配るなど、宣伝をしていく必要がある。また、これ以外にも、地域の人たちに興味を持ってもらえる農業体験会を企画し、地域との連携を深めるための活動を行っていきたい。

具体的には、本校の青海祭などで、餅つきや動物の飼育・手入れなどの体験を計画している。多くの人に農業の魅力を知ってもらい、興味を持つきっかけにしてもらえたらと考えている。

さらに今年度は、学校紹介動画を作成している。農業の魅力を伝え、生徒の一生懸命な姿を写真や動画で発信することで、地域全体が農業を身近に感じ、意識するきっかけを作っていきたい。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

私たちは、農業クラブ活動を多くの人に知ってもらうことが大切だと考えた。そこで、学校で行っている農業クラブの活動に動画や情報発信を取り入れ、活動内容や作業する生徒の姿を SNS で発信して紹介することで、農業クラブや農業への理解、関心を高めていくことを考えている。

さらに、生徒に配付する通信や掲示板を作成し、クラブ活動の結果や表彰者などを定期的に掲載し、農業クラブの活動を知ってもらいたい。少しでも活動の楽しさや魅力を感じてもらい、農業クラブへの興味・関心を高めることで、意欲的に活動する人を増やすことにつながると考える。

本校では、農業クラブの活動として、小学校との蛍の鑑賞会、農業体験、地域清掃活動などを行っている。これらは、学校内だけでなく、地域の方々や小学生など、加茂市全体を巻き込んだ活動となっている。中でも、地域清掃活動は、参加する生徒が自ら進んで取り組む活動となっている。今後は、こうした活動をさらに広げ、全校で取り組む活動へと発展させていきたい。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業は、「汚い」「稼げない」「力仕事」というイメージから、農業従事者は減少している。しかし、実際には機械化が進み、農業従事者の負担は軽減されている。そこで、農業のイメージアップのために、SNS での情報発信やポスターの掲示、農業体験を行い、その中で、農業についての情報や、実際に農業に取り組む様子など、農業の魅力を伝えたいと考えている。

農業体験では、農業高校が主体となり、市内の小中学生やその保護者を対象に、農作物を育てる体験をしてもらうことで、農業への興味や関心を持ってもらえると考えている。

このように、SNS やポスターによる情報発信だけでなく、実際に農業を体験してもらうことで、農業の魅力を知ってもらい、農業に対するイメージをより良いものへ変えていきたい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 香川県立笠田高等学校

植物科学科 3年 平尾 健真

農産科学科 3年 大西 結万

農産科学科 3年 田代 悠稀

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、地域の方々との交流の場として「新鮮市」を実施しています。「新鮮市」は本校で収穫した農産物や加工食品の販売会で、農場内の専用会場にて年間11回（火曜日の14時～）開催しています。野菜・果物・卵・花・味噌・ジャムなど、農業系3学科9部門の生徒約200名が丹精込めて育てた成果物は大変人気があり、当日は開始2時間前の12時頃から多くのお客様が足を運んでくださいます。自分たちが育てた商品を嬉しそうに購入される地域の方々とは直接会話を交わす機会は、私たち生徒にとって大きな励みや学びとなっています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

今回、私たちは校内の安全な環境づくりを目的に「笠高生の通学路の危険箇所をなくす取り組み」を実施しました。全校生徒を対象としたアンケート調査を通して、クラブ員一人ひとりが地域の交通安全課題を「自分ごと」として捉え、行動することができました。「毎日使う通学路の危険を察知し取り除く」という意識や行動は、「日々の農作物を病害虫などのリスクから守る」という農業の基本姿勢にも通じるものです。このように自分たちの生活環境を自らの手で改善していく活動は、学科を問わず農業クラブ員全員が主体的に参画できる素晴らしい取り組みであると感じています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

本校では、学科やコースごとに、園児や小学生との交流学习や、地域農家での実習に取り組んでいます。これらの活動を通して感じたことは、「私たちが元気に地域へ飛び出し活動することで、地域の方々に笑顔や喜びを届けられる」ということです。農業クラブ員が活気をもって生き生きと行動する姿こそが、最高の農業のイメージアップにつながるかと確信しています。そのために、まずは私たち一人ひとりが日々の学習で実力をつけ、自分のできることに一生懸命取り組んでいきたいと思っています。

参加者課題レポート

第 1 分科会 第 3 会場

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流は
どのようなものがあるだろうか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第 3 会場	島根県立益田翔陽高等学校	高知県立幡多農業高等学校

第1分科会 第3会場

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	北海道	帯広農業高等学校	食品科学科	1	大野 陽太
2	栃木県	鹿沼南高等学校	食料生産科	2	坂本 至礼
3	埼玉県	熊谷農業高等学校	生物生産工学科	3	横地 陽菜
4	千葉県	流山高等学校	園芸科	2	岡田 紗奈
5	東京都	瑞穂農芸高等学校	園芸科学科	2	稲葉 柚羽
6	山梨県	北杜高等学校	総合学科	2	雨宮 龍蔵
7	長野県	更級農業高等学校	施設園芸科	3	花岡 拓海
8	福井県	福井農林高等学校	生物生産科	3	井上 佳大
9	三重県	四日市農芸高等学校	環境造園科	3	山名 彩楽
10	滋賀県	湖南農業高等学校	農業科	3	園 和佳奈
11	岡山県	勝間田高等学校	総合学科	3	山本 梨紗
12	山口県	山口農業高等学校	食品工学科	2	藤井 志歩
13	長崎県	北松農業高等学校	食品流通科	2	松山 凌輔

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	島根県	益田翔陽高等学校	生物環境工学科	2	福原 宗嬉
15	島根県	益田翔陽高等学校	生物環境工学科	2	松本 颯大
16	島根県	益田翔陽高等学校	生物環境工学科	2	湊谷 智弥

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	高知県	幡多農業高等学校	グリーン環境科	3	尾形 銀太
18	高知県	幡多農業高等学校	グリーン環境科	3	國見 悠斗
19	高知県	幡多農業高等学校	グリーン環境科	3	山下 悠

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

中国ブロック 島根県立益田翔陽高等学校

生物環境工学科 2年 福原 宗嬉

生物環境工学科 2年 松本 颯大

生物環境工学科 2年 湊谷 智弥

1 はじめに

益田翔陽高校のある益田市は、東西に長い島根県の西端にあつて山口県と接しており、北は日本海を望み、南は中国山地に至る、山陰と山陽を結ぶ交通の要衝地です。中国山地に源を発する高津川は国土交通省の水質調査で過去何度も日本一に選ばれた一級河川であり、益田市の象徴です。本流にダムがない一級河川としても有名で、水産業においてはアユ・モクズガニ等の水揚げがあり、海にそそいでハマグリなどの豊富な恵みをもたらしてくれます。農業においては、米をはじめ、ブドウ・メロン・トマト・ユズ・ワサビ等が生産されています。

2 益田翔陽高校の紹介

島根県立益田翔陽高等学校は、島根県では初めての複合型専門高校として、平成18年に誕生しました。本校は大正10年に開校した益田農林学校（統合時は益田産業高校）と昭和38年に開校した益田工業高等学校が、平成18年に統合し、県内唯一の複合型専門高校として新たにスタートした高校です。

校訓である「創造・敬愛・誠実～創造性を発揮し、敬愛の心を持ち、誠実に生きる生徒を目指す～」を理念に島根県西部の農業関連高校として、地域とのかかわりを大切にしながら、地域社会に貢献できる人材育成を行っています。

3 益田翔陽高校における地域との交流の実例

益田翔陽高校における地域との取り組み

- (1) 緑の市（4月）農場主催
- (2) 地域との交流事業（5月、10月）農業クラブ主催
- (3) 夕方ふれあい市（6月、7月、12月）農場主催
- (4) オープンスクール（7月、8月、10月）学校主催
- (5) 翔陽していへようこそ（8月）農場主催
- (6) 出前授業（9月）学校（農場）主催
- (7) 翔陽祭（11月）学校主催

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
緑の市	地域との交流事業	夕方ふれあい市	夕方ふれあい市 オープンスクール	翔陽してい オープンスクール	出前授業	地域との交流事業 オープンスクール	翔陽祭	夕方ふれあい市			

(1) 緑の市(4月) 農場部主催

4月29日(昭和の日)に地域の皆さまに向けて生産物の販売会を行うのが緑の市です。始まった時はこの日がみどりの日だったことから、この名前が付けました。毎年恒例の行事となっており、野菜・花の苗ものやジャムを目当てに来校されます。多くの方が大人ですが、子供連れでいらっしゃることもあり、非常に賑わいます。また、卒業生も生産物の購入を目的に来校されます。



(2) 地域との交流事業(5月、10月) 農業クラブ主催

農業クラブ主催のイベントで、益田市内の7つの保育園・幼稚園の園児を招き、高校生と一緒に活動します。5月はサツマイモの定植を行い、10月に芋ほりをします。この時ばかりはちいさな子どもたちの元気な声が農場に響き渡ります。高校生にとっても、普段は習う側の自分たちが教える側になるということで、学びのある機会となっています。特に総合学科で保育士を目指す生徒たちにとっては、よい実践の場となっています。



(3) 夕方ふれあい市(6月、7月、12月) 農場部主催

緑の市とは別に、年に3回夕方ふれあい市(16:00~)も行っています。6月は果樹部門が主な担当で、収穫されたばかりの新鮮なデラウェアなどを販売します。7月は野菜部門が主な担当で、メロンや野菜類を販売します。草花部門の切り花が並ぶこともあります。12月は草花部門が担当で、冬の花苗やシクラメンを中心に、冬野菜や加工品が販売されます。この時期に夕方ふれあい市があることをご存知の地域の方が中心に来校され、生産物を心待ちにされています。



(4) オープンスクール(7月、8月、10月) 学校主催

いわゆる体験入学のことですが、益田翔陽高校では年間に3回行っています。ここまで地域の中学生に手厚くオープンスクールを行う高校は少ないのではないのでしょうか。益田市内を中心に、近隣の市や隣接する山口県からも中学3年生が参加します。

農業関係の学科だけでなく、工業も含めた4学科全てが中学生やその保護者、引率教員を対象に自身の学んでいることや益田翔陽高校の魅力をアピールします。

各自の希望に沿った学科を選択し、高校生活を模擬体験してもらいます。座学とは違う専門高校ならではの実学実習に楽しさを感じつつも、高校生からのアドバイスに耳を傾け、真剣に取り組む姿が印象的です。

(5) 翔陽していへようこそ(8月) 農場部主催

これは益田翔陽高校のある益田市高津地区に住む小中学生を対象にしたものです。高津公民館の方から「夏休みに家でゴロゴロしている子どもたちに向けて、何かやってくれないか」と、話を持ち掛けられたのがきっかけだそうです。下は小学1年生から上は中学生まで、今年は20人の参加ありました。ドライフラワーを使ったキーホルダーづくりや野菜の種まき体験、ネオマスカットの収穫体験、トラクターの運転体験やバックホー操縦体験を行いました。



(6) 出前授業(9月) 学校主催

3回のオープンスクールにとどまらず、出前授業も行っています。来てもらうだけでなく、こちらから出向きもします。要請があった益田市内の中学校に出向き、希望の講座(野菜、作物、果樹、草花)の出前授業を行います。工業科や総合学科が出前授業に行くこともあります。



9月は益田市内最大の益田中学校で出前授業を行います。オープンスクール実施後のこの時期に中学3年生を対象に行ってどれほど効果があるかは不明です。

訪問した先々の中学校で、生徒達は翔陽高校で学ぶ内容や良さをアピールしています。

(7) 翔陽祭(11月) 学校主催

本校最大の地域公開イベントです。日程は2日間で、本校生徒向けの1日目と、地域公開の2日目があります。

1日目は体育館のステージ発表が中心です。バンド演奏やダンスなどもありますが、本校のある島根県石見地域では、伝統芸能である石見神楽があります。石見神楽



の地域団体である「社中」に所属し、稽古や演舞に参加している生徒も多くいます。その生徒たちの発表の場にもなっています。ある意味、いろいろな社中の所属がミックスした貴重な神楽とも言えます。

地域公開する2日目は約7000人の地域の方が来校されます。

農場では、コメや野菜、花などの収穫物の販売の他、加工品の販売、農業クラブの出店が並びます。校舎では、学科や部活動の展示・販売などがおこなれます。

また、PTA村といってPTAの出店があります。特徴的なのは、PTAで1つのブースというわけではなく、PTAがさらに地区ごとに分かれて9つのブースが出ることです。運営される保護者さんは大変な面もあると思いますが、地区ごとの特色を生かしたブースもあり、翔陽祭の盛り上げに一役買ってもらっています。本校を会場とした地域の情報発信の側面もあります。



4 おわりに

このように益田翔陽高校では、地域との取り組みを豊富に行っています。『老若男女問わず』という条件を付けるのであれば、おのずと行事は限られ、本校実施の行事でいえば、緑の市や翔陽祭になります。

しかしながら、来校してもらったりこちらから出向いたりする行事の機会を『老若男女問わず』設けることで、地域の人に参加できる活動や交流の場を担保できるのではないかと考えます。原稿執筆時には未実施なので記載できませんが、交流センターで家庭菜園をしていらっしゃるご年配の方を対象とした課題研究グループ主催の勉強会も予定しています。

いたずらに機会を多く設定すればよいというわけでもありません。前述のとおり、益田翔陽高校では多くの地域交流の場が設定されていますが、それもあって生徒も先生も常に多忙です。生徒は課題研究や総合実習の時間をそれらの準備に割くことになり、専門性の深化という面では犠牲になっている部分が少なくありません。また、先生達にとってみても昨今の働き方改革やブラック労働の改善に逆行するのでは、という指摘もあります。

地域で存在感のある学校の立ち位置は必要不可欠だと思いますが、その行事の必要性や教育的効果、地域のニーズに合致したものを常に検証しながら、活動や交流の在り方を検討していく必要があると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道帯広農業高等学校

食品科学科 1年 大野 陽太

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、校内アンテナショップ「あぐりす」の運営や地元スーパーでの販売会を定期的に行っています。クラブ員自ら生産・加工した農畜産物を販売し、接客や体験活動を通じてマーケティング技術やコミュニケーション能力を高めるとともに、地域の方々へ本校の取り組みを周知することができました。

また、今年で25周年を迎えた独自のボランティア活動「すこやか農園」では、農業を通じて子どもからお年寄りまで幅広い世代との交流を深めました(写真1)。これらの経験から、地域の方々と直接対面する販売会・体験会や、世代を超えて協働するボランティア活動こそが、老若男女問わず地域の人に参加できる有効な取り組みであると考えます。



【写真1】農作業体験

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、日々の学習に最新技術を融合させた「スマート農業プログラム」を実施しています。

これにより95%のクラブ員がスマート農業への関心が高まり「農業教科の学びが自身の夢につながる」と実感して活動に意欲的に取り組むことができました。

また、農業技術検定1級合格やアグリマイスタープラチナの2年連続輩出といった成果は、後輩にとっても大きな目標やモチベーションとなっています。

これらの事例から、産学官や企業と連携して常に最新の学びに触れられる環境を整えることが意欲向上に繋がると考えます。さらに、スマート技術を活用したデータ管理や作物の生育観察など、役割分担を工夫することで「全員が主体的に参加できる活動」を実現できると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

本校では、雇用就農に向けた取り組みとして「マッチング交流会」を実施しています(写真2)。YUIME 株式会社様と連携し、全国の農業企業や生産者をお招きして直接対話する機会を設けたことで、クラブ員が自らの進路を前向きに考えるきっかけとなりました。その結果、卒業生の就農予定者割合は令和5年度の14.6%から令和7年度には23.3%へと大きく上昇しました。さらに「全国農業高校・農業大学校デジタルコンテスト」で農林水産大臣賞を受賞し、クラブ員が主体的に取り組む姿と農業の魅力を全国へ届けることができました。このように、現場のリアルに触れる機会をつくり、その成果や情熱を発信していくことが、農業全体のイメージアップと次世代の興味喚起に繋がると考えます。



【写真2】新規就農プログラム

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立鹿沼南高等学校
食料生産科 2年 坂本 至礼

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私たちは、老若男女問わず地域の人に参加できる活動として、農業体験や地域の特産品を使った料理教室、収穫祭、マルシェなどがあると考えました。特に、子どもから高齢者まで一緒に参加できる農業体験を行うことで、世代を超えた交流につながると思います。また、高齢者の方から昔の農業や地域についての話を聞く機会をつくることで、地域の伝統や知識を次の世代へ伝えることもできます。

このような活動を行う際には、誰でも気軽に参加でき、楽しめる内容にすることが大切です。学校や農業クラブだけで活動するのではなく、地域の農家や自治会などとも協力することで、地域全体の交流を深めることができると考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

私たちは、農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に活動するためには、一人ひとりが参加しやすく、楽しみながら取り組める活動を増やすことが大切だと考えました。例えば、クラブ員がやってみたい活動についてアンケートを行ったり、学年や学科を越えてグループをつくり、協力して農業体験や商品開発などを行ったりすることが考えられます。

また、農業にあまり興味がない人でも参加しやすいように、農業クイズやゲーム形式の活動、動画やポスターの制作など、農業を身近に感じられる活動を取り入れることも効果的だと思います。活動の中では、一人ひとりに役割を与え、全員が活躍できるようにすることが重要です。クラブ員全員が「参加してよかった」「またやってみたい」と思える活動を目指すことが大切だと考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

私たちは、農業のイメージアップをするためには、農業の大変さだけでなく、楽しさや魅力、やりがいを分かりやすく発信することが大切だと考えました。特に、InstagramやTikTok、YouTubeなどのSNSを活用し、農業高校生や若手農家の活動、農作物を育てる様子、スマート農業などの最新技術を紹介することで、若い世代にも農業に興味を持ってもらえると思います。

また、農業体験イベントなどを開催し、実際に農業を体験してもらうことも効果的です。農業を身近に感じてもらい、「農業は大変な仕事」というイメージだけではなく、「農業は面白い」「自分もやってみたい」と思ってもらえるような発信をしていくことが重要です。そのためにも、私たち農業クラブ員自身が農業の魅力を発見し、それを自分たちの言葉やSNSなどを通して積極的に発信していくことが大切だと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立熊谷農業高等学校

生物生産工学科 3年 横地 陽菜

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・道の駅や町のイベントなどの校外での農産物等の販売を実施する。また、販売時に生徒による説明やポップなどを作成する。
- ・子供向けの収穫体験や田植え体験を行い、農業の楽しさを教える。
- ・どの年代でも参加することのできる参加型イベントを実施する。
- ・それぞれの学校で学科ごとの特色を活かしたイベントを開催する。
- ・地域の農業従事者から、昔ながらの農法や最新の農法などについて学ぶ交流会を実施する。
- ・農業従事者の方と農業についての意見交換を行う。
- ・地域のボランティア活動に参加し、地域の方との交流を深める。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・専攻や学科を超え、様々な人や企業とコラボ商品を製作する。
- ・SNSやホームページを活用し、農業クラブの活動を広める。
- ・他校との交流の場を増やして、新しい考え方や刺激を得ることで、農業に対する興味関心を広げる。
- ・活動内容をポスターにまとめ、校内や農場に設置することで沢山のの人に農業クラブ活動を知ってもらおう。
- ・活動ごとに担当を決めて、ひとりひとりが役割をもって活動する。
- ・活動の終了後に振り返りを行い、次回につなげる。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・収穫した野菜で簡単に作れる料理と一緒に作るというイベントを実施する。
- ・卒業生の方で現在も農業に関わっている人にインタビューをし、魅力や楽しさをSNSや文化祭などの場で発信する。
- ・地域の店との食材を活かしたコラボを行う。
- ・文化祭や即売会での農産物販売の際に、農産物が販売されるまでの過程などの掲示を行う。
- ・スマート農業や商品開発など、農業の大変さだけでなく新たな魅力を発信する。
- ・SNSで熊農生の日常や実習の様子を発信する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立流山高等学校

園芸科 2年 岡田 紗奈

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私は、老若男女問わず地域の人に参加できる活動として、農業体験交流会を実施することがよいと考えました。この活動では地域の子供から高齢者まで、さまざまな年代の人が集まり、農業体験を通じて交流します。

農業クラブが中心となり、地域の方に野菜の種まきや苗植え、収穫などの農業体験を実際に行ってもらいます。作業を一緒にすることで、世代を超えて会話をする機会が生まれ、農業を通じて地域同士が交流できると考えました。また、農業について教えるだけでなく、地域の方から昔の農業や地域のお話を聞くことで、お互いの知識や経験を共有できると考えます。

また、小さい子供には野菜が苦手な子供もいると思います。そこで、この農業体験を通して普段の食べ物がどのようにして作られるのか知り、食べ物のありがたさや大切さを学んでもらえると考えました。中学生には農業の楽しさや魅力を知ってもらうとともに、農業体験をすることで学校生活や農業高校への興味を持つきっかけにもつながると考えました。この活動を通して、地域の人同士のつながりを深めるとともに、農業高校の魅力を発信できる活動にしたいと考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ委員全員が農業に興味を持ち、意欲的に活動することが重要だと考えます。そのためには農業クラブ委員全員に活動の目的をわかりやすく伝えることが大切だと思います。何のために活動するのか、活動することで農業や地域にどのような影響を与えられるのかを知ることで、一人ひとりが活動する意味を理解し、積極的に活動に取り組むことができると考えます。そして、目的を定めることで課題点も見つかると思います。現在、農業従事者が減少している中で、改めて農業の良さや魅力を知ってもらい活動を行いたいと考えました。具体的には、農業クラブの活動の様子を写真やポスターにまとめ、校内に提示することで、農業クラブがどのような活動をしているのかを多くの人に知ってもらえると同時に農業について知ることができるきっかけにもなると考えました。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者が減少している現在、農業のイメージアップを図るためには、農業を単なる「食料を生産する仕事」ではなく、私たちの生活や地域社会を支える重要な産業として発信していくことが大切だと思います。その魅力を伝えるには、農業の現場で実際に行われている工夫や、スマート農業などの新しい技術にも目を向け、SNS や動画を積極的に活用し、農業に携わる人の思いや仕事のやりがいを発信することで、これまで農業に関心がなかった人にも興味を持ってもらえると思います。農業の大変さだけでなく、「社会を支える仕事」、「新しい可能性があること」を伝えることが農業に対するイメージアップやこれからの農業を支える担い手を増やすことにもつながると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立瑞穂農芸高等学校

園芸科学科 2年 稲葉 柚羽

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流には、収穫体験をしたり、作物の大きさを競ったりするイベントがあります。実際にこれらの体験をすることで、農業を身近に感じてもらうことができます。また、競い合うことで「もっと大きな作物を育ててみたい」という向上心が自然に生まれ、農業への興味も深まると思います。私もこのような活動に参加し、多くの人と交流し、農業の魅力を広めていきたいです。また、農業科の生徒主催でイベントを運営したり、夏祭りなどの農業と関係が少ないイベントにも、実際に育てた作物を使ったスイーツや食べ物を販売したりと、お店で売っている物とは違う新鮮な野菜の美味しさを知ってもらうことで、地域の人たちに農業の魅力を伝えられると考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業の楽しさややりがいを実感できる活動を増やすことが重要だと考えます。私は文化祭で、自分たちが育てた野菜を販売した経験があります。多くの方に購入していただき、たくさんの笑顔を見ることができました。そのとき私は、「育てた先には食べる人がいる」という農業の大きな魅力を実感しました。そこで私は、日本の四季を生かし、年に4回、旬の食材を活用した生徒主体の販売イベントを行うことを提案します。それぞれの学科の特色を生かした商品を販売することで、全員が参加することができます。また、販売イベントを成功させるためには、商品の企画や準備、接客など、多くの役割が必要になります。そのため、作物を育てる技術だけでなく、協力して物事を進めるチームワークや運営する力も身に付けることができます。このような活動は、それぞれの学科の強みを発揮しながら農業の魅力を共有できるため、農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むよい機会になると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージアップをするためには、農業クラブ員が地域イベントの運営に携わったり、多くの人が集まる場所で農産物を販売したりすることが必要だと考えます。なぜなら、農業の魅力を積極的に発信していくことが重要だからです。農業には「大変そう」「休みが少ない」といったマイナスのイメージがあります。私自身も幼い頃は農業にあまり良い印象を持っていませんでした。しかし、地域の農産物を購入したり収穫体験をしたりしたことで、新鮮な作物のおいしさや農業の楽しさを知り、興味を持つようになりました。そこで、地域イベントや農産物販売の様子をSNSやチラシで幅広い世代に発信することで、多くの人に農業の魅力を伝えられると考えます。特にインスタグラムは若者の利用が多く、効果的な発信手段です。また、若者が育てた農産物は関心を持ってもらいやすく、実際に文化祭でも多くの人々が手に取ってくれました。

このような活動を通して、「農業＝高齢者」というイメージを変え、農業に興味を持つ人や挑戦する人を増やすことができ、農業のイメージアップにつながると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 山梨県立北杜高等学校

総合学科 2年 雨宮 龍蔵

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

高校で行われる収穫祭の宣伝のポスターを誰でも見られる場所に貼ってもらい、学校などに配ることで老若男女問わず地域の人と交流ができると考えました。北杜高校では毎年「フェスタ杜のきらめき」という収穫祭を行っています。フェスタ杜のきらめきでは農産物や加工食品の販売や木工体験など子供からお年寄りまで幅広い年代の人が楽しめる活動を行っております。他にも、他系列が体験コーナーや商品の販売を行っています。フェスタ杜のきらめきでは生徒が中心になり販売など行うため、地域の人達と交流することが可能です。しかし、フェスタ杜のきらめきに来る人のほとんどが以前から来てくださる人たちです。これを解決するためには、宣伝のポスターを公共施設に貼ってもらい、小中学校に配ってもらう必要があると私は考えました。図書館などの公共施設に貼ってもらうことでイベントがあることを知らなかった人たちに訪れてもらうことができ、小中学校に配ってもらうことで興味を持った生徒と家族と一緒に来てもらうきっかけになります。さらに、パンフレットも一緒に配布することでより深く知ってもらうことができます。SNSを使わないのには理由があり、SNSは興味があるものしか流れてこないため、ポスターなどの原始的な方法のほうが良いと考えました。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全員に興味・関心を持たせるためには、クラブ員一人ひとりにプロジェクト発表を考えてもらい、それを全員の前で発表するというものです。北杜高校には校内戦がないためクラブ員同士がどういったものに興味や関心があるのかわかりません。そのため、発表を行うことで、各自が興味・関心のあるものを意欲的に行うことができます。クラブ員の前で発表し、意見をもらうことで自分では気づくことが出来なかったことを知ることができ、次はどうするかなど新たな興味・関心が生まれてくると考えました。この活動ならクラブ員全員に参加できる利点があります。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者が減っていく理由は、非農家の人たちが農業を行うのは難しいと思っているからだといは考えました。現在では道府県立の農業大学校や、地域の先進農家などで研修を受けることができ、栽培技術や経営ノウハウを学ぶことが出来るため、初めての人でもある程度の基礎を知ったうえで農業を行うことが出来ます。また、農機などのレンタルをすることができ、費用を抑えることもできます。そのため、わざわざ高額な農機を買わずに農業を行うことができます。さらに、農業従事者には自営就農以外に雇用就農という初期費用や農地を自分で用意せずに、給与を得ながら安心して農業の経験や技術を学べる道もあります。一から農業に関わることは思ったより難しくなく、誰でも農業に関われるということをインスタやユーチューブの広告として発信することで誰でも農業の魅力を知ることが出来ると考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県更級農業高等学校
施設園芸科 3年 花岡 拓海

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

幅広い年代の方が参加できる活動として、各コースでの農作業体験が挙げられます。地域の方々から好評をいただいている本校の作物ですが、どのように管理・栽培されているかを体験していただくことで、本校や農業についての理解を深めてもらうことができます。

実際に、私が所属する果樹科学コースでも、周辺の小学校や幼稚園と交流しながら栽培・収穫体験を行っています。今年の夏休みには近隣の小学生を対象に希望者を募り、モモの収穫と押し花のしおり作り体験を実施しました。試食の際には「甘くておいしい」という喜びの声が多く、生き生きと作業をする姿が印象的でした。現在は子供を対象とすることが中心ですが、こうした取り組みは世代を問わず展開できると考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全員が参加できる活動として、地域イベントでの農産物販売が挙げられます。実際に「篠ノ井病院あいまつり」や「篠ノ井軽トラ市」などのイベントに参加していますが、現状は特定のコースや生徒のみにとどまっています。販売活動を通じた生徒同士の連携は普段の実習にも活かされ、お客様の喜ぶ姿は大きなモチベーションになるため、今後はクラブ員全員で参加できる体制づくりが必要です。その第一歩として、まずは農業クラブや各コースの日常的な活動を互いに知ってもらうことが重要だと考えます。互いの取り組みへの理解が興味・関心を呼び、いずれクラブ員全員の参加へとつながっていくと考えています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

魅力発信の取り組みとして、本校が力を入れている SNS の活用に着目しました。SNS は上手に発信できれば、農業のイメージアップに大きく貢献することができます。現在本校では普段の実習や行事の様子を投稿していますが、日常の記録だけでは見ている側に飽きられてしまう可能性があります。そこで、私たちが農業の豆知識を動画で撮影し投稿することで農業を楽しく学べるのではないかと考えます。このような工夫を通じて農業への関心を高めることができれば、イメージ向上や将来の担い手不足の解消にもつながると思います。今後の農業クラブ活動をより盛んにするためにも、魅力発信についてさらに意見交換を深めていきたいです。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 福井県立福井農林高等学校
生物生産科 3年 井上 佳大

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

近年都市圏の人口増加を伴い、地方の人口不足や少子高齢化が問題になっている。そこで、地方のイベントを活発に行うことで、町おこしを積極的に行う動きがおおく見られてきた。そこで、高校生ならではの発想力でどのようなイベントを開催すると老若男女問わず地域の人が参加できるのかを考えた。集計を取った結果、「お金がかからないイベントを開催する」という意見が1番多かった。理由としては、現代社会はお金の使い方がシビアになってきている現状を捉えて、無料で地域の人が作った野菜や、無料で豚汁が飲めるといった企画があると地域の日が参加しやすいという意見だった。他に多かった意見は、「芸能人を招待する」、「ギネス記録に挑戦する」といった意見があった。どれも共通することは、他の地域のイベントとの差別化を図り、人の集まりを良くするというのを重視していた。イベント内容以外の意見としては、インターネットを使い大々的に告知するといった、イベント内容だけでなく人を集める方法を工夫するという方法も挙げられていた。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業高校の最大の特徴の一つである「農業クラブ」は、毎年多くの農業高校の生徒がプロジェクト発表や意見発表を初め多くの協議で己の農業に対する関心を深めている。しかし、農業クラブに挑戦する生徒数というのは毎年同じ人数であり、競技人口を増やすことが長年の課題である。そこで、どのような活動を行うと農業クラブの競技人口を増やすことができるのかを考えた。話し合いの結果、「活動を写真に撮り、季節ごとに分けカレンダーを作成」、「自分たちの学校で育てた花でしおりを作り、生徒に配布する」といった生徒に何かを強制させるのではなく、プレゼントを用意し農業クラブに興味を持ってもらうという意見が出た。そして、そこで活動を終えるのではなく活動内容をポスターにまとめて発信することで、クラブ員の方にも興味を持ってもらう工夫をするべきと分かった。また、一部ではなくクラブ員全員で、「田んぼアートを作る」などの企画が挙げられた。関心を持ってもらうというよりも、関心を持たせに行くことを意識することが大切という結論が出た。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

現代の農業にとっての最大の課題は、少子高齢化に基づく農業従事者の減少、加えて農業従事者の高齢化である。「食」という人間の生命活動に必須の項目にも関わらず、その「食」を支える大人が減少するのは間違いなく国規模の課題である。そこで、どのように農業に対するイメージアップをすることができるのかを考えた。出た案としては、「新しいブランドを作り農家の利益を上げる」、「小学校や中学校といったこれから将来の夢を考え始める子どもたちに農業を経験する機会を多く与える」、「AIを駆使して労力を減らし、体力仕事という印象をかえる」という意見が出た。農業のという仕事を知ってもらう目線、農業による利益を増やし、収入面での農業のイメージを上げる、農業が体力を多く使うという印象を最新技術を使い緩和するこの3つのバランスよく促進していくことにより若い世代が農業に興味を持つという結論になった。農業で栽培する農作物だけでなく、農業という職業がさらに身近に感じることが出来る社会になる必要がある。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立四日市農芸高等学校
環境造園科 3年 山名 彩葉

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の人たちと交流を深めるには、誰もが気軽に参加できるイベントを開催することが大切だと思います。

例えば、公園や道路の清掃、花壇づくりでは、一緒に作業をすることで自然と会話が生まれ、地域のつながりが深まります。また、グラウンドゴルフやウォーキング、ラジオ体操、ボッチャ、モルックなどは、年齢や体力に関係なく楽しめるため、多くの人に参加しやすいです。さらには、「地域の趣味交換会」を開き、料理や手芸、楽器、DIY、スマホの使い方など、それぞれの得意なことを教え合えば、世代を超えて学び合い、助け合える関係を築くことができます。このような活動を続けることで、老若男女問わず地域の人々が交流しやすく、支え合える地域づくりにつながると考えました。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

たくさんの人達から、農業クラブについて関心をもってもらうためには、広報活動やポスター制作、写真撮影、SNSや学校だよりでの情報発信が大切だと思います。

例えば、SNSや学校ホームページで活動の様子や農業クラブの魅力を発信したり、ポスターやチラシを作成して広報活動を行ったりすることで、多くの人に知ってもらえると思います。また生徒たちが受けている授業や活動も農業クラブに繋がっているということを広めることで、農業クラブへの関心が高まり、生徒や役員の達成感や活動意欲の向上にもつながると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

私たちは、農業のイメージアップには中学生や高校生の想像力を生かすことが大切だと考えました。大人や高齢者とは違った新しい発想が生まれ、若い世代だからこそ伝えられる魅力があると思うからです。例えば、農作業の楽しさや収穫したときの達成感、おいしい野菜ができるまでの様子を「Instagram」や「YouTube」などのSNSで発信すれば、農業に興味を持つ人が増えると思います。また、農業体験を通して自然とふれあう機会を増やすことで、農業の大切さややりがいを実感でき、将来の農業を支える人材の育成にもつながると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立湖南農業高等学校

農業科 3年 園 和佳奈

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私の学校では、実際に農産物即売会を毎月行ったり、農業科のグリーンライフ班では近所の幼稚園や保育園の皆さんとサツマイモの収穫体験や草花班では、近隣の小学校の花壇の花植えを6年生の児童たちと一緒にしたりしています。

私はこれらの活動を踏まえて、他の学科でも地域交流ができると思います。例えば、寄せ植え作りやクッキー、ジャムなど実際に作っているものを一緒に作ったり、他の作物の収穫体験ができると考えました。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

私が1年生のとき、農業クラブとは何か説明されましたが、難しくて理解できませんでした。しかし、執行部に入って農業クラブとは何か理解することができたため、執行部だけでなく、クラブ員全員に理解してほしいと思いました。

そのために、学校で県大会、ブロック大会、全国大会にもっと興味を持ってもらうために、インスタグラムの活用や練習や発表姿を撮影し、ホームページに載せるなど、他人事ではなく自分事のように思えるようにしたいと考えます。また、インスタグラムやティックトックで執行部の活動やおすすめスポットなどをクラブ員全員でやったら楽しそうだと考えました。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

私が考えるに、農業従事者が減っていく理由として収入と仕事の仕方だと考えます。「農業」と言われて世間の人たちは「お金が稼げないんだろう」と考える人が多いですが、実際に専業農家の方々はいます。まず、「農家＝貧乏」のイメージを無くすために、専業農家の方々から話を聞いて、SNSにあげたら良いのではと考えました。

次に、仕事の仕方です。近年、屋外作業は減り、屋内作業が増えています。しかし、農業は屋外作業が基本でさらに地球温暖化の影響で気温が上昇し、夏は暑すぎます。そこで、最近では農作業に機械を導入し、正確な作業や真夏・真冬でも、これまで人力でしていた作業を交代してくれるため危険が少なくなっていることを発信したら良いと考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立勝間田高等学校

総合学科 3年 山本 梨紗

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

現状 サツマイモ交流など小学生と年に2回程度の交流はあるが、年間を通じて行うような農業交流はあまりない。勝央町役場前のドリームファームを活用することで高校生と地域の子どもたちや年配の方との交流が盛んに行われている。

問題点 基本は農業体験する土地の管理や作物を育てて栽培・管理すること自体に、多くの労力が必要で困難なことである。また、活動や交流の目的やその費用、費用対効果、誰が中心となっていくのかなど、多くの問題点がある。

対策 補助金などで交流をサポートしてもらえたら、農業交流を通じて若者に農業を魅力的に感じてもらえるかもしれない。もっと若者が農業を体験する機会を増やす必要があり、ドリームファームのような取り組みは本当に大切になると思う。さらに、現役の農家さんとの繋がりができるとより重要度が増す気がする。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

現状 現在本校では、未来の農業従事者増加のために、ドリームファームという勝央町役場前の耕作放棄地を利用した活動を行っている。ドリームファームではトマトなどの夏野菜、黒豆、サツマイモ、トウモロコシ、タマネギ、ジャガイモ、白菜などの冬野菜を年間を通じて栽培している。年に4回ほど開催しているイベントには幼児・児童とその保護者を中心に多くの参加がある。クラブ員もイベントには多数参加しており、関心を持つクラブ員は多い。ドリームファームの取り組みを継続していくためには、様々な課題もあるが、地域の農業問題の解決にもつながり、クラブ員全員が取り組むことのできる内容や場所として大きな可能性を秘めていると思う。

問題点 ・農業クラブの活動内容をよく理解していない生徒も多い。

・現在のイベントでは、幼児・児童を中心に少しずつ参加人数が増えてきているが、中学生にも参加して欲しいと思っている。

対策 野菜の追肥や土寄せ等の栽培と途中の作業など、気軽にできる農業活動を多く増やし、イベントや途中の作業に参加する人の募集など宣伝をさらに積極的に行う。授業以外にも農業クラブ員が農業にいかに関わっているかをもう一度考え、農業に少しでも関わろうと努力することが大切だと思う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

現状 農業クラブ役員は、農業クラブの魅力をどのように感じているか。私たち農業を学ぶ農業クラブ員が、農業の魅力をあまり感じられていないのではないかな。農業の授業を受けながらも、農業のイメージがあまりよくないため、まず私たちが農業の魅力に気が付くための取り組みを探ることが本当に大事だと思う。

問題点 ・農業クラブは、農業高校同士が交流するには距離が離れていて困難であり、役員会や行事、競技以外の交流があまりない現状である。農業高校に入学する人が少なくなっていることも大きな問題である。

・農業の魅力は、栽培技術が身について将来、新鮮な野菜を自給自足できるなど役に立つことだと考えている。しかし、その魅力やきれいな花の知識や、美味しい野菜や果樹などについて知ることができる良さに気づいていない人が多い。

対策 YouTubeなどで農業系の魅力的なチャンネルは多くあるので、学校でもそれを授業などで見る機会を増やしても良いかもしれない。今後も農業クラブや農業の魅力を発信して理解してもらい、農業の活動を積極的にしてくれる人たちを増やす。気軽に農業体験などができる機会を増やすことは継続する。農業が職業として生活でき、経営が安定することは可能であるというイメージが定着すると、農業が魅力的に思われるのではないだろうか。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 山口県立山口農業高等学校
食品工学科 2年 藤井 志歩

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・ 季節のイベント行事を開催する。(ハロウィン、クリスマス、餅つきなど)
- ・ 学校で飼育している牛などのふれあい体験 (乳しぼり体験や餌やり体験など)
- ・ 学校で収穫した野菜や果物、地域の特産品を使って料理教室
- ・ 花の植え付け体験や野菜などの農産物の収穫体験
- ・ 昔遊び交流会 (けん玉やお手玉など)
- ・ フラワーアレンジメント体験
- ・ 地元のお菓子や学校で育てた作物を使ったお菓子を一緒に楽しむお茶会
- ・ ものづくり交流会 (押し花アートや缶バッジづくり)

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・ クラブ員全員にやってみたいことのアンケートを取り、実現できるものからやってみる。
- ・ 活動の内容や成果を SNS や学校祭などでみんながわかるようにし、達成感を感じられるようにする
- ・ 年に数回学年関係なく交流を目的とした楽しいイベントを行う機会を作る
- ・ 班対抗で野菜の栽培コンテストなどを行い、上級生が下級生に教える機会を作る
- ・ 学校で育てた野菜の販売や試食などを行う企画を行い、日ごろの成果を多くの生徒に知ってもらうことで農業クラブ活動をより意欲的に取り組めるようにする。
- ・ 学校敷地内をつかった農業に関するクイズラリーを行い、ポイント数を競うことによって楽しみながら活動に参加しつつ、自然と農クや農業課題に興味関心を持ってもらう。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・ SNS で定期的に農業をしている様子や種まきから収穫までの成長の様子を発信する
- ・ 農業体験イベントを行い、実際に作物をみんなで育ててもらう
- ・ 地域の特産品を使ったお菓子や料理などの販売会を行う。
- ・ 収穫祭やマルシェを行う機会を通じて、育てた作物がどのように食卓に届くのか紹介する。
- ・ 学校祭など、地域の人が集まるイベントで発表ブースなどを作り、農業に関する研究や活動内容を発表する
- ・ 小中学校と連携して、子どもたちに農業の魅力をわかりやすく、楽しく伝える機会を作る。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 長崎県立北松農業高等学校

食品流通科 2年 松山 凌輔

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、大人向けの体験講座や小学校・特別支援校との交流を学校行事（遠足や体育祭、体験授業等）として行っています。交流会によっては、生徒主体で説明や進行をおこなってるものもあります。しかし、農業クラブ活動として地域の方との交流があるのは、文化祭しかないのが現状です。問題点として、本校では、農業クラブ役員＝生徒会役員であるため、活動を増やそうにも時間的・人的（計画・準備や実施するときの係）にも余裕がないという状況と学校がある場所が、気軽に来校できる場所ではない（駅からも遠く、バスの本数も非常に少ない）ということがあります。解決のための取り組みとして、まずは、学校についての情報発信から始めて、学校行事等を利用し、参加したい行事のアンケート等で調査を行い、ニーズを調べ、その後の活動や交流につなげたらどうだろうかと考えています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、生徒会行事においてはクラブ員全員で取り組む機会はあります。しかし、農業クラブ活動として全員で活動する機会は、遠足時にクラブ員全員によるゴミ拾いボランティア活動や



＜農業クラブ総会の様子＞

農業文化祭での活動等しかありません。生徒会的な行事には関心があっても、農業クラブ関連の競技や大会などに対しては一部のクラブ員しか関心がないのが現状です。「農業クラブ活動とは何かを理解してないクラブ員」や「活動して得られるメリットがないのでかわる気がない」、「部活動との両立が難しい」等の意見を聞きます。多くの生徒が関わりやすくするため、高総体と県連大会の実施間隔の調整など、実施時期の見直しが必要です。また、農業クラブ活動のアピールの仕方を再検討する必要があると思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業だけではなく様々な産業で、従事者や後継者不足に陥っています。とくに地方が深刻な状況です。農業従事者減少の原因には、さまざま要因（少子高齢化・収入が不安定・若者が都市部へ流出する等）があり、農業のイメージアップを図るには、どこに焦点をあててイメージアップを図ればよいのか、わかりにくいのが現状です。私たち農業クラブ員として、できることは学校を利用した魅力発信ではないでしょうか。少子高齢化が進む中で、今後いろいろな産業や職種において従事者の奪い合いがすすむと考えられます。そのため、小学生や中学生など私たちより若い世代へ①収穫体験、②動物とのふれあい体験、③実習風景等をSNS等を利用した発信などを行い、農業の魅力を発信し、農業に対する良いイメージを植え付けることが大切ではないでしょうか。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 島根県立益田翔陽高等学校

生物環境工学科 2年 福原 宗嬉

松本 颯大

湊谷 智弥

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

農業高校の特色を生かした地域交流活動が、老若男女問わず参加しやすい活動になると考えます。具体的には、収穫体験会や農産物販売会などです。収穫体験では子どもから大人まで一緒に農業を体験でき、自然と会話や協力が生まれるのではないかと思います。また、農産物販売会では、生徒が販売する際に栽培方法や農産物の魅力を説明することで地域の人との交流が深まることが期待できます。

農産物販売会は翔陽祭や緑の市という形で実施されており、収穫体験会は本校では地域との交流事業という名称で保育園児・幼稚園児という対象が限られた範囲ではあるが実施しています。実際に土に触れ、作物を収穫する体験は誰でも楽しむことができます。農業高校には農地や栽培技術という強みがあり、その強みを生かして地域との交流を積極的に行うことで、地域の活性化や農業への理解促進につながるのではないかと考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が意欲的に活動するためには、一人一人が役割を持ち、達成感を得られる活動を行うことが大切だと思います。活動内容が一部の人だけに偏ると、参加意欲の低下につながるため、全員が関われる仕組みづくりが必要だと思います。

具体的には、農産物販売会や地域交流イベントなどがあります。販売会では栽培、収穫、袋詰め、販売、広報などさまざまな仕事があり、それぞれの得意分野を生かすことができます。また、地域との交流活動では協力して準備を行うことで責任感や達成感を得ることができます。私は、クラブ活動を活発にするためには、全員が「自分も活動の一員である」と実感できることが重要だと思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージアップのためには、農業のやりがいや先進的な取り組みを積極的に発信することが重要だと思います。具体的には、SNS や動画を活用して学校での実習や農作物の栽培過程を発信することが効果的ではないかと思います。種まきから収穫までの様子や、実際に農産物が販売されるまでの過程を紹介することで、農業の魅力や達成感を伝えることができます。また、地域で販売会を開催し、多くの人に農業に触れてもらうことも大切です。

本校には公式Instagramアカウントがあります。現在は、学校行事や部活動・農業クラブの活動内容を書載していますが、農業高校だからこそ発信できる事があると思います。日頃の学習や実習で得た経験を地域や全国に発信することで、農業への理解と関心を高め、将来の担い手確保につなげていきたいと思っています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 高知県立幡多農業高等学校

グリーン環境科 3年 尾形 銀太

グリーン環境科 3年 國見 悠斗

グリーン環境科 3年 山下 悠

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

・収穫体験や農産物の販売をする

自分たちが育てた野菜や果物を地域の方に収穫してもらったり、販売したりすることで、農業を身近に感じてもらえると思う。

・農業体験やものづくり体験をする

野菜の植え付けや収穫、寄せ植え、木材を使ったものづくりなど、子どもから高齢者まで楽しめる体験を行う。

・学校のイベントに地域の方を呼ぶ

はたのう市場などの学校行事をもっと地域の方に知ってもらい、農産物の販売だけでなく、生徒と地域の方が話したり交流したりできる場にする。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

・一人ひとりに役割をつくる

農業が得意な人だけでなく、写真を撮ることが好きな人、SNS が得意な人、人と話すことが得意な人など、それぞれの得意なことを生かせる役割をつくる。

・みんなでできる活動を増やす

収穫した農産物の販売や学校行事、地域での農業体験など、学年や学科に関係なく参加できる活動を増やす。

・他の農業高校と交流する

他県や県内の農業高校と交流し、お互いの学校で取り組んでいることを紹介したり、一緒に農業体験をしたりすることで、新しい発見や刺激になると思う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

・自分たちが実際に体験したことを発信する

自分たちが実習で感じたことや、作物が大きくなったとき、収穫できたときの喜びを SNS など で 発信する。

・農業高校でできることを知ってもらう

トラクターや高性能な機械を使った実習、スマート農業、食品加工など、今の農業や農業高校で学べることを紹介する。

・農家の方の仕事を紹介する

実際に農家の方を訪ねて、仕事のやりがいや大変なことを聞き、それを自分たちの言葉で発信する。

参加者課題レポート

第2分科会 第4会場

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第4会場	山形県立置賜農業高等学校	香川県立高松南高等学校

第2分科会 第4会場

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	北海道	静内農業高等学校	生産科学科	2	鈴木 優聖
2	栃木県	栃木農業高等学校	動物科学科	2	篠崎 奏夏
3	埼玉県	杉戸農業高等学校	生活技術科	3	ジャハン ビナ
4	千葉県	流山高等学校	園芸科	2	兼原 美依奈
5	東京都	農産高等学校	食品科	2	喜田 ことみ
6	山梨県	農林高等学校	造園緑地科	2	渡辺 悠暉
7	長野県	丸子修学館高等学校	総合学科	3	藤森 敬也
8	福井県	坂井高等学校	食農科学科	2	小椋 夢花
9	三重県	久居農林高等学校	生物資源科	3	菊池 龍人
10	大阪府	農芸高等学校	資源動物科	2	遠藤 希紗
11	岡山県	瀬戸南高等学校	園芸科学科	3	北井 茉莉
12	山口県	大津緑洋高等学校 日置校舎	生物生産科	2	宮脇 桃香
13	熊本県	天草拓心高等学校	生活科学科	2	田尻 琉華

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	山形県	置賜農業高等学校	食料生産経営科	2	鈴木 優斗
15	山形県	置賜農業高等学校	農業資源活用科	2	鈴木 陽輝
16	山形県	置賜農業高等学校	食料生産経営科	1	江本 充輝

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	香川県	高松南高等学校	環境科学科	3	野崎 誉稀
18	香川県	高松南高等学校	環境科学科	3	石井 寿弥
19	香川県	高松南高等学校	環境科学科	3	土居 心結

「学科の壁を越え、全員が活躍する農業クラブへの挑戦」

東北ブロック 山形県立置賜農業高等学校

食料生産経営科 2年 鈴木 優斗

農業資源活用科 2年 鈴木 陽輝

食料生産経営科 1年 江本 充輝

本日は、「学科の壁を越え、全員が活躍する農業クラブへの挑戦」と題して、発表を行います。今年度の第2分科会に設定されたテーマについて、私たちが日々感じている課題と、その解決に向けた本校の取り組みをご報告いたします。

最初に、本校農業クラブについてご説明します。本校の全校生徒数は137名と小規模な学校で、内訳は1年生が43名、2年生が40名、3年生が54名となっています。学科は大きく2つに分かれており、食料生産経営科、通称M科と、農業資源活用科、通称D科の2学科構成です。

さて、今回の発表テーマについて考えるにあたり、まず私たちは現状を正しく把握する必要があると考えました。そこで、本校の農業クラブの実態を把握するためのアンケート調査を実施しました。主なアンケート内容は、「農業クラブ活動に対する現在の意欲状況」「活動に身が入らない、参加しにくいと感じる理由」「『全員でできる』と感じる活動とは何か」「興味を持って取り組みそうなテーマは何か」の4点です。

ここからは具体的なアンケートの結果を見ていきます。まず、農業クラブ活動に対する現在の意欲状況についてです。回答結果を見ると、全体の約4割にあたる42.2%の生徒が、「あまり意欲的ではない」または「ほとんど関わっていない」と回答し、クラブ活動に対して低意欲・未関与の状態にあることが分かりました。さらに課題として、全校生徒の約40%にあたる55名が、このアンケート自体に未回答であったという事実があります。このことから、活動に対する関心自体が非常に薄い層が校内に一定数存在していることが浮き彫りになりました。

1. 学校紹介と農業クラブ組織

・全校生徒数：137名

(1年43名、2年40名、3年54名)

・学科構成

- 食料生産経営科 (M科)

- 農業資源活用科 (D科)

・1年次は総合実習のみ学科合同実習。

・2年次以降は学科・コースごとの活動。



2. 本校農業クラブの実態アンケート調査 (N=83)

アンケートの概要

・実施期間：2026年8月24日(月)～31日(月)

Googleformsで実施 QRの掲示とGoogleclassroomで周知

アンケート内容

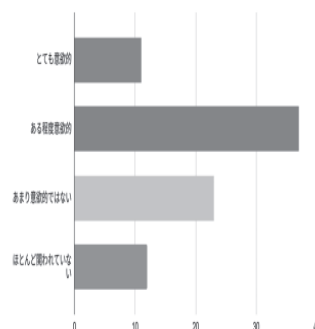
- ・農業クラブ活動に対する現在の意欲状況について
- ・活動に身が入らない、参加しにくいと感じる理由
- ・「全員でできる」と感じる活動とは何か
- ・興味を持って取り組みそうなテーマは何か



①農業クラブ活動に対する現在の意欲状況について (N=83)

・回答の約4割(42.2%)が「あまり意欲的ではない」「ほとんど関わっていない」という低意欲・未関与状態にある。

※全校生の40%が未回答
アンケート回答なし(55名)



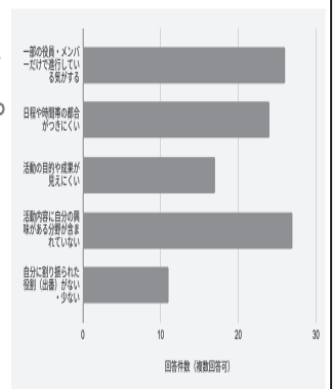
次に、なぜ活動に身が入らないのか、参加しにくいと感じる理由について分析しました。すると、意欲がある層と意欲が低い層とで、直面している「壁」の種類が異なることが見えてきました。意欲層の41.7%が「一部の役員・メンバーだけで進行している気がする」と回答しています。つまり、役員が責任感から一生懸命頑張りすぎてしまうことが、結果的に一般のクラブ員との間に見えない壁を作り、参加の余地を奪ってしまっている可能性があります。一方、低意欲層では、「活動内容に自分の興味がある分野が含まれていない」という意見が37.1%、「活動の目的や成果が見えにくい」という意見が28.6%を占めました。これまでの農業クラブの枠組みだけでは、関心を惹きつけられていないことが分かります。

それでは、どのような活動であれば、生徒たちは「全員でできる」「参加したい」と感じるのでしょうか。アンケートの結果、低意欲層の42.9%が「SNS等による広報・デザイン・動画制作」に関心を持っていることが分かりました。また、農作物を育てるだけでなく、それを利用した商品開発に関心がある生徒も40.0%と高い割合を示しました。さらに、参加しやすい活動形式については、「短時間でサクッと完了する作業」、いわゆる単発イベント型が良いという意見が69.9%と突出しています。次いで「各自の得意分野を活かせる役割分担」を求める声も32.5%あり、長期間の重い責任よりも、自分の得意なことでスポット的に貢献できる環境が求められていることが分かります。

これらの課題を解決し、生徒のニーズに応えるためには、本校がこれまで培ってきた強みを最大限に活かす必要があります。本校には3つの大きな強みがあります。強みの1つ目は「イベントの横展開」です。本校には、約30年にもわたって続く小中学生や保護者向けの体験プログラム「置農ファンクラブ」や、4月から11月まで定期的開催される地域朝市「こまつ市」への継続参加といった実績があります。しかし現状の課題として、これらが役員主導で行われている点が挙げられます。今後は、役員は全体のコーディネーター役に徹し、各生産部門に役割を細かく割り振るこ

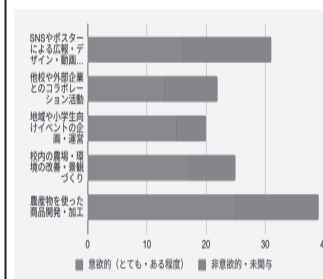
②活動に身が入らない、参加しにくいと感じる理由（複数回答可,N=83）

- ・意欲層（48名）の壁
「一部の役員・メンバーだけで進行している気がする」（41.7%）
→役員としての頑張りや壁を作っている？
- ・低意欲層（35名）の壁
「興味がある分野が含まれていない」（37.1%）
「目的や成果が見えにくい」（28.6%）

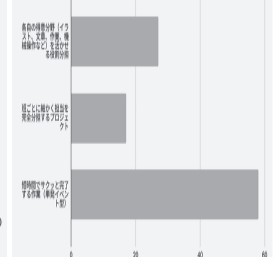


③「全員でできる」と感じる活動とは何か

- ・関心の高いテーマ
低意欲層の42.9%が「SNS等による広報・デザイン・動画制作」に関心。商品開発（40.0%）も高い。



- ・良いと思う活動形式
短時間でサクッと完了する作業
単発イベント型が69.9%と突出。
「得意分野を活かせる役割分担」（32.5%）



本校の強み① イベントの横展開

- ・置農ファンクラブ
約30年続く小中学生・保護者向け体験プログラム。
- ・こまつ市
4月～11月に開催される地域朝市への継続参加。



- 【現状の課題】
役員主導の組織体制
→役員はコーディネーター役
→各生産部門への割り振ること
で活躍の場増やす



とで、より多くの生徒が活躍できる場を増やすことが必要です。

強みの2つ目は、食料生産経営科における高い実践力です。地域の小松小学校との交流授業では、単なる1回の体験で終わらせず、播種から田植え、日々の観察、稲刈り、そして収穫物を用いた給食交流を通じた通年での食育を行っています。また、地域農家や研究機関と連携した先進的農業の実践にも取り組んでいます。さらに、本校は世界に誇る「米沢牛」の産地にあり、畜産業の担い手育成として、理論と実践を掛け合わせた深い学びを展開できる環境が整っています。

強みの3つ目は、農業資源活用科における地域に根ざした実践力です。ダリアや地域伝統野菜など、地元の地域資源を用いた魅力的な商品開発をはじめ、学校農園を活用した体験型こども食堂を通じた農福連携の取り組みも行っています。また、イベント時には小動物とのふれあい動物園を開催し、参加者に直接的な癒しと体験を提供する活動も豊富に持っています。

これら現状の課題と本校の強みを踏まえ、私たちは農業クラブ員全員が意欲的に活動に取り組むための「3つの条件」を考えました。条件1は「リアクションの獲得」です。直接的な評価やSNSでの反響を通して、自分の活動が誰かの役に立っていると実感できる仕組みが不可欠です。条件2は「明確な『役割』」です。全員に一律の農作業を求めるのではなく、SNS広報やデザインなど、個人の得意分野に応じた細分化された役割を配置します。条件3は「単発イベント型の構築」です。目的が明確で、短時間で達成感を得やすいプロジェクトを組むことで、参加への心理的ハードルを下げます。

ここからは、この3つの条件を満たす「全員ができる活動への提案」として、今後私たちが取り組んでいきたい具体的な【学科横断型プロジェクト】を提案します。学科という縦割りの専門性を掛け合わせ、全校で一つの大きなプロジェクトに取り組む体制を作ります。アンケートで明らかになった「商品開発」や「SNS広報・デザイ

本校の強み② 食料生産経営科の実践

- ・小松小との交流授業
播種・田植え・観察・稲刈り・給食交流を通じた通年食育
- ・先進的農業の実践
地域農家や研究機関と連携し、実践的な学びができる
- ・畜産業の担い手
世界に誇る米沢牛の産地
理論×実践で深い学び



本校の強み③ 農業資源活用科の実践

- ・地域資源の資源活用
地域資源を用いた商品開発。
ダリア、地域伝統野菜など
- ・農福連携
学校農園を活用した体験型こども食堂
- ・ふれあい動物園
イベントでの小動物触れ合い体験。



意欲的に活動に取り組むための条件

- ・条件1：リアクションの獲得
直接的な評価やSNSの反響を通して「役立っている」と実感する。
- ・条件2：明確な「役割」の付与
一律の作業ではなく、個人の得意分野（SNS広報、デザイン等）に応じた細分化された役割配置。
- ・条件3：単発イベント型の構築
目的が明確で、短時間で達成感を得やすい仕組み。



全員ができる活動への提案

- 【学科横断型プロジェクト】
 - ・縦割りの専門性を掛け合わせ、全校で一つのプロジェクトに取り組む。
- ・アンケートで明らかになったニーズを統合
 - 商品開発の要素
 - SNS広報・デザインの要素（低意欲層の巻き込み）
 - 単発タスク化（参加ハードルの低下）



ン」の要素を積極的に取り入れることで、これまで参加していなかった低意欲層を巻き込みます。そして、タスクを単発化することで、誰でも気軽に参加できる仕組みを構築します。

実践提案の1つ目は、「M科の生産物×D科の加工×SNS広報」の連携です。例えば、地域の「こまつ市」において、両学科の合同活動として販売戦略の立案から実践までを一貫して行います。また、子ども食堂の共同運営では、メニュー開発から調理、提供までを一緒に行います。その際、タスクの細分化を徹底します。単に物を売るだけでなく、広報用動画の撮影やInstagramでの情報発信、ポスター作成など、全員が何らかの得意分野で役割を持ち、輝ける場を用意します。

実践提案の2つ目は、「部門ごとの割り振りからの脱却」です。これまでのように部門ごとで活動を完結させるのではなく、食料生産経営科が生産した質の高い生産物を素材として、農業資源活用科が体験型のワークショップを企画するといったコラボレーションを行います。そして、事前のSNS広報や当日の案内・運営など、得意分野を活かした単発タスクを豊富に用意し、学科が混ざり合った混成チームで運営を行います。これにより、交流が深まり、新たな意欲を生み出します。

最後にまとめです。これまでの農業クラブは、一部の熱心な役員だけが引っ張る組織になってしまっていたかもしれません。しかし私たちのこれからの目標は、各自の得意分野を活かすことで、137名全員が主役になる組織へと生まれ変わることです。一人ひとりに明確な役割があり、「自分が誰かの役に立っている」という意識をしっかりと持てる活動。それが、新しい置賜農業高校農業クラブを作っていくと私たちは確信しています。これで、置賜農業高校の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

実践提案①

【M科の生産物×D科の加工×SNS広報】

- ・合同活動：「こまつ市」における販売戦略立案と実践。
- ・合同活動：子ども食堂におけるメニュー開発から提供までの共同運営。
- ・タスクの細分化で全員が役割を持つ。



実践提案②

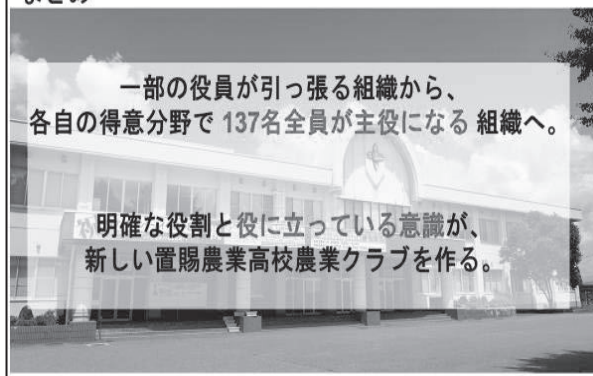
- ・「部門ごとの割り振り」からの脱却。
- ・食料生産経営科の生産物を素材に、農業資源活用科が体験型ワークショップを企画。
- ・SNS広報や当日案内など、得意分野を活かした単発タスクを用意し、混成チームで運営。



まとめ

一部の役員が引っ張る組織から、
各自の得意分野で137名全員が主役になる組織へ。

明確な役割と役に立っている意識が、
新しい置賜農業高校農業クラブを作る。



クラブ員代表者会議 参加者レポート

北海道ブロック 北海道静内農業高等学校

生産科学科 2年 鈴木 優聖

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

上記のテーマに関して、私が実践した内容が、「子どもたちによる農業の村づくり」です。農業クラブの活動として、地域の教育委員会にご協力いただきながら企画を立案。「ふるさとアグリチャレンジ」と題して、子どもたちが自分の村の畑で野菜を栽培するプロジェクトを立ち上げました。生産計画や栽培指導は私たちクラブ員が担い、日頃の管理は地域ボランティアが支える、まさに地域一体型の仕組みです。早速募集を開始すると、参加する子どもは25名、ボランティアは54名という大規模プロジェクトへ発展。子どもたちの話し合いにより、村の名前は「あぐり村」に決定し、小学生村長による開村宣言によって、ついに動き出しました。現在は村民で協力して栽培に励んでおり、収穫後はジャムづくりなどの加工体験も行う予定です。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

自分の興味のある分野を選び、座学だけでなく実習など実際に作業をしながら学べる機会を増やすことが重要だと思います。そのためには、地域との交流を強化し、クラブ員自身がやりがいを感じることができる活動を強化することが課題でした。

そこで、本校が力を入れている専門分会の活動をアップデートしました。園芸部門では、現在研究している植物残渣を使用したバイオ炭の製造現場を公開。興味を持たれた役場やJAなど13名が視察に訪れ、未来の農業について深く意見交換を行う貴重な機会を創出しました。

サラブレッド部門では、馬が怖いと思う地域の子どもたちに向けた馬育活動を実施。うまうま美容室と称して、サラブレッドにリボンを付ける活動をとおして、馬に興味を持つ子どもを増やすことができました。

食品部門では、研究班ごとに地域企業と連携した特産品開発を推進。商品化に向けた試作品の試食会を、なんと「新千歳空港」で開催しました。地域で磨いた味を全国の消費者にダイレクトに届けることで、これまでにない規模での交流を実現しました。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

まず、農業のイメージについて、どうしても「つらい」「汚い」「危険」のいわゆる3Kの印象を持っている人は未だに多いように感じます。そのため、若年層をターゲットに、SNSを活用し、農作業の様子や農家の一日、収穫の瞬間などを短い動画で紹介する発信活動に力を入れることが重要です。私たちは、地域農業の魅力を伝える動画を、生産者に協力してもらい撮影しました。

これだけで多くの人にPRすることは難しいですが、多くの農業高校で取り組めば、大きな発信力につながると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立栃木農業高等学校

動物科学科 2年 篠崎 奏夏

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の老若男女が参加できる活動として、農業・動物・食・ものづくり・伝統文化など幅広い体験活動を行うことが考えられる。草花の苗植えやサツマイモの収穫体験、収穫した野菜を使った料理・加工体験（かぼちゃのケーキ、キャロットケーキなど）、動物と散歩などふれあい体験など農業高校ならではの活動があると良い。本校では幼稚園生のイチゴ収穫体験、特別支援学校との農業を通じた交流、地域の小学生が来校するサイエンススクール等が実施されている。

子供にとっては、野菜を育てたり収穫した野菜を調理したりすることで、農業や食への興味を持ち、苦手な野菜を克服するきっかけになると考える。また、高齢者にとってこどもや地域の人と交流しながら楽しい時間を過ごすことができ、日々の楽しみや活力につながる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員がやってみたいことについてアンケートを実施し、集まった意見を実際の活動に取り入れる。また、農業に関するイベントを増やし、他学科や他校との交流、農産物販売など、普段の活動では経験できないことができる機会を作る。

さらに、コンテストや発表会だけでなく、農産物の重さあてゲーム、他学科の実習体験、ミニ動物教室など楽しみながら農業について知ることができる活動を増やし行うことで農業クラブへの関心・興味を高め、クラブ員全員が主体的に参加できる活動につなげる。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業の仕事内容や魅力をわかりやすく発信することが重要だと考える。農業高校の実習の様子や農業従事者の一日の仕事、農産物ができるまでの過程など、普段見ることのできない農業の現場を紹介する。また、スマート農業や農作業を支援する技術など、現在の農業がどのように変化しているのかも発信する。

さらに、野菜や畜産、食品など農業に関わるさまざまな魅力や、意外と知られていない農業の豆知識を紹介したり、実際に農業を体験できる機会を作ったりすることも効果的だと考える。特に、農業高校生や大学生が行っているプロジェクトや研究、地域との活動などを紹介することで、「学生も農業についてこんなことをしている」ということを知ってもらい、若い世代にも農業を身近に感じてもらえるようにすることを提案する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立杉戸農業高等学校
生活技術科 3年 ジャハン ビナ

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・地域イベント（自治会行事・運動会・伝統行事）への参加
- ・農業体験（田植え・収穫体験など）の実施
- ・多世代型「子ども・地域食堂」の開催
- ・野菜・草花の販売会や花束づくりの体験
- ・家畜見学や農場見学
- ・地元食材を使ったパンづくりなどの料理体験
- ・折り紙などを使った食べ物づくり体験
- ・スポーツ交流を通じた地域との交流

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・仲間の活躍を共有し、参加意欲につながる
- ・校内で月報誌を発行し、農業に触れる機会を増やす
- ・農場当番やボランティア活動を充実させる
- ・ポイントや景品などの参加意欲を高める仕組みをつくる
- ・自分の興味・得意分野を生かせる役割分担を行う
 - 栽培・収穫 ○PR活動 ○デザイン・ブランディング ○販売・イベント運営
- ・農業の「楽しさ」と「大変さ」について話し合い、考えを共有する
- ・地域貢献活動（農家・牧場の手伝い、除草など）に取り組む

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・就農支援制度や補助金について広く発信する
- ・子ども向け農業体験や保護者参加型イベントを実施する
- ・有名人やインフルエンサーと連携して魅力を発信する
- ・InstagramやTikTokなどのSNSで写真・動画を発信する
- ・「楽しさ・大変さ・やりがい」を伝える投稿を行う
- ・SDGsや環境保全、食品ロス削減など農業の社会的価値を発信する
- ・農業従事者へのインタビューや体験談を紹介する
- ・農業に関する質問に答える企画で理解を深める
- ・農業体験を通して、農業の魅力やメリットを伝える

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立流山高等学校

園芸科 2年 兼原 美依奈

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私は、地域の農産物や加工品を活用した交流活動がよいと思います。例えば、地域のお祭りで野菜や加工品を販売したり、親子で参加できる収穫体験や食品加工体験を実施したりすることで、幅広い年代が楽しみながら交流できます。

また、地域の清掃活動や花壇整備などの環境美化活動も、誰でも参加しやすい活動です。こうした活動を通して顔見知りが増えることで、地域のつながりが深まり、災害時などにも助け合いやすくなると思います。地域の人が気軽に参加できる活動を増やすことは、安心して暮らせる地域づくりにつながると考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

私は、クラブ員全員が意欲的に活動するためには、一人ひとりが役割を持ち、自分の意見を生かせる環境づくりが大切だと思います。活動内容を全員で話し合って決めることで、主体的に参加する意識が高まると考えます。

クラブ員全員で取り組める活動としては、校内外の環境美化活動や農産物販売会の補助、地域イベントへの参加などがあると思います。これらの活動は学年や専攻に関係なく参加でき、協力することで仲間とのつながりを深めることができます。

このように、全員が参加しやすい活動を行うことで、協力する大切さを学ぶことができ、農業クラブ活動への意欲向上にもつながると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

私は、クラブ員全員が興味や関心を持ち、意欲的に活動するためには、一人ひとりが役割を持ち、自分の意見を生かせる環境づくりが大切だと思います。活動内容を全員で話し合って決めることで、自分たちの活動であるという意識が高まり、主体的に取り組むことができると考えます。また、それぞれの得意なことや興味のある分野を生かして役割を分担することで、誰もが参加しやすくなると思います。

クラブ員全員で取り組める活動としては、校内外の環境美化活動や農産物販売会の補助、地域イベントへの参加などがあると思います。これらの活動は学年や専攻に関係なく参加でき、協力して活動することで仲間とのつながりを深めることができます。また、活動後に成果や課題について話し合う機会を設けることで、次の活動への改善につながり、よりよい活動を目指すことができます。

このように、全員が参加しやすく、一人ひとりが必要とされていると感じられる活動を行うことで、クラブ員同士の協力意識が高まり、活動への意欲向上につながると考えます。さらに、地域との交流を通して、社会に貢献することの大切さを学ぶことができると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立農産高等学校
食品科 2年 喜田 ことみ

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

高校生が日頃の実習で得た知識や技術を活かし、地域住民を対象とした「体験型ミニワークショップ」を開催することを提案する。一般的な体験入学は中学生が対象だが、その対象を地域の未就学児から高齢者まで広げる。具体的には、食品科の強みを活かした「親子で楽しむ旬のジャムづくり教室」や「身近な農作物の加工体験」、園芸デザイン科では「ベランダでできる簡単プランター栽培講座」などを企画する。高校生が「先生役」としてやり方を教えたり、一緒に作業をしたりすることで、生産品の販売だけでは伝わらない農業や食品づくりの魅力をダイレクトに伝えられる。また、異なる世代との対話を通じて高校生自身の学びも深まり、地域とのあたたかい繋がりを築く交流の場となると考えた。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

全クラブ員が楽しみながら参加できる活動として、「校内ショート動画コンテスト&リレー発信」を提案する。現在では SNS の活用は不可欠だが、一部の役員の活動だけが更新の対象となると全員の意欲向上に繋がらない。そこで、各学科や班ごとなどに、実習風景や失敗談や実習あるあるなどをスマートフォンで 15 秒程度の動画に撮影し、投稿し合う仕組みを作る。優秀作品を校内投票で表彰するほか公式 SNS でも対外的に発信する。身近なスマホを使って自分たちの日常を工夫してのショート動画作成なら、ハードルが低くなり参加できる。他学科の活動内容を知るきっかけにもなり、農業や農業クラブ全体への親しみと連帯感が高まると考えた。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業には「きつい・大変」というイメージがまだ強く残っていると感じる。それを私たち農業高校生の手で、そのイメージを「かっこいい」や「新しい」の発見に変えていきたい。そこで提案するのが、「映える・魅せるポップアップ農園」である。高額なスマート農機がなくても、無料スマホアプリでのデータ管理や、農場シュミレーションゲームなどを使えば、今までより手軽に色々な人に伝えることは可能だと考える。駅前や地域のイベントスペースへ出張し、おしゃれな展示や簡易的なデジタル体験ブースを、私たち高校生が主体となって運営する。同世代や子供たち様々な世代の人たちに実際に触れてもらい、私たちが楽しそうに農業に取り組む姿や体験してもらうことで「農業っておもしろそう、かっこいい」という憧れを抱くきっかけを、自分たちの手で作り出したい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 山梨県立農林高等学校
造園緑地科 2年 渡辺 悠暉

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、収穫感謝祭や地域の保育園や特別支援学校高等部との交流、棚田を守るための活動の手伝いなど、地域の方々が年齢や性別を問わず、農業にふれることのできる活動を行っている。

収穫感謝祭では、各学科が生産・製造した農産物や加工品の販売を行い、多くの地域の方々にご来場いただいている。また、地域との交流活動では、田植え体験や栽培した農産物の収穫体験、農産物を調理した会食交流を行い、農業を肌で体験するだけでなく、実際に味わいご活用いただく活動を提供し、少しでも農業に関心を持っていただけるように努めている。



収穫祭の様子

今後は、体験活動だけでなく、イベント内で農業に関わるクイズ大会を行ったり、農業にまつわる紙芝居などを作成し読み聞かせをしたり、体験がなくても農業に関心を持っていただくことができる活動を展開していきたい。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校は農業系学科で構成されているため、全校生徒が農業クラブ員である。農業クラブ本会役員が主となり、単位クラブ活動を運営している。しかし、本会役員以外の興味・関心は薄く、単位クラブ活動にも意欲的に取り組む生徒は少ないのが現状である。

地域イベントのボランティアや全校生徒で農業クラブの活動を紹介できるカードゲームを作成するなど、本会役員以外にも活躍できる場を作っていきたい。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

本校では、学校ホームページの中で日々の学びの様子を発信している。これは保護者や地域の方々だけでなく、本校を志望する中学生にも「山梨県立農林高校」を知ってもらうツールとして活用をしている。ホームページを見ているときに、「楽しそう」「やってみたい」と感じ、農業に興味を持ってもらえることが、農業のイメージアップにつながると考えている。

ホームページは学校の様子がわかる反面、文章と写真だけで紹介することが主になり、若年層が見るとなると、少しわずらわしさがあるのではないかという意見もあがっている。そこで、SNSを活用し、企業のCMのように短い時間で農業の魅力や現状をアピールする動画を作成し、若年層を中心に「農業」を知ってもらえるような内容を発信していきたい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県丸子修学館高等学校

総合学科 3年 藤森 敬也

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私たちの学校では、自分たちで種から育てたマリーゴールドを地域の方々に配布する活動を行っています。花を受け取った方々から感謝の言葉をいただくことも多く、生徒と地域住民との交流のきっかけとなっています。また、花を通して学校の活動を知ってもらうことで、地域の方々との信頼関係を深めることにもつながっています。このような活動は、年代を問わず多くの人が参加しやすく、地域全体のつながりを強める効果があると考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全員が参加できる活動として、自分たちで栽培した作物の販売や配布、地域の方々との交流活動などがあると思います。これらの活動では、一人ひとりが役割を持って取り組むことができるため、協力することの大切さを学ぶことができます。また、自分たちが育てた作物を購入してもらったり、「おいしかった」と声をかけてもらったりすることで、大きな達成感や、やりがいを感じることができます。その結果、農業への関心が高まり、活動への意欲向上につながると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

取組の一つとして、近隣の小学校と交流しながら米や野菜と一緒に栽培し、収穫したものを調理したり販売したりする活動が考えられます。実際に私たちの学校でも、小学生と交流しながら米や野菜の栽培を行っています。小学生が栽培から収穫までの過程を体験することで、食べ物が作られる苦労や喜びを学ぶことができます。また、自分たちで育てた作物を食べたり販売したりする経験を通して、農業の楽しさや達成感を実感することができます。このような体験を積み重ねることで、農業に興味を持つ子どもを増やし、将来的な担い手の育成や農業のイメージアップにつながると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 福井県立坂井高等学校
食農科学科 2年 小椋 夢花

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私は地域の人が参加できるイベントを企画することが重要であると考えている。例えば、野菜の収穫祭を開催し、子どもから大人、高齢者まで楽しめる内容にすることで、多くの人が交流できる機会をつくることができる。また、野菜の捆み取りや参加賞を用意することで、誰でも気軽に参加しやすい環境を整えることができる。さらに、SNS やチラシを活用して事前に広報活動を行い、地域全体に情報を発信することで、参加者の増加につながると考える。地域の人が「また参加したい」と思えるイベントを継続的に実施することが、地域交流の活性化につながると考える。

また、ギネス記録への挑戦や巨大な作品づくりなど、話題性のある企画を取り入れることも効果的だと考える。例えば、田んぼアートの制作では、地域の農家と生徒が協力して取り組むことで、一体感を生み出すことができる。その活動を通して地域と学校のつながりが深まり、地域全体を盛り上げる取り組みになると考える。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

私は農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためには、活動記録を撮影して季節ごとにまとめたカレンダーの作成や、自分たちで育てた花を活用してしおりやドライフラワーを制作し、校内へ展示・発信することが必要であると考えた。なぜなら、成果が形として残ることで1年間の活動を振り返ることができ、達成感を得ることができるからだ。また、芝生アートや草刈りアート、田植えコンテストなど、生徒全員が協力して取り組める活動を実践することも必要である。全員参加型の活動を実施することで、クラスやクラブ員同士の協力する機会が増え、活動への意欲向上につながると考える。このような取り組みを継続することで、農業クラブ全体の活性化につながると考える。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

私は農業の魅力を発信するためには、幼少期から農業に触れる機会を増やすことが重要である。実際に、野菜の収穫や田植えを体験することで、農業を身近に感じることができ、農業に対する敷居を下げることににつながると私は考える。また、収穫した作物を調理し、食べるまでの過程を体験することで、食と農業のつながりについて理解を深めることができると考える。さらに、地域の農産物をブランド化し、その魅力や特色を積極的に発信することで、多くの人に農業への関心を持ってもらうことができる。このような取り組みを継続することで、農業のイメージアップや将来の担い手の確保につながると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立久居農林高等学校
生物資源科 3年 菊池 龍人

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では10年以上にわたって「わくわく農林塾」という活動を行って地域住民、児童、生徒との交流を続けることで、学校の魅力を伝える活動を行っています。地域へのつながりとしては、学校ホームページからの情報発信、インスタの活用を進めることで、学校で行っている活動の認知度が増しました。校内の生産物販売所にも地域の人がたくさん来てくれているので、情報発信の場としても活用したいと思っています。また「花いっぱい運動」「地域イベントへの参加、生産物販売」などの活動も行っています。その他プロジェクト活動などで食品コースが津市榊原地区との連携を進め、榊原地域の活性化を図る計画を進めています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校では入学してきた生徒向けに「新入生オリエンテーション」を毎年3年生が中心になって行っています。また「農業クラブ総会」では昨年度の行事を振り返り、また今年度の行事について、新役員の承認とともに確認できる機会を設けています。生徒会と協力して朝、生徒昇降口に執行部が立ち「あいさつ運動」を行っています。交流としては、家庭クラブとの合同企画として「花いっぱい運動」を年2回春と秋に行います。家庭クラブの生徒とペットボトルでハンギングフラワー作り、地域へ配布するための花のプランター作りを行っています。今年もプランターでサツマイモ栽培も行いました。協力して植え付けをして栽培管理を行い、収穫した芋で家庭科に調理をお願いして年末に交流会を行いました。

昔行われていた「農業クラブデー」の復活も検討しています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

本校では10年以上にわたって「わくわく農林塾」という活動を行って地域住民、児童、生徒との交流を続けることで、農業の魅力を伝える活動を行ってきました。また、食品コースでは今年からGAP取得に取り組み、米でのGAP取得に取り組んでいます。また、収穫された生産物を加工し、様々な付加価値を付けたものを販売し、地域交流を深めることで農業のイメージアップを図る。このような取り組みをインスタなどを活用して幅広く広げ、またその活動に参加できる機会を設け、古い時代の農業経営から新しい時代の現代農業を理解してもらうことで、企業で働くのと変わらない魅力的な仕事であるということを伝えられることで魅力を発信できると思います。農業高校では生産物販売、イベント参加など様々な外部の人たちと接する機会があります。その際に新しい農業について紹介するなど農業の魅力を伝えるチャンスもあると思います。私たち農業高校生も学校にある最新機器を積極的に活用して行くことはもちろんですが、先進的な農業に取り組んでいるところもたくさんあると思うので、先進農家見学、インターンシップなどに積極的に参加して身をもって先進技術を体験することで、より具体的に説明でき新しい農業を伝える事ができると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 大阪府立農芸高等学校
資源動物科 2年 遠藤 希紗

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」
農芸高校で飼育している家畜とのふれあいを中心とした、『体験型のイベント』が参加しやすいと思います。私が体験型イベントを選んだ理由は4つあります。

- ①ウサギやモルモットなどの小動物は世代を問わず人気だから→人気のある動物がいることで、地域の人々も参加しやすいのではないかと感じている。
- ②農業高校の中でも珍しいアルパカやポニー、他にも多くの種類の動物に触れ合ってもらえることができる→普通ではできない体験ができるため、いろいろな人が興味や関心を持ちやすい？
- ③各動物の場所ごとに、その動物にちなんだ簡単なクイズを出す→私たちの普段の実習を通して得られた知識を活かして、地域の人々との会話のきっかけとなる
- ④スタンプラリーを実施する→動物に対して怖い意識を持っている小さい子どもたちにも楽しく参加してもらえると考えるため

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

わたしが大きな仕事を任されて、やりがいがあるなど感じるのは、『自分の意見が採用されたとき』です。農業クラブ員全員の意見を取り入れることは難しくても、それらの意見を元に全員で話し合っ、いくつかの案を一つの案にまとめることで、お互いの高め合いや学科や専攻を超えた強力なチームワークとなると思います。

クラブ員全員ができる活動としては、農業の良さを知ってもらうためのイベントなどを開くことで、イベントに出品する商品や、資源動物科、ハイテク農芸科の畜産物を利用し、食品加工科でそれらを加工してつくったコラボ商品を販売することで各専攻ごとの良さをお互いに知ることができ、交流の機会も増えると思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

抽象的な伝え方では細かい魅力まで伝わらない可能性があるため、『実際の実習風景』や、『経験者へのインタビュー動画』などを発信することが良いと思います。

情報の発信方法は、多くの利用者がいる Instagram や X(旧ツイッター)、YouTube など発信することで、より多くの人々に情報を届けることができると思います。

そして情報を発信するうえで重要なことは…

- ・農業のマイナスなイメージを払拭する
- ・動物などの癒しの存在をアピールする
- ・私たち生徒の実習風景を見てもらうことで、『高校生が農業にふれている』ということをアピールする
- ・楽しい雰囲気を届ける

このような情報を中心に発信することで農業の魅力が少しでも伝われば良いなと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立瀬戸南高等学校
園芸科学科 3年 北井 茉莉

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

現 状：年齢層の違う人たちが一緒に交流できる機会がない。販売実習では、異年齢の人との交流する機会はある。学校行事は苗ものの販売会（4月）、シクラメン祭（11月）に開催し、各コースでは寄せ植え、ブドウ販売、田植えなどの交流会がある。

問題点：交流会に参加する年齢層が限定されている

→イベントによって年齢層が違う。

社会人が来れる可能性の高い日曜の開催がない。

販売会でものを買っているだけで、それ以外の情報を伝えられていない。

対 策：日曜に販売会の中で、ふれあい体験や農クで出店など異年齢が集まれるようにする。
地域の農園とコラボして全年齢を対象に体験会を実施する。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

現 状：一部の人だけが取り組んでいる状況である。興味がない。授業や放課後実習でしか農業に関わる機会がない。

問題点：①興味があるのは一部である

→役員は興味があって関わることもあるけど、他の生徒は実習でしか関わることができない。農クにマイナスイメージを持っている。

②クラブ員全員に参加できるような取り組み（活動・イベントなど）の開催

→文化祭の最初の時間を少し借りて農業に関するゲームを開催。

③農業クラブ活動を広める

→販売会のときに農クで作った動画を放映。生産物購入時に、作成したチラシ渡す。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

現 状：後継者不足。農業の機械化が進歩し作業性は軽減されている。

本校では SNS は積極的に発信している。

問題点：①発信するが、閲覧者が少ない

→販売会に QR コード。

②農業系の就職者が少ない

→安定しないから、将来の仕事に選びにくい。SNS をアップするのは、教員でなければならない。

対 策：実習の様子などの投稿だけでなく、「おもしろい」「見て楽しい」農業の動画作成

→先生や生徒で流行りのものを「農業」に変えて発信する。

出前授業や訪問実習の実施（小・中学校など）

→授業だと疲れてしまうから体育館で農業に関するイベントをする。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 山口県立大津緑洋高等学校 日置校舎
生物生産科 2年 宮脇 桃香

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の老若男女が参加できる活動として、農業体験を取り入れた交流会を行ってみたいで
す。例えば、野菜の収穫体験や芋掘り体験など、子どもから高齢者まで楽しめる活動が考え
られます。また、収穫した農産物を使った料理体験や試食会を行うことで、世代を超えて交
流することができます。高校生が地域の方に農業の魅力を伝えるだけでなく、地域の方から
昔の農業や食文化について教えてもらう機会にもなります。農業を通して地域のつながりを
深められる活動にしたいです。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が意欲的に活動するためには、まず活動する意味や目的を一人ひとりに
理解してもらうことが大切だと思います。何のために活動するのかを知ること、自分から
取り組もうという気持ちにつながると思います。また、全員でできる活動として、学校や地
域の農業に関するイベントへの参加、農場の環境整備、農産物の販売などが考えられます。
みんなで協力して活動することで、農業クラブへの興味や関心も高まると思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を
発信していくべきか。」

農業のイメージアップをするためには、スマート農業の魅力を発信することが大切だと思
います。農業は「きつい」「大変」というイメージがありますが、ドローンやロボット、ICT
などを活用することで、作業の負担を減らしたり、効率よく農業を行ったりすることができ
ます。実際に機械を使っている様子を SNS や動画で紹介すると、農業を知らない人にも興味
を持ってもらえると思います。これからの農業は、技術を活用して進化していることを伝え
たいです。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 熊本県立天草拓心高等学校

生活科学科 2年 田尻 琉華

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・農業体験型のイベントを企画する。具体的には、小学生のいる世帯を対象に果物・野菜などの収穫体験を行う。そして、その収穫物で料理を行い、食事会および座談会を行う。このような地域の人々を農業高校に招き、さまざまなイベントを企画する。
- ・地域で行われている清掃活動に高校生が参加する。
- ・農業高校で育てた野菜や花の苗を配り、家庭で育ててもらう。農業高校生が地域の方々に育て方などを説明する。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・実習製品の売り上げや収穫量を生徒に見える形とする。これにより、自分たちの成果が数字で知ることができ、さらに意欲的に実習に取り組むことができる。
- ・学校内でのクラブ員だけの表彰を増やす。(実習奨励賞など)
- ・他の農業高校との交流を増やし、情報共有を行う。活動報告会などを行うことで他校のいいところを取り入れたりすることができる。
- ・生物生産科(A科)と生活科学科(L科)と食品科学科(F科)の3学科共同で商品開発などを行う。(昨年度は、お歳暮用の天草大王を使った水炊きセットを販売した。)



3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・スマート農業を実習で活用して、SNSで農業高校生や中学生・小学生に発信を行うことで「農業＝きつい」というイメージをなくす。
- ・農業の楽しい実習や面白い部分(知識)をSNSで発信する。これにより、農業を身近に感じてもらう。
- ・農業クラブ員でインスタなどのアカウントを作成し、高校生活の日常を発信する。(実習製品の販売日などをお知らせする。)

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 山形県立置賜農業高等学校

食料生産経営科 2年 鈴木 優斗

農業資源活用科 2年 鈴木 陽輝

食料生産経営科 1年 江本 充輝

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

山形県立置賜農業高等学校（全校生徒 137 名）では、食料生産経営科（M 科）と農業資源活用科（D 科）の 2 学科体制で農業を学んでいます。レポートでは、現状の課題を分析から分かった、クラブ員全員の意欲向上と、全員参加を実現するための具体的な活動について提案します。

①現状と課題（アンケート調査の分析）

全校生徒を対象に実施した実態調査（N=83）から、以下のことが分かりました。

・低意欲・未関与層の存在：回答者の 42.2%が「あまり意欲的ではない」「ほとんど関わっていない」状態と回答しています。また、全体の約 40%がアンケートに未回答であり、活動に対する関心自体が薄い層が一定数存在することが分かりました。

・意欲層と低意欲層を感じる壁：意欲層の 41.7%が「一部の役員・メンバーだけで進行している気がする」と感じており、役員主導の運営が壁を作っている可能性があります。一方、低意欲層は「興味がある分野が含まれていない」（37.1%）や「目的や成果が見えにくい」（28.6%）ことを参加しにくい理由として挙げています。

②意欲的に取り組むための条件

アンケート結果から、低意欲層の約 4 割が「SNS 広報・デザイン」や「商品開発」に関心を持ち、全体の約 7 割が「短時間で完了する単発イベント型の作業」を好むことが分かりました。これらを踏まえ、全員が意欲的に活動するための「3 つの条件」を設定しました。

・条件 1 リアクションの獲得：直接的な評価や SNS の反響で「役立っている」実感を得る。

・条件 2 明確な役割の付与：一律ではなく、個人の得意分野（広報、デザイン等）に応じた細分化された役割を配置する。

・条件 3 単発イベント型の提案：目的が明確で、短時間で達成感を得やすい仕組みを作る。

③全員ができる活動への具体的な実践提案

アンケートの結果と分析を踏まえ、【学科横断型プロジェクト】を考えています。

・提案①：生産×加工×SNS 広報の連携プロジェクト 地域朝市「こまつ市」や体験型子ども食堂において、M 科の生産物と D 科の加工技術を組み合わせた共同運営を行う。

・提案②：部門割り振りからの脱却と混成チーム運営 生産物を素材とした体験型ワークショップを企画し、学科が混ざり合ったチームで運営する。当日の案内や SNS 広報など、単発タスクを用意することで参加のハードルを下げ、全校生徒の交流と意欲向上を図る。

このような実践を通して、学科の壁を越え、全員が活躍する農業クラブを作っていきたいです。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック連盟 香川県立高松南高等学校

環境科学科 3年 石井 寿弥

環境科学科 3年 土居 心結

環境科学科 3年 野崎 誉稀

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

老若男女を問わず地域の人に参加できる活動として、私たちは、地域の方々と協力して行う、農業体験や収穫した農作物を活用した交流会などがよいと考えました。現在は地域の人同士が関わる機会が少なく、特に子どもや高校生などの若い世代と高齢者の方が交流する機会は限られていると思います。そこで、農業という身近なものをきっかけにすることで、年齢に関係なく多くの人が参加できるのではないかと考えました。

このような活動を一度だけに終わらせず、季節ごとに継続して行うことも大切だと思います。何度も一緒に活動することで、世代を超えて自然と会話が生まれ、お互いの事を知ることができます。また、子どもたちは農業の楽しさや食の大切さを学び、高齢者の方から昔の知恵や経験を教えてもらうことができます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が興味や関心を持ち、意欲的に活動するためには、一部の人だけが中心となるのではなく、クラブ員全員が、自分の得意な事や興味があることを活かせる環境を作ることが大切だと思う。そのためには活動内容を先生や役員だけで決めるのではなく、クラブ員から意見やアイデアを集め、みんなで活動を考えていくことが大事だと思う。自分たちの意見やアイデアが取り入れられることで、一人一人が活動に前向きになれると思う。

活動内容としては、例えば学校で育てた野菜や花などを地域の方に販売する活動がある。これは多くの農業高校で行われていると思う。全クラブ員ができる活動だと思う。販売するためには栽培・収穫・商品としての調整を行わなければならない。様々な仕事をへて販売することができる。販売までに様々な仕事があり、多くのクラブ員で役割を分担することもできると思う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者が減少し、高齢化が進む中で、将来の農業を支える担い手を確保することが重要な課題となっている。そのためには、農業の魅力を多くの人に知ってもらい、特に若い世代に「農業をやってみたい」「農業は面白そう」と思ってもらえるような発信が必要である。

農業は作物を育てるだけの仕事ではない。スマート農業、6次産業化、ブランド化など、新しい技術やアイデアを取り入れることで、様々な可能性が広がっている。こうした将来性を発信し、「農業は新しいことに挑戦できる仕事」というイメージを持ってもらうことが重要である。

農業のイメージアップを図るためには、「農業は大変だから人が必要」と伝えるだけではなく、「農業には魅力があり、面白く、将来性のある仕事である」ということを具体的に伝えていく必要がある。特に、実際に農業をしている人の姿や、農業を楽しんでいる様子をSNSなどで発信することで、農業をより身近で魅力的な仕事として感じてもらい、将来の担い手の確保につなげることが必要である。

参加者課題レポート

第2分科会 第5会場

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第5会場	愛知県立猿投農林高等学校	高知県立幡多農業高等学校

第2分科会 第5会場

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	岩手県	盛岡農業高等学校	食品科学科	2	上平 悠仁
2	栃木県	那須拓陽高等学校	農業経営科	2	蓮實 勇希
3	埼玉県	川越総合高等学校	総合学科	3	小林 みちる
4	千葉県	成田西陵高等学校	園芸科	3	朝妻 力斗
5	東京都	農産高等学校	農産科	2	中島 百香
6	山梨県	笛吹高等学校	食品化学科	2	吉良 悠矢
7	長野県	佐久平総合技術高等学校	食農クリエイト科	2	横林 梨亜
8	愛知県	渥美農業高等学校	食品科学科	3	伊藤 綺香
9	三重県	明野高等学校	生産科学科	2	山下 結愛
10	兵庫県	但馬農業高等学校	みのりと食科	2	玉谷 果歩
11	岡山県	新見高等学校	生物生産科	3	戸田 愛花
12	愛媛県	伊予農業高等学校	生物工学科	2	八束 月埜
13	大分県	日出総合高等学校	農業経営科	2	本田 一貴

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	愛知県	猿投農林高等学校	農業科	3	坂口 花
15	愛知県	猿投農林高等学校	農業科	3	三橋 怜央
16	愛知県	猿投農林高等学校	生活科学科	2	鶴田 苺依

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	高知県	幡多農業高等学校	園芸システム科	2	岡崎 万桜
18	高知県	幡多農業高等学校	園芸システム科	3	岡 紫菜
19	高知県	幡多農業高等学校	園芸システム科	3	藤本 桃花

「農業クラブ員が活動を意欲的に取り組むための環境づくり」

東海ブロック 愛知県立猿投農林高等学校

農業科 3年 坂口 花

農業科 3年 三橋 怜央

生活科学科 2年 鶴田 莓依

1 はじめに

東海ブロックは、愛知県・岐阜県・三重県の3県で構成され、日本のほぼ中央に位置し、各県内においても地域により環境が大きく変わることから、多種多様な農業が展開されています。愛知県では、温暖な気候を生かし、花きの産出額が63年連続で1位。他にも大葉やキャベツ、いちじく、ぎんなん等の生産が盛んです。畜産では名古屋コーチンが鶏のブランドとして全国的に知られています。岐阜県は、高低差に富んだ地形や豊かな清流を生かし、南部の美濃地方では、夏ほうれんそうやブランド米であるハツシモの生産。北部の飛騨地方では豊かな自然の中で飼育されたブランド牛である飛騨牛が全国的に知られています。三重県は、平野・盆地・山間地域・海岸部と多様な地形を生かした農業が行われ、県のブランドである伊勢茶や松坂牛の生産やなばなやツツジ等の栽培が盛んです。

現在、東海ブロック学校農業クラブ連盟には、愛知県連盟10校2,797名、岐阜県7校2,147名、三重県6校1,540名が所属しています。

本校が所属する愛知県連盟は、渥美農業高校、安城農林高校、稲沢緑風館高校、猿投農林高校、佐屋高校、新城有教館高校、新城有教館高校作手校舎、田口高校、鶴城丘高校、半田農業高校の10校で組織されており、愛知県の東西南北に分布しており、地域の特色を生かした教育活動が展開されています。

2 愛知県立猿投農林高等学校について

愛知県立猿投農林高等学校は明治39年に設立され、本年度で創立120年を迎える伝統ある農業高校である。校訓は「質実剛健」であり、真摯な態度と強い意志で学び、成長するという意味が込められています。本校は、豊田市井上町に位置し、北には猿投山、南には豊田市街と豊かな自然が広がっている。また、トヨタ自動車の本社工場がある地域でもあり、自然と産業が共存する環境の中、4学科が特色ある学びを展開し、地域と連携をし、授業内外問わず様々な取組・学習を行っています。各科の教育目標は表の通りです。



<各科の教育目標>

農業科	草花・果樹・野菜・畜産の各分野で近代的な経営能力を身につけ、広い視野に立って実践する農業経営者や技術者を育成する。
林産工芸科	木材の加工や特用林産物の製造、演習林を活用した森林環境保全や林業に関する知識・技術の習得に努める。
環境デザイン科	環境を重視した生活空間の創造を目的に、心安らぐ空間、暮らしやすい社会基盤の計画、設計、施工に関する専門的知識・技術を習得する。
生活科学科	農業の生産から消費までを考えた食物や農業と福祉について学習し、農業科目・家庭科目についての専門的な知識・技術を身に付ける。

3 事例報告

① オンライン農業鑑定競技会の実施

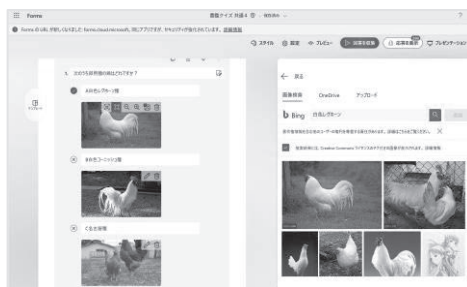
今年度、私たちはテーマに含まれる、「全てのクラブ員が参加しやすい活動」について考えた。その中で、入学したばかりの1年生でも挑戦しやすい内容を目指し内容の精査を行いました。

執行部で検討を重ねた結果、昨年度農業鑑定競技会について、「範囲が広くなり勉強しにくい」「何から学習すればよいかわからない」「意欲が続かない」といった声が多くあった。そこで、学年や学科に関係なく、クラブ員全員が参加できる取組として、執行部が【共通分野】の学習教材を作成し、競技に取り組みやすい環境づくりを目指しました。

教材作成にあたり、クラブ員が取り組みやすい方法を検討する中で、宿題は「スマートフォンやタブレットで解きたい」「オンラインの方が便利」という意見が多くあったことを思い出し、生徒全員が利用できる Microsoft Forms を活用して問題を作成し、気軽に学習できる環境を整えました。オンライン化したことで、回答期限の設定や問題の編集を簡単に行うことができ、参加クラブ員にとっても取り組みやすい環境にすることができたと思います。特に、画像もオンラインから検索し使用することができるため、作成も他のサイト（アプリ）よりも簡単でした。一方で、一度問題ページを離れると戻れないというデメリットがあった。しかし、この点は実際の競技会と近い条件であるため、本番を意識した練習として有効であるという結論になりました。

作成した問題は、160 問（40 問を 4 コース）。1 コースの解答時間を実際の競技時間である 14 分に設定した。当初の予定は学習教材としての配布であったが、競技会に近い設定ができたため、「オンライン農業鑑定競技会」兼学習教材として設定した。QR コードを添付したプリントを配布し、4 月下旬から 5 月上旬にかけて実施しました。

実施した結果、多くのクラブ員が参加し競技会を体験する良い機会となりました。結果として、最高得点は 142



点でした。成績上位には3年生が多く入り、経験の差が表れる結果となりました。



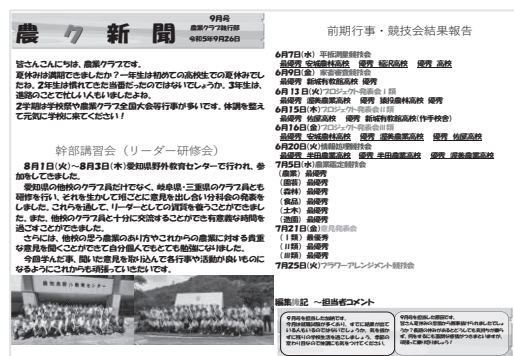
オンライン形式を利用したことで採点が自動化され、回答データを可視化することができました。特に記述問題に関しては、設定した模範解答と相違があるか不安でしていたが、出力されており、採点困難な記述問題の採点の省力化ができた。

また、回答数の表示は問題作成画面からも随時更新されるため、回答率の把握もしやすかったです。問題ごとの正答率だけでなく、回答時間等も確認することができ、コースごとに問題の難易度の評価をすることもできました。正答率や得点分布などもすぐに確認でき、集計結果は Excel へ出力できたため、運営側の処理作業の負担軽減にもつながりました。

② 農ク通信の改定

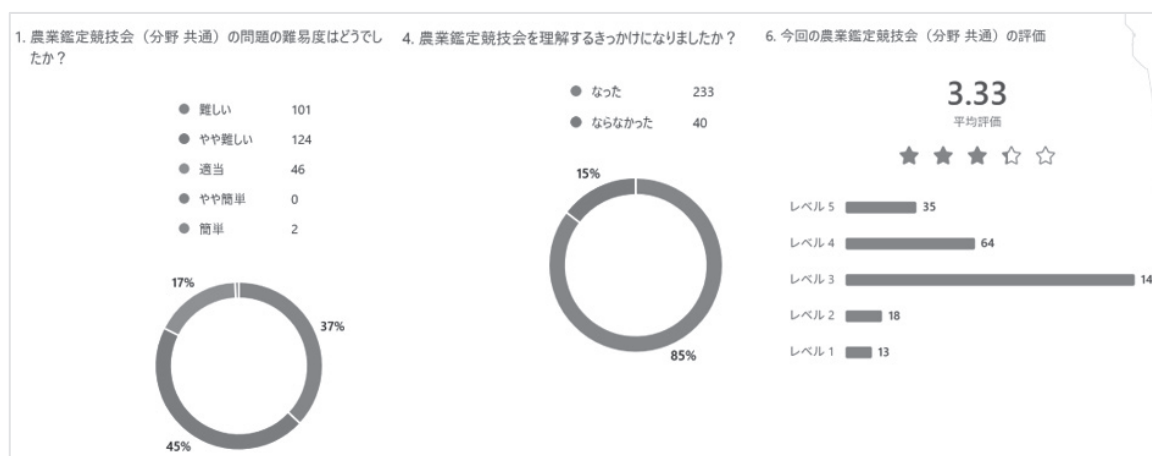
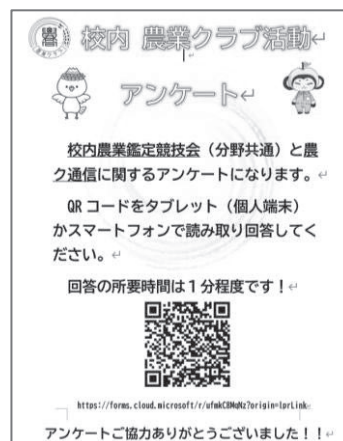
農業クラブ活動に対する興味や関心が日々の学校生活の様子から十分とは言えない状況を課題と考えた。そこで、従来の農ク新聞を見直し、毎月発行する農ク通信へ変更した。活動報告だけでなく、農業クラブの役割や大会の様子なども紹介し、活動をより身近に感じてもらえる内容を目指しました。

農ク通信では、読みやすさと親しみやすさを重視しました。分かりやすいタイトルを設定し、競技会や会議など普段の学校生活では知ることが難しい情報も掲載しました。さらに、季節感のあるデザインを取り入れ、クラブ員に興味を持ってもらえる紙面づくりを意識しました。

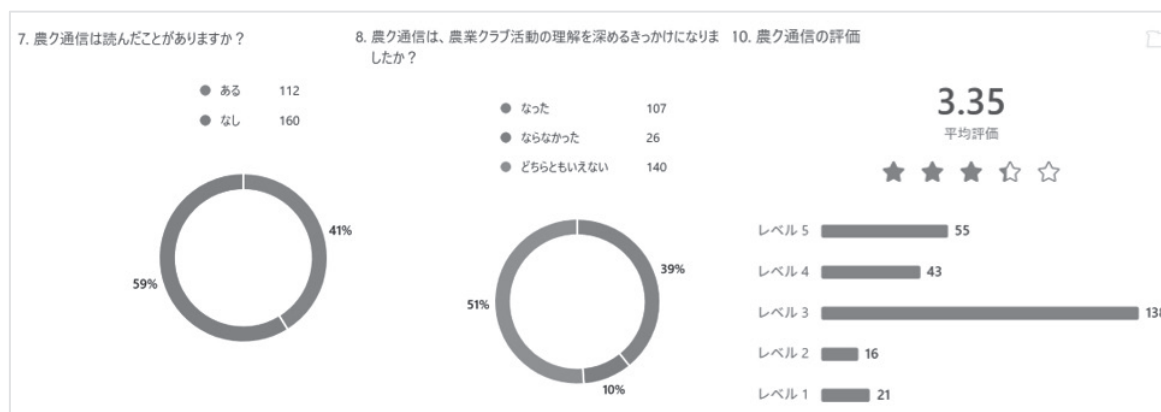


4 まとめ

活動の成果を確認するため、アンケートを実施し、オンライン農業鑑定競技会では、今後の学習教材作成のために、「難易度」、「問題数（コース数）」、「学習教材としての評価」、「競技会の理解」、「改善点」、「総合的な評価」の6つとしました、「その中で難易度では、「難しかった」という意見が多くあったが、「学習教材として活用できる」「競技会への理解が深まった」という評価も多くいただきました。さらに、「今後も継続してほしい」「他分野でも実施してほしい」という要望もあり、教材としての一定の評価をいただいた。全学科の生徒から高い関心が示されました。



農ク通信についても予想以上に高い評価を得ることができました。しかし、「農ク通信が農業クラブ活動の理解を深めるきっかけになったか」という質問では、「どちらともいえない」と回答した人が半分以上を占めており、通信の構成の改善が必須だと感じました。いただいた意見の中では、選手の活動や大会までの過程についてもっと知りたいという意見が多く寄せられました。



以上の結果から、どちらの活動もクラブ員の興味・関心を高める効果があったと考えています。今回の活動を通して、クラブ員全員が意欲的に活動するためには、執行部が中心となり活動に参加しやすい環境を整えることが重要であると改めて感じました。オンライン農業鑑定競技会は、学習機会の提供だけでなく、競技会への理解や関心を高める取組となりました。また、農ク通信は、農業クラブ活動を身近に感じてもらうための有効な広報手段となったと考えています。今後も両方の活動を継続し、さらに改善を重ねながら、より多くの生徒が意欲的に参加できる農業クラブを目指していきます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 岩手県立盛岡農業高等学校

食品科学科 2年 上平 悠仁

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

1つの田畑を複数の区画に分けて、子どもと学生や社会人と高齢者の3つの世代で1つのチームを組み、1つの区画を共同で定期的に管理していく。子どもは豊かな想像力で看板のイラスト作成や苗植えを行う。学生や社会人は柔軟性に富んだ頭と体をつかって耕作やマルチ張りを行う。高齢者は長年の経験をつかって畝作りやマルチ張りなどの補助を行う。また、協力することで各々の得意分野を生かして地域の人との対話や絆をつくることができると考える。



2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

第1分科会のように各学年で役割分担を行って田畑を管理していく。畑の計画や育てる野菜なども自分たちで決めて育てることで、興味・関心と共に責任感も育つと考える。そしてそこで管理して育てた野菜を加工（ふかしいもなど）して試食会を行う。その一連の流れを「note」や「Instagram」で常時発信していく。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農場開放を行う。農業従事者の方をゲストとして呼び、「育てている野菜について」や「苦勞していることや辛いこと」、「楽しいことややりがい」も、わかりやすく多く語ってもらい、質疑応答の場を設ける。利用者には見学してもらい、実際に体験をしてもらう。「自分でも出来るかも」や「こんな風に働きたい」と具体的なイメージをもってもらい、将来の選択肢の1つとして考えてもらう。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 栃木県立那須拓陽高等学校

農業経営科 2年 蓮實 勇希

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・地域農産物を使った料理教室

子どもから高齢者まで参加し、地域の農産物を使った料理や郷土料理を一緒に作る。

- ・地域農産物の収穫体験・農業体験

学校農場を活用した野菜の収穫、搾乳体験を行い、農業高校の学習を知ってもらう。

- ・地域の農産物を使ったマルシェ・販売会

地域の農産物や加工品を販売しながら、農家・子ども・高齢者などが交流できる場をつくる。

- ・地域の自然・環境を守る活動

地域の人と一緒に、農道や河川などの清掃、花植えなどを行い、活動後に交流会を開く。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・「農クの日」を設定する

「農ク」にちなんで「9」のつく日を農業クラブの日と設定し、食品・作物・草花・野菜・畜産・植物バイオの各学科が連携し、学科横断的に学び合う機会を設ける。

- ・農業クラブ員全員で農産物を育てる

クラブ員全員で栽培する作物を決め、植え付けから収穫、販売や加工まで協力して行う。

- ・活動の成果を発表・共有する機会をつくる

活動で得た成果や学んだことを、校内発表会だけでなく、SNS や校内掲示などで紹介し、他のクラブ員にも活動の魅力を知ってもらう。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・SNS や動画を活用して農業の魅力を発信する

Instagram やYouTube で、農作業の様子や農業高校生の日常、収穫の喜びなどを紹介する。

- ・農業の「カッコいい・楽しい」を発信する

最新の農業機械やスマート農業、ドローンなどを紹介し、「昔ながらの農業」というイメージを変える。

- ・農業で働く人の声を紹介する

若手農家や農業高校の卒業生などにインタビューし、農業を始めた理由や仕事のやりがいを発信する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立川越総合高等学校

総合学科 3年 小林 みちる

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

○収穫体験・農業体験教室

- ・野菜や果物の収穫を地域の子どもから高齢者まで一緒に楽しむ
- ・種まき、苗植え、収穫など、一年を通して季節ごとに体験する

○花、野菜の栽培教室

- ・家庭でもできるプランター栽培などを教える

○学校訪問

- ・野菜を使った工作やクイズ、学校で野菜を育てる

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

○クラブ員の意見を聞く

- ・アンケートや話し合いで「やりたい事」を聞く
→自分が参加している自覚

○他学年、他校との交流を増やす

- ・ほかの人と協力して農業を近くに感じてもらう

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

○SNSの活用

- ・農作物の成長過程を発信、農業の楽しさ実際に活動している高校生の様子を伝える

○「やりがい」を伝える

- ・自分で育てた作物を収穫できる喜び
- ・消費者に「おいしい」と言ってもらえる嬉しさ
- ・自然の中で働く魅力

○農業のイメージを身近にする

- ・「農業＝高齢者」というイメージを変える
→若い農業従事者の活動を紹介する



農業をする人だから
こそ感じられること
を発信する

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立成田西陵高等学校

園芸科 3年 朝妻 力斗

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・農業クラブ主催でのイベントを企画したり、地域のイベントへの参加をして農業クラブの活動紹介を行う。文化祭で農業クラブのブースをつくり、本校が実施している課題研究の内容を紹介し、来校した地域の方と意見交換を行う。
- ・農業クラブ加盟校で合同の農作物、加工品直売会を行い、地域との交流をする。
- ・学校園場を用いての地域の方への農業体験を実施する。本校では、近隣の小学校との交流し、日本茜の染物体験を行った。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・農業クラブ活動への参加機会を増やすためにイベントを企画する。
例えば、収穫したものの農作物品評会を実施する。あらかじめ、品目と品種を決めておいて収穫したものの品質や大きさを競う。上位入賞者には表彰し、クラブ員のモチベーションを上げられる。また、栽培技術の向上を図ることができる。
他には、食品加工選手権を実施する。料理のテーマごとに区分分けをし、レシピを事前に提出、学校の加工室で調理し、見た目、味を評価基準に料理を競う。食品の加工・調理というところで、気軽に参加してもらおうきっかけをつくる。
- ・学科を越えて互いの活動内容を知る機会をつくったり、連携して研究活動を行う。本校は3学科に分かれており、それぞれの学科がどのような活動をしているか知る機会が少ない。課題研究発表会を全学科同日に行い、お互いに活動内容を知る機会になってほしい。
また、本校は「2027年国際園芸博覧会」への出展が決まっている。この活動では、土木造園科・園芸科の生徒が中心となってガーデン制作を行っている。それぞれの学科の特徴を活かし意欲的に取り組んでいる。このようなイベントやコンテストに学科を越えて参加することで、興味・関心を持って取り組んでくれるのではないかと思った。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・農業についての魅力発信としてInstagramやYouTubeを用いて農業高校での実習や、農家での体験活動、農家の方へのインタビューしている様子などを配信する。本校では、地元ラジオ局と協力し、農業高校や農業の魅力を生徒が話して発信している。
- ・AIやドローンなどの最先端技術の紹介、農作物をブランド化する経営など、大変そうというイメージから、最新の農業の取り組みや技術を発信することでイメージアップにつながると思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立農産高等学校定時制

農産科 2年 中島 百香

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校は、東京 23 区東部地区葛飾区西亀有にあり、学校周辺は住宅地が広がっている。定時制では、学校農場を活用した野菜、草花等を学習できる園芸分野と加工や製造等を学習できる食品分野の両方が4年間で学ぶことができる。

この特色を活かして学校農場を地域の方に開放し、春に野菜の播種や定植、夏に収穫体験と野菜や農業に関するゲームやクイズなどのイベントを実施する。また、小さいお子さんには夏野菜の販売を手伝ってもらい、地域の方々と触れ合う活動の機会を設定する。冬は収穫したダイコンやハクサイを活用し漬物に加工するなど、食品分野も体験していただくことで、年間を通して本校を中心に地域の方が参加できるように農業クラブとして取り組みたい。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ活動において、クラブ員全員の興味を引き出し、全員が主体的・意欲的に取り組める環境をつくることは、農業クラブ役員として非常に重要だと認識している。

しかし、夜間定時制農業高校のため全日制とは異なり、年齢層も幅広く外国籍のクラブ員も在籍している。また、始業前はアルバイトをしているクラブ員も多く、放課後は時間的な制約もありクラブ員全体で取り組める活動は制限されてしまう。今回クラブ員代表者会議に参加して、全国の農業高校がどのような取り組みをしているのか、事例発表や分科会での話し合いを参考に会議の内容を学校の持ち帰り、農業クラブ役員と協議して今後本校において、クラブ員全員ができる活動にどのようなものがあるのかを考えていきたい。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

令和8年3月現在、葛飾区の農家戸数は148世帯、耕地面積31.21ヘクタール（東京ドーム6.7個分）【葛飾区のホームページより】であり、コマツナの生産が盛んである。

本校と地元農家との連携は、ブルーベリー観光農園の摘み取り体験のお手伝い、各チェックポイントの畑を巡って野菜を収穫しながら、ゴールを目指す野菜収穫オリエンテーリングのボランティア、第2学年総合実習での農家実習等がある。これらの活動を当日だけの参加ではなく、内容を映像や画像で記録し、ショート動画を作成して発信することで、地元葛飾産野菜や果樹をPRすることで農業や農産物のイメージアップにつなげていく。

農業は大変な仕事というイメージをカッコいい、面白い、おいしい、未来につながる仕事であることや、収穫の達成感、食を支えている魅力、地域農家と地域住民とをつなげるように魅力を発信していきたい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 山梨県立笛吹高等学校
食品化学科 2年 吉良 悠矢

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人々が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

老若男女を問わず地域の人々が参加できる活動や交流として、まず挙げられるのが地域のお祭りや、清掃活動・美化活動などのボランティア活動です。これらはいずれも、さまざまな世代の地域住民が参加し、交流を深めるのに適した活動であると言えます。

また、農業や地域の食と関連したイベントとしては、農業体験や収穫体験、地域の食材を活用した料理教室などが考えられます。これらのイベントは、地域住民同士の交流を深めるだけでなく、地域の農業や食への関心や理解を高めることで、地域農業の活性化にもつながると考えられます。このような活動やイベントを地域の人々とともに行うことは、地域のつながりを強め、持続可能な地域社会を築くうえで非常に重要であると考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が意欲的に活動するためには、活動そのものを増やすだけでなく、一人一人が活動の目的や意義を理解し、自分なりの役割や興味を見つけられる環境を整えることが重要だと私は考える。農業クラブとはどういう役割があり、どのような活動があるかを中学生や入学した生徒に伝えることが大切である。現在行っている環境調査も多くの県が提出できていないと聞きました。何故行っているか、この活動をすることどのようなことがわかるのかなど、各生徒が理解していけばもっと活動が広まると思います。新しい活動をするより、今ある活動をより広めていき、より素晴らしい活動にすることが必要だと考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

現在の農業には、「体力的な負担への不安」や「自然災害などによる経済的な不安」といった課題があります。植物を育てたり、園芸を趣味として楽しんだりする人は多くいます。しかし、その一方で、農業を職業として選ぶ人は減少しているのが現状です。そのため、こうした不安を解消するための取り組みが必要であると考えます。

例えば、スマート農業の導入が挙げられます。ドローンやロボットなどの機械を活用することで、作業の効率化が進み、体力的な負担を軽減することができます。また、経済的な不安についても、収入保険や農業共済などの制度を活用することで、自然災害による収入減少や経営上のリスクに備えることができます。

農業の楽しさや魅力を伝えることはもちろん大切ですが、それだけでなく、このような農業に対する不安やマイナスイメージを和らげる情報もあわせて発信していくことが重要です。そのような取り組みが、農業に対する理解を深め、より良い印象を持ってもらうきっかけになると私は考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県佐久平総合技術高等学校
食農クリエイト科 2年 横林 梨亜

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の人に参加できる活動や交流として、自分たちが学校で育てたものを地域の方に食べてもらうことで学校に来てもらう機会ができ、学校のことも知ってもらえるし、学校と地域の方が交流できるいい機会になると思います。しかし、現在はそのような機会がほとんどなく、農産物販売会などで生産物を販売するだけに留まっています。そこで今後は、高校生食堂を企画し、メニュー作りから考え、できるだけ学校産の食材を使って、幅広い世代が楽しんでもらえる機会を作っていきたいです。

また、中学生体験入学で実施しているような模擬授業を地域の方を対象に行うことで農作業を体験してもらい、大変なことだけでなく、農業の楽しさも知ってもらえると考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業系の部活動で続けてきた研究や農業クラブの行事など先輩たちが広げてきた輪を繋げることで、興味・関心の場が増え、一人一人が意欲的に取り組む機会が持続的に確保することができます。

また、校内外の関係人口を増やすことで関心が高まります。活動を校内で終わりにするのではなく、お店や大学を巻き込んだ活動を増やすことで自分たちの活動を客観的に評価され、学校の魅力をクラブ員が再確認できる機会になります。校内の魅力を最大限に生かす「佐総食堂」などの企画を計画実施することでより多くのクラブ委員が参加できる活動へと発展させることができると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

種まきから収穫までの農作業を定期的に体験してもらう機会をつくる。また、その様子を、SNSを通して発信することにより、実際に体験を行えない人にも農業の楽しさを知ってもらうきっかけをつくる事が出来ると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立渥美農業高等学校
食品科学科 3年 伊藤 綺香

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

(1) 地域イベント・交流活動の実施

ア 地域イベントへの参加・開催

地元の農家さんや各校で生産した農産物の販売や加工品等の飲食ブースを設け、農業高校生と地域の人と交流の機会を設ける。

イ ボランティア活動の実施

地域主催のイベントやお祭りなどの運営に携わることが挙げられる。実施事例として、田原市主催の菜の花祭りでは、高校生がボランティアとして運営に参加する他、学校で生産したマイナー作物の加工品を振る舞うことでより多くの人に地元の特産物の魅力を伝えることができた。



(2) 世代間交流の推進

小学校や幼稚園を農業高校に招き、日常の実習で学んでいることを活かした収穫体験や植え付け体験を通して農業への興味関心を育てる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

(1) 目標を持った活動

競技会や発表会以外に執行部を中心とした全校生徒を巻き込んだ企画を実施する。活動例として、本校で栽培する過程で発生した規格外のイチゴをスムージーに加工し全校生徒に振る舞った。その結果、規格外作物の活用事例や食品ロスについて考えるきっかけとなる他、多くのクラブ員に喜んでもらうことができた。



3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

(1) SNS を活用した情報発信

Instagram・X・YouTubeなどで、高校生ならではの写真や動画を配信し、農業高校生だからこそその実験実習の様子や達成感など高校生活の様子を発信することで、これから日本の農業を担う中高生や子供達に農業の魅力を知るきっかけとなると考える。

(2) 農業を身近に感じてもらう取組み

これから初めて農業を始める人の収入が安定するよう栽培が容易な作物の栽培方法を確立し、新規就農者が安定して収入が得られるようにすることで農業に対するハードルを下げる。また、実践事例として全く手間のかからない「青パパイヤ」を栽培地域の特産品とし、活用方法の研究に取り組むことで新規就農者の増加を目指す。



クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立明野高等学校
生産科学科 2年 山下 結愛

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

収穫祭や1年の豊作を願う祭りを開催し、地域で育てられた農作物の魅力を多くの人に知ってもらう機会をつくる。また、収穫した野菜や果物を使った料理教室や試食会を開催し、地元の食材のおいしさを味わってもらおう。さらに、カボチャを使ったジャック・オ・ランタンづくりなど、生産物を活用したクラフトイベントも実施し、子どもから大人まで楽しめる内容とする。このような活動を通して、地域の人々が交流を深めるとともに、農業への関心を高め、地元の農産物の魅力を再発見できるイベントを目指す。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

オリジナルのブランド名を考え、ロゴやキャラクター商品の袋やシールのデザインまで、すべて自分たちで制作することで、農業クラブ独自のブランド化を図る。

栽培だけでなく、デザインや広報、販売など一人ひとりが役割を担うことで、それぞれの得意分野を生かしながら活動に参加できる。

またみんなが1つのブランドを作りあげることで、達成感や責任感を得ることができる。

さらに「文化祭でオリジナル商品を〇〇円分売り切る」といった具体的な目標を設定することでクラブ員全員が同じ目標に向かって協力し合い、チーム一丸となって意欲的に取り組めると考える。



3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

最近、農家の数が減っていて、悪いイメージが上がっている。しかし、農家の数が減ることで人手不足を補うためにスマート農業が発達したり、競争相手が少なくなり、個人の価値が高まる。そのため結果が見えやすくなり、生産者がやりがいを感じやすくなるため、生産者の数の維持・増加につながる。このようなことで、テレビやSNSを使い、発信することでイメージアップできるのではないかと考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 兵庫県立但馬農業高等学校

みのりと食科 2年 玉谷 果歩

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

活動を通して地域住民同士の交流が深まり、支え合いや助け合いの輪を広げることができる。例えば、農作業の手伝いや農地の維持管理などのボランティア活動を実施することで、世代を超えた交流の機会を作ることができる。また、地域の道路や交流センター周辺の清掃活動を行うことで、住みよい環境づくりへの意識を高めることができる。

さらに、ふれあい喫茶を開催し、お茶やジュース、お菓子を囲みながら楽しく会話をしたり、カラオケなどのレクリエーションを行ったりすることで、地域住民が気軽に集まれる場を提供し高齢者の見守りや孤立防止にもつながると考える。

そのほか、花壇に季節の花を植える活動も効果的です。子どもから高齢者まで一緒に参加でき、地域の景観美化や環境づくりに貢献。花の成長を見守ることで、地域への愛着や連帯感を育むことができると思う。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

各学校で共通した大きなテーマを設定し、そのテーマに沿って個人やグループで課題研究や実践活動に取り組む方法が考えられる。同じ目標に向かって活動しながらも、それぞれが興味のある分野を選択できるため、主体性や探究心を高めることができる。

各学校の特色ある農産物や加工品を持ち寄り、県内の農業高校が集まるマーケットを開催することも魅力的な活動である。例えば、但馬農業高等学校であれば但馬牛やシクラメンなど、地域の特色を生かした商品を展示・販売することで、学校間の交流を深めるとともに、農業の魅力や地域の特産品を広く発信することができると思う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

実際に農家の方々から、農業の魅力ややりがいについて直接話してもらう機会を設ける。農作物を育てる喜びや収穫の達成感、農産物を消費者に届けることへの誇りなど、関心を引くことができると思う。

また、SNS やテレビなどのメディアを活用して農業の魅力を発信することも重要である。農作業の様子や収穫の喜びなどを動画や写真で紹介することで、農業を身近に感じてもらうことができる。

また、小学校や中学校で農業体験を実施する。種まきや苗の植え付け、収穫などを実際に体験することで、農業の大切さや楽しさを学ぶことができる。

このように、農家の生の声の発信、メディアの活用、そして農業体験活動の充実を通して、農業の魅力を広く伝えることで、イメージアップと新たな担い手の確保につながると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立新見高等学校
生物生産科 3年 戸田 愛花

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

現状：

- ・農業の交流がない。 ・外部に出るイベントや、校内で行う活動の規模が縮小傾向である。
- ・年齢層の違う人たちが一緒に交流できる機会がない。

問題点：

- ・イベントなどの認知度の低さ。 ・費用の制限。 ・交通による制限、地域の格差。

対策：

- ・補助金などを活用する。 ・活動を増やす（マルシェなどに出品するなど）。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

現状：

- ・他の農業クラブ員の興味・関心なく、積極的に取り組めてない。
- ・農業クラブ活動に参加する際に義務感を強く抱いている。

問題点：

- ・活動内容が理解されていない。 ・競技会で得られるものがほとんどないと感じている。
- ・クラブ員の積極性がない。 ・活動に興味があるのは一部のクラブ員だけである。

対策：

- ・活動・イベントの開催。 ・販売、広報、イベント運営、SNSでの情報発信を行う。
- ・楽しめるような校内企画を行う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

現状：

- ・農業の魅力を感じていない。 ・大変、きついイメージがある。
- ・SNSでの発信はすでに行っている。

問題点：

- ・閲覧者不足（的確に発信できていない）。 ・農業に興味を持っている人が減っている。
- ・うれしいと感じられること（収穫）までの期間が長く、楽しさを伝えるにくい。
- ・農業高校へ進学する人が少なくなっている。

対策：

- ・動画投稿サイトで農業系の魅力的なチャンネルは多くあるので学校で見る機会を増やす。
- ・小さなプランターなどでサイクルの早い作目を育てる。
- ・実際に育てた農産物を販売する経験などを積極的に発信する。
- ・実習の様子などの投稿だけでなく、「おもしろい」「見て楽しい」農業の動画を作成する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 愛媛県立伊予農業高等学校

生物工学科 2年 八束 月埜

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

老若男女関係なく地域の人に参加できる活動として、農業体験や地元の特産品を用いた料理教室、地域の方との交流会などがあると思います。農業高校としては、農業クラブ員が近隣の福祉施設を訪問して、利用者の方々と一緒に物を作ったり、花壇の手入れをしたりといった活動が実施されており、世代を問わず地域を巻き込んだ活動が積極的に展開できていると思います。植物の管理をすること、物の作り方を教えることなどをきっかけに会話も生み出しやすく、世代間の壁だけでなく、コミュニケーションが苦手な方にも楽しんでもらえています。高校生－高齢者、高校生－園児といった異なる世代を1対1でつなぐ活動は多くあります。園児－高校生－高齢者といったように多様な世代を繋ぐ活動に高校生が中心となって展開できていくとより多くの地域の人を巻き込む活動になると思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が興味・関心を持って活動するためには、農業に詳しくない人でも楽しみながら参加できる活動を校内で増やすことが大切だと思います。例えば、季節の花を使ったフラワーアレンジメント、木材を使った小物づくり、農業に関するクイズ大会、学校で育てた花を使った葉を作成して配布するなどいろいろな活動が展開できると思います。簡単にできるさまざまな活動を積極的に実施することで、農業クラブ活動をより身近なものにできると思います。またこれらの活動によって学科の垣根を超えたグループで活動する機会も増え、普段あまり関わらない人とも交流できると思います。みんなの「やってみたい」の声を聞き、実現し、さらに促すといったいい循環が生まれていくのではないかと思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業には「大変そう」や「休みが少なそう」というイメージを持っている人が多いと思います。たしかにそういった現実はあるかもしれませんが、しかし、それ以上に作物が成長する喜びや収穫した時の達成感など、農業ならではの魅力があります。それらをSNSや動画などを使って発信していくことが大切だと思います。しかし、実際の農家さんがそれらをしていくことは負担にもなるし、情報の中身が難しかったり、内容が固定化してしまうと思います。そこで、全国の農業高校生が実際に授業や実習でどのようなことをしているかを発信していくことで、等身大で多種多様な「農業」を受け取ってもらえるのではないかと思います。農業高校での取組は、将来農業に従事しなくても、様々なことを農業と結び付けて考える思考を育むことになると思います。そうやって少しずつでも農業を意識した生活が広がっていけばいいと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 大分県立日出総合高等学校

農業経営科 2年 本田 一貴

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、各校ごとの収穫祭や地域イベントでの販売会を実施しているが、参加者は高齢者の方や保護者、学校関係者が多く、認知度が低い。そこで SNS を活用して農業高校生の活動を知ってもらうことと、販売だけではない体験や参加型の企画を開催することで、農業の魅力を伝えていくことが大切であると考えた。例えば、(1) SNS (インスタグラム、TikTok、X) を活用し、農業科について多くの方に認知してもらう。(2) 他校と交流して繋がりをつくり、お互いの取り組みを知ったり、評価・改善を話しあってより良くしたり、共同でのイベントを実施する。(3) 販売だけでなく食べる経験や作業経験ができる企画で魅力を伝える。類型ごとに、土日に作業体験のイベントを実施し、収穫やかん水を手伝ってくれた参加者に収穫物の贈呈をする。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

大分県は、どの学校も農業クラブ員で意識の差があり、役員や選手など一部の人が活動を行っている。校内でのプロ・意見発表会や鑑定競技会を行っている学校もある反面、本校では取り組んでおらず、学校間でもばらつきがあるのが現状である。解決の手段としては、(1) 農業クラブ活動を身近に感じてもらうために、農業クラブ新聞の月 1 発行、FFJ の歌を休み時間に流す、文化祭で農業クラブ活動について発表を行う。(2) 多くの生徒が農業クラブ活動に参加できるように、校内鑑定競技会の実施やゲーム感覚で参加できる競技を模したイベントなど、農業科の生徒全員で取り組める活動を実施し、大会等参加のハードルを下げる。また、生徒が運営を行うことでクラブ員一人ひとりがイベントに深く関わる機会が増え、意欲の向上にもつながると考える。以上の活動をまずは単位クラブ役員が企画し運営する。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者を増やすためにはまずは農業の魅力を伝え、興味をもってもらうことが大事であるが、農業を知っている人、農業をイメージできる人、全く農業のイメージができない人などターゲットを分けて効果的なアプローチを考える必要がある。本校では中学校での出前授業におけるプランター作成や小学生を対象にしたイベントでの糖度検査などの体験、地域のイベントでの販売に参加している。今年度は大分県の全農業系学科の生徒が集まる販売会実施に向けた SNS 発信を行っているが農業のイメージアップにつながっているか分からない。解決策は(1) 全く農業を知らない子どもや若い人には出前授業や販売会で農業体験できる機会を作ることで、農業を知り、興味を持ってもらう。(2) 農業をイメージできる人には、実際の農業を伝えることで、悪いイメージを払拭させる。しかし、SNS は興味のあるものしか表示されないため、広告を打つなどの工夫が必要である。(3) 発信内容を各校と話し合っ興味をそそられる内容にする。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立猿投農林高等学校

農業科 3年 坂口 花

農業科 3年 三橋 怜央

生活科学科 2年 鶴田 莓依

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私たちは、授業での活動を通じてより交流を増やしていきたいと考えます。実際に本校では、農業科の草花部門が花の即売会やコケ玉作成交流会等を開催し、学校外の人と交流しつつ、花の消費促進活動を行っている。また、生活科学科では毎年、「さつまいも」の栽培を地域の保育園や幼稚園の生徒を招いて、収穫までの一連の管理作業を行っている。このような活動を他の学科や部門でも実施できるよう働きかけ、課題研究や実習の授業での実施を先生方とも相談しながら実施していきたい。さらには、校内農産物販売会を不定期で実施し、小売店では見かけないような珍しい、品種の農産物の販売を行い、地域の人と自然と交流ができる機会も増やしていきたい。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

私たちは、農業クラブ員全員が興味・関心を持てる取り組みが必要だと考えている。年度の中で最初の農業クラブの競技会が校内農業鑑定競技会であることに注目し、全員が競技会に意欲的に取り組める環境を作ることが重要だと考えた。意欲的に取り組める環境にするには、教材があった方がよいという意見が多く、コースが改訂された背景も踏まえ、全学年・全学科の生徒に「共通分野」の問題集を執行部が作成した。問題の難易度や問題数など、課題も多く残っているが、継続的に行うことで猿投農林高校の農業クラブ員全員が競技会の期間に自主的に学習ができる環境にしていきたい。今後も1年生の頃から取り組める内容を増やし、多くの生徒が活躍できるような環境づくりを執行部が行い、農業鑑定競技会に限らず、クラブ員が意欲的に取り組めるような取り組みを検討し続ける必要があると考えている。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業クラブのイメージアップをするためには、農業高校や農業クラブの活動を学校外の人に多く伝えることが重要だと考える。例えば、Instagramで各学校の農業クラブ公式アカウントを作成し、競技会や会議の様子やプロジェクト活動の成果等を発信することである。中学生や高校生の考える農業のイメージは3K(稼げない・きつい・汚い)などのマイナスな印象が強い。そのため、このイメージの改善をするために、学校での実習の様子や実際に先進的な農家への見学研修の様子等を発信することでイメージを改善しつつ、学校と地域の連携の様子を多くの人に知ってもらうことができる。また、小・中学校に赴き、意見発表会やプロジェクト発表会の内容を発表することで学校間の結びつきを強くし、農業高校を進路の選択しとして増やすことで、農業従事者の増加に貢献できると考えている。本校は、昨年度Instagramを開設した。本年度中に、農業クラブのアカウントを開設し、少しでも農業に興味がある人に、わかりやすい内容や高校生の声を発信することで農業高校の認知度をあげつつ、イメージアップに繋がると考えている。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 高知県立幡多農業高等学校

園芸システム科 3年 岡崎 万桜

園芸システム科 3年 岡 紫菜

園芸システム科 3年 藤本 桃花

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

・収穫体験や農産物の販売をする

自分たちが育てた野菜や果物を地域の方に収穫してもらったり、販売したりすることで、農業を身近に感じてもらえると思う。

・農業体験やものづくり体験をする

野菜の植え付けや収穫、寄せ植え、木材を使ったものづくりなど、子どもから高齢者まで楽しめる体験を行う。

・学校のイベントに地域の方を呼ぶ

はたのう市場などの学校行事をもっと地域の方に知ってもらい、農産物の販売だけでなく、生徒と地域の方が話したり交流したりできる場にする。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

・一人ひとりに役割をつくる

農業が得意な人だけでなく、写真を撮ることが好きな人、SNS が得意な人、人と話すことが得意な人など、それぞれの得意なことを生かせる役割をつくる。

・みんなでできる活動を増やす

収穫した農産物の販売や学校行事、地域での農業体験など、学年や学科に関係なく参加できる活動を増やす。

・他の農業高校と交流する

他県や県内の農業高校と交流し、お互いの学校で取り組んでいることを紹介したり、一緒に農業体験をしたりすることで、新しい発見や刺激になると思う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

・自分たちが実際に体験したことを発信する

自分たちが実習で感じたことや、作物が大きくなったとき、収穫できたときの喜びを SNS など で 発信する。

・農業高校でできることを知ってもらう

トラクターや高性能な機械を使った実習、スマート農業、食品加工など、今の農業や農業高校で学べることを紹介する。

・農家の方の仕事を紹介する

実際に農家の方を訪ねて、仕事のやりがいや大変なことを聞き、それを自分たちの言葉で発信する。

参加者課題レポート

第2分科会 第6会場

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第6会場	香川県立笠田高等学校	愛媛県立伊予農業高等学校

第2分科会 第6会場

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	岩手県	盛岡農業高等学校	食品科学科	2	田畑 奏
2	群馬県	勢多農林高等学校	植物科学科	3	中里 仲達
3	埼玉県	秩父農工科学高等学校	農業科	2	齋藤 悠
4	千葉県	旭農業高等学校	畜産科	3	松井 小春
5	東京都	農業高等学校	都市園芸科	3	濱崎 大貴
6	静岡県	田方農業高等学校	動物科学科	3	加藤 杏葉
7	長野県	富士見高等学校	園芸科	2	牛山 蓮
8	愛知県	安城農林高等学校	動物科学科	2	長森 結叶
9	三重県	相可高等学校	生産経済科	3	細木 優亜
10	和歌山県	南部高等学校	食と農園科	2	濱中 勇一
11	岡山県	興陽高等学校	農業科	2	原田 晴喜
12	愛媛県	伊予農業高等学校	生活科学科	2	芝 ここあ
13	鹿児島県	山川高等学校	園芸工学・農業経済科	3	下川床 咲弥

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	香川県	笠田高等学校	植物科学科	3	岡田 隼人
15	香川県	笠田高等学校	植物科学科	3	石井 享次朗
16	香川県	笠田高等学校	植物科学科	3	森川 翼

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	愛媛県	伊予農業高等学校	生活科学科	2	三好 紫珠沙
18	愛媛県	伊予農業高等学校	食品化学科	3	塩見 美桜
19	愛媛県	伊予農業高等学校	特用林産科	2	山本 めくみ

「笠田高校農業クラブ員全員が関心を持ち、意欲的に取り組んだ通学路の交通安全」

四国ブロック 香川県立笠田高等学校

植物科学科 3年 岡田 隼人

植物科学科 3年 石井享次朗

植物科学科 3年 森川 翼

1 学校紹介

香川県立笠田高等学校は、香川県西部の三豊市に位置し、2028年に創立100周年を迎える歴史と伝統のある学校です。本校には農産科学科、植物科学科、食品科学科の農業科3学科と、生活デザイン科が設置されています。

三豊市は非常に農業が盛んな地域であり、香川県内の農業産出額では第1位を誇り、四国地方全体においてもトップクラスの規模となっています。そのため、地域社会からの本校に対する期待は非常に大きく、在校生と地元の幼稚園、保育所、小学校、中学校との交流学习なども日頃から活発に行われています。

2 活動内容

本校は、校舎のある「本校」と実習を行う「農場」が、国道11号線を挟んで離れた場所に位置しています。農場は「さぬき豊中インターチェンジ」のすぐ横にあるため、周辺道路は大型トラックなどの交通量が非常に多い環境です。私たちはこれまで、大型車が行き交う道路の横を歩いて信号を待ち、授業や当番実習のために多い時には1日に2～3往復も本校と農場を往復していました。（図1）



図1 本校から農場への通り道

そのような中、今年4月に国道11号線の下を抜けるトンネルが完成し、一般車両の往来がない安全な農道を通して農場まで移動できるようになりました。

しかし、そのトンネル開通の矢先、生徒が自転車ごと側溝に転落するという事故が発生してしまいました。現場は体育館横と庭園の間を通る見通しの悪いT字路で、本校から農場へ向かう生徒と、農場から本校へ戻る生徒の自転車どうしが接触する危険性が極めて高い場所でした。（図2）

私たちは「このような危険を一刻も早く回避したい」と考え、まずは庭園の剪定作業に取り組みました。さらに、危険回避の視点を持って改めて通学路全体を見回したところ、ほかにも様々な危険箇所が存在することが判明しました。そ



図2 見通しの悪い庭園

ここで私たちは、笠田高校の周辺環境をより安全なものにすることを目的とし、「笠高生の通学路の危険箇所をなくす取り組み」をスタートさせました。

(1) 道中の危険箇所の発見

まず、危険箇所を漏れなく発見するために、私たちは「本校から農場へ移動する場面」および「当番終了後に農場から本校に行く場面」を想定し、実際に歩いて点検を行いました。その結果、主に以下の3つの危険箇所が明確になりました。

①カーブミラーのないトンネルの出入口

国道11号線をくぐるトンネルを出た直後の場所は、道路の構造上見通しが非常に悪く、接近してくる自動車や自転車を事前に確認することが困難でした。事故につながるリスクが極めて高いと判断したため、安全確認を容易にする目的で、新たなカーブミラーの設置申請を行うことにしました。

(図3)

②不明瞭で視認性が低いカーブミラー

すでに設置されている既存のカーブミラーの中には、老朽化や汚れ、角度のズレなどによって周囲の様子が十分に映らないものがありました。カーブミラーは設置されているだけでは意味がなく、正しく見える状態に保たれていて初めて機能します。そのため、視認性が低下したミラーの交換や角度調整を要望することとしました。(図4)

③道路の凹凸と陥没

私たちが実習で日常的に使用している道路において、舗装の剥がれや陥没が確認されました。凹凸や穴があると自転車での通行時にハンドルを取られて転倒する危険があるため、安心して移動できるよう市に補修を依頼することとしました。(図5)

(2) 三豊市建設港湾課への訪問と交渉

4月17日、危険箇所の具体的な修繕依頼を行うため、三豊市役所の建設港湾課を訪問しました。(図6) 担当者の方はモニターに地図を表示しながら、私たちの要望と実際の危険箇所を丁寧に確認してくださいました。その結果、②「不明瞭で視認性が低いカーブミラー」と③「道路の凹凸と陥没」については、



図3 危険箇所①



図4 危険箇所②

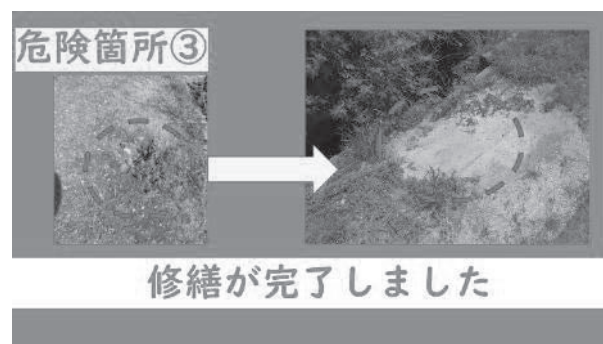


図5 危険箇所③



図6 三豊市建設港湾課訪問

早期に修繕を行うことを約束してくださいました。

一方、①「新たなカーブミラーの設置」に関しては、新設となるため現地調査を行ってから再度連絡をいただくことになりました。後日いただいた連絡によると、市が現地を精査した結果、「確かに危険性が高く、ミラー設置による事故防止効果が大きい」と認められました。

しかし、設置予定地が私有地の上方にかかるため、土地所有者の方からの許可が必要であることがわかりました。そこで私たちは土地の所有者を探してお宅を訪問し、取り組みの趣旨を説明して無事に設置のご了承をいただくことができました。5月18日、承諾書を持って再び建設港湾課を訪問し、正式に申請を完了させました。これらの活動は、笠高生のみならず地域全体の安全を守るための大きな第一歩となりました。

(3) 笠高生へのアンケート調査

さらに、現状の課題をより広く把握するため、全校生徒を対象としたアンケート調査を実施しました。この調査には、普段農場へ行く機会の少ない食品科学科や生活デザイン科（家庭クラブ）の生徒にも協力してもらいました。実際に通学している生徒がどこに危険を感じ、どのような改善を望んでいるのかを明確にし、今後の活動に反映させることが狙いです。

アンケートの集計結果は以下の通りです。

○回答状況：全校生徒 267 人のうち 246 人から回答を得られ、回収率は 92.1%となりました（1年：84人、2年：67人、3年：95人）。

○通学手段：自転車 が 69% と圧倒的多数を占め、次いで車送迎 16%、徒歩 13%、バス 2% という割合でした。

○危険箇所の認識：「農場への行き帰りで危険と感じる場所があるか」という問いに対しては、「ある」と答えた人が 43 人、「ない」と答えた人が 203 人でした。具体的な場所としては「11号線下のトンネル」や「グラウンド正面の道路」などが挙げられ、危険と感じる理由として「車や対向者が見えにくい」「ミラーが見づらい」「道幅が狭い」「路面状態が悪い」などの意見が寄せられました。

○ヒヤリハット経験：「ヒヤッとした・危ないと感じた経験があるか」という質問には、9%（約 10 人に 1 人）の生徒が「ある」と回答しました。具体的な事例として「人が広がって歩いて接触しそうになった」「曲がり角での飛び出しが危険だった」といった声が上がりました。

要望のまとめとして、「改善してほしいこと」の問いに対しては、カーブミラーの設置、生垣や草木の剪定、道路舗装の修繕、標識・注意表示の設置などが多く求められました。自由記述欄には「ハチが発生していて危険」「並進により通りにくい」といった具体的な意見も寄せられました。

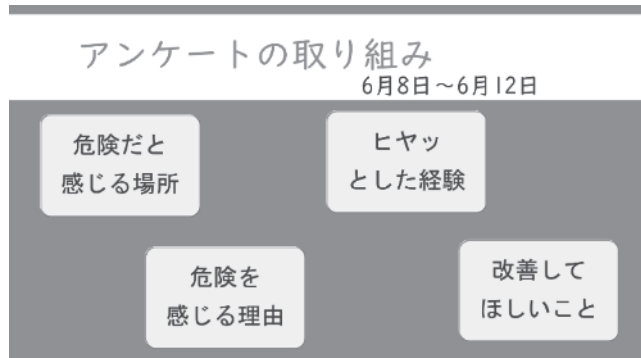


図 7 アンケートの取り組み



図 8 改善前

(4) 庭園の樹木の撤去

アンケート結果を踏まえ、私たちは原点である「体育館と庭園の間にある見通しの悪い交差点」の改善作業に着手しました。この場所は生垣が視界を遮り、車両や自転車、歩行者の相互確認が極めて困難な状態でした。(図 8)

「カーブミラーを設置してはどうか」という案も出ましたが、論議を重ねた結果、「視界を遮っている樹木そのものを撤去の方がより根本的な解決になる」という結論に至りました。作業範囲や切伐後の木材の処理方法などを入念に計画し、7月7日に庭園と道路の境界にあったサザンカの生垣を撤去・剪定しました。この作業により見通しが飛躍的に改善され、安全に通行できる交差点へと生まれ変わりました。(図 9) (図 10)



図 9 サザンカの撤取に取り組む



図 10 改前後

3 成果と課題

今回のプロジェクトを通して、地域の安全な環境づくりは、学校内だけで完結するものではなく、地域住民や行政機関と深く連携・協力することで初めて実現するものであると実感しました。

また、本校を取り巻く環境の変化として、今年4月に近隣の5つの小学校が統合され、本校のすぐ近くに「豊中小学校」が開校しました。これにより、本校6時間目の授業終了後に農場から本校へ戻る時間帯が、下校する小学生の通行時間と重なるようになり、新たな交通安全上の配慮が必要となっています。

私たちは、地域、学校、行政、そして笠高生がひとつになって協力し合うことで、より安心・安全な地域環境が構築できると考えています。

今後も新たに発生する課題や危険箇所に対して、地域に根ざした農業クラブ員として一つひとつ丁寧に向き合い、改善に向けた取り組みを継続していきます。

4 おわりに

今回の活動を通じて、クラブ員一人ひとりが地域の交通安全を「自分ごと」として捉え、自発的に行動する態度を養うことができました。自分たちの生活環境を自らの手で改善していく取り組みは、農業クラブ員全員が参画できる非常に価値ある活動です。

私たちが日頃の実習で培った剪定などの技術を生かし、地域の方々に喜んでいただくと同時に、農業クラブの魅力を広く知っていただけるよう、今後もこの活動を大切に継続していきます。

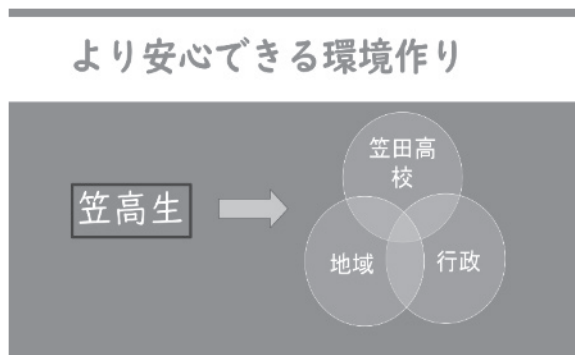


図 11 安心できる地域へ

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 岩手県立盛岡農業高等学校
食品科学科 2年 田畑 奏

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

盛岡農業高校人間科学科の取り組みで「地域みんなの畑」を運営している。近年、耕作放棄地も多くなっているの、そのような土地を利用してみる。小さい子どもは種まき、収穫、水やりなど簡単な作業をして、高校生などは授業で習った知識をみんなに教える。また、教えることで農業クラブの3大目標の指導性が育つと思う。そして、大人や高齢の方は、農業の経験や昔の農業機械の使い方、知恵などを若い世代に伝える。収穫した作物を簡単に調理しながら、農業の知識や経験を交換し合う。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校では毎年、ローソンやシライシパンと共同でパン開発、販売を行っている。今年もどんなパンにするか、パッケージデザインをどうするかなど話し合った。全校生徒にパンのデザインなどの案をもらうためアンケートを実施したが回収率が低かった。そこで農ク役員が中心となって考え、企業の方と試作を繰り返した。私は、パッケージデザインだけでも全校生徒にデザインの案を出してもらい、アンケートを取ったほうがいいと思った。来年はもっと盛農全員が参加できるようにしたい。



3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

小・中学校に農ク役員が出前授業を行う。例えば、小学生には、農業をゲーム型にしてそれをプレイしたり、クイズを出したりする。みんながわかりやすいように、専門的な用語を簡単にして伝える。作物の収穫だけでなく、その過程や規格外の野菜がどうなるかなど、農業高校生のリアルなVlogなどを見せる。また、中学生はスマホ、タブレットなどを持っている人が多いので、インスタグラム、X、ユーチューブなどで発信していく。小・中学生共通でできることは、実際に種まきから収穫までを体験させることである。その中で、毎日の水やりや雑草抜きなど大変なこともあるが、「芽が出た」「花が咲いた」「収穫できた」などたくさんの達成感も味わえると思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立勢多農林高等学校

植物科学科 3年 中里 仲達

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」
幅広い世代の人々が参加できる活動や地域の交流を行うためには、参加のハードルを極力下げることが極めて重要です。

例えば、地域のごみ拾いや公園の花壇整備のように、特別な技術や資格を必要とせず、短時間から気軽に立ち寄れる活動は、老若男女の誰もが参加しやすい理想的な取り組みといえます。

こうした「気軽に参加できる地域のかい」の具体例として、私が通う勢多農林高等学校の取り組みは、生徒が育てた野菜苗やシクラメン等を地域住民に販売する機会を、春と秋の年に2回開催しています。

さらに、月1回のペースで定期的な農産物・卵の販売も実施しており、地域に定着した交流の場となっています。この販売会は、単に農産物を買うだけでなく、生徒と地域住民、あるいは住民同士が自然に言葉を交わす絶好の機会です。「買い物をする」という日常的で参加しやすい行動をきっかけに世代を超えたコミュニケーションが生まれ、地域の繋がりを育む良い事例だと考えています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員の活動に対する興味や意欲を持続的に引き出すためには、個々の自主性を尊重し、支援する姿勢が必要だと思います。生徒が自立してテーマを設定し、主体的に課題研究へ取り組むことができる環境を整えることは、新たな課題への挑戦意欲や問題解決能力を大きく育むことにつながると思います。

そのためには、校内にとどまらず、様々な機会を有効に活用して各校における先進的な取り組み等を相互に共有する体制の構築が極めて効果的です。互いの学校の工夫や成果を知ること、他校の事例が大きな刺激となり、自校の活動に対する新たな視点や気づきを得ることができます。

さらに、一部の代表者だけでなく、すべてのクラブ員が主体的に参加できるような実践的な交流の場（合同発表会やワークショップ等）を設けることが重要だと思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージアップを図る上では、「きつい・汚い・稼げない」という従来のネガティブな先入観（3K）を払拭し、現代ならではの新価値や将来性を可視化していく取り組みが不可欠です。

具体的には、ドローンによる農薬散布や生育診断、自動運転トラクターによる省力化、AIを活用したデータ駆動型の精密農業など、先端テクノロジーを駆使した最新の農作業スタイルを積極的に発信することが極めて有効と考えます。経験や直感に頼る「伝統的な職人技」の尊さを尊重しつつも、「最先端技術をスマートに使いこなす面白さや革新性」を前面に押し出すことで、若年層や異業種からの関心を惹きつけ、農業のポジティブなイメージ刷新へと繋がるはずです。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立秩父農工科学高等学校

農業科 2年 齋藤 悠

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の誰もが参加できる活動として、「地域の伝統食や特産野菜を使った、高校生プロデュースの子ども食堂やカフェの運営を提案します。

高校生のデジタル力で SNS 告知などを行い、地域の高齢者からは「美味しい郷土料理のコツや知恵」を教わります。子どもたちや親世代には、高校生が学校で育てた野菜の収穫体験などふれあいイベントを企画します。

「食べる」「学ぶ」「体験する」を通して私たちと、小さい子どもからお年寄りまでが自然と集まれるような活動ができれば、その後の交流にもつながっていくと思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員の意欲を高めるには、「全員が主役になれる役割分担」と「地域の魅力を活かした楽しい体験」が必要であると思います。

得意分野に応じた係分け（動画編集、ポップアップ販売、栽培など）を通して、1つの企画に対して全員が何かしらの形で貢献していくことが一歩だと思います。

全員のできる活動としては、「地域の特産を使った、Z世代向けの新グルメ開発と、SNSを活用した発信」を提案します。観光地でのアンケート調査、試作、動画出演、イベント販売など、異なる強みを活かせる工程を全員で分担して社会へ届ける成功体験を積んでいくことが大切だと思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者が減少する中、農業のイメージアップを図るには、各農業高校のある地域の地域性を生かして、高校生ならではの「若者の感性」を活かした発信が必要だと思った。

具体的には、本校は池袋から特急で約80分という都心からの近さを強みに、大自然での「#農業」の魅力を SNS で発信しています。楽しい授業や作業風景の等身大の農業ライフを届けて「きつい」という古いイメージを変えていけたら言いと思っています。

また、地域特有名産品や伝統の食文化を高校生のアイデアで「映えるグルメ」に工夫していき、その過程を動画で発信することで注目を集められると思います。さらに、地域のベテラン農家から職人技を学ぶ姿を伝えるなど、農業が持つ温かいコミュニティの魅力もアピールするのがいいと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立旭農業高等学校
畜産科 3年 松井 小春

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・子供から高齢の方まで参加できる体験型イベントを開催する。
(野菜の収穫、家畜とのふれあい、クイズやスタンプラリー)
- ・地域の住民から意見やアイデアを集め、農家さんや企業と協力し、地域の声を取り入れた商品を企画&開発する。
- ・世代を超え参加できる、農業や動物などをテーマにした勉強会を開催し、意見交換を行う。
- ・地域の農業や学校での活動などを取材し、ニュースレターを作成する。
- ・地域の住民からおすすめの場所や農産物を教えてもらったり、実際に農家さんや直売所に取材したりして、地域の農業マップを作成する。
- ・近隣の学校や公民館などに出向き、普段農高で学んでいることを体験してもらう。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・クラブ員参加型の農業クラブアイデアコンテストを開催する。
- ・クラブ員から活動案を募集する。
- ・他学科、他学年で協力しコラボ活動を行う。
- ・農業クラブの活動予定や内容、クラブ員の感想などを校内での掲示や SNS で発信する。
- ・他学科の活動に自由に参加できる日を作る。
- ・自分の好きな農業、動物、植物などの魅力を紹介する、農業の魅力交換会を企画する。
- ・地域の方から農業にまつわる困り事を募集したり依頼を受けたりして、課題解決を手伝う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・仕事のやりがいや大変さ、魅力を農家さんに聞き、農業のリアルを SNS や文化祭で発信する。
- ・農家さんや農業関連企業の仕事に密着し、1日の流れを取材させてもらう。
- ・農業に対するイメージを募集し、回答と共にまとめる。
- ・農家さんや高校生へのアンケートをもとに、農業のランキングを作成する。
(一番大変/楽しい農作業やおすすめの農産物など)
- ・農家さんだけでなく、流通や販売、飼料加工、獣医さんなど農業に関わる様々な職業を調査する。
- ・幅広い世代に農業の好きなところ・面白いところを募集し、文化祭などで紹介する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立農業高等学校

都市園芸科 3年 濱崎 大貴

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域交流型の農作業体験

地域の子どもから高齢者まで幅広く参加できる、野菜や果樹などの種まき・収穫・除草や生け垣や剪定などの造園体験で、説明するガイド役を私たち農業高校生が普段の学習成果を生かして取り組んでみる。

地域の方と行う「食」の交流

さらに園芸科などで栽培した農産物を使って、食品科学科の生徒が地域の方と料理や加工品づくりを行う。反対に地域の方を講師として漬物やジャムなどを一緒に作り、昔ながらの知恵を高齢者から学ぶこともできる。

学校農園を活用した地域の居場所づくり

農園や学校施設を活用して、市民農園のような圃場を作り、地域の方が気軽に立ち寄り、農作業や植物の手入れをしながら交流できる場をつくる。

以上に加え、農業高校は東京都府中市にあり、京王線府中駅から徒歩5分で通学できるというアクセスの良さを今回の議題に利用できればと考えています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

従来あるタンポポ調査のように、家の周りや身近なテーマを取り扱えるような取組が良いのではないかと考えます。さらに先輩や後輩もほとんどの人がスマホ所持しているため、SNSの利用した活動だとより参加意欲も高まると思います。

そこで考えられるのが「写真で色づくグリーンマッププロジェクト」のような形式です。お家の近隣に見える植物で構成される「緑色」の景観を写真で収め、可能なら植物の種類などをデータに打ち込み農業クラブ共有で活用できるスマホアプリ（SNSのような）でアップして位置情報も提供することで、その地点の色が「緑色」に色づいていき、その活動を全国に広げていければ日本全体の植物景観などを色で把握することができるという達成感も得られると考えられます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

いかに農業＝畑というイメージを脱却できるだと思います。実際に農業高校に入学して勉強していくと畑だけではなく造園や食品製造、環境保護、経営なども農業という大きな分野に入っている事を学ぶことがきたので、畑だけではなく色んな分野を総合的に学べるいいとこどりができる分野であり、価値のある仕事につながっていくと発信できればと考えています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立田方農業高等学校

動物科学科 3年 加藤 杏葉

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私が考える老若男女問わず交流できる活動は、「みんなでお菓子作り体験」をすることです。お菓子作りには、計量や成形、デコレーションなど、年齢や体力を問わず誰もが主役になれる工程がたくさんあります。小さなお子さんからお年寄りまで、自然と声を掛け合い、笑顔が広がるのが大きな魅力です。例えば、別の交流活動でみんな収穫したお米から「米粉クッキー」を作れば、アレルギーがある人も含めて、全員が安心して同じおやつを美味しく楽しめます。自分たちの手で収穫した喜びをその場で共有し、味わう時間は、世代を超えた絆をさらに深くします。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

「各県や地域を一つのチームとし、毎年変わるテーマで競い合う多世代交流コンテスト」を考えました。

毎年「地域の木材を使ったベンチ作り」「動物とのふれ合いイベント」「花壇による街づくり」など、多様なテーマが提示されます。別の交流活動で地域の方と育んだ繋がりや、林業、畜産、栽培、園芸などの全専門スキルを結集してチームで挑戦します。誰もが安全に楽しめることを共通ルールにすることで、地域貢献の質も高まります。

競い合うことでお互いの力を伸ばし意欲的に活動に参加でき成長の場になる点や、テーマが変わるからこそ、すべてのクラブ員に主役になるチャンスがあること、など全クラブ員に良い刺激になると思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

畑を舞台にしたイベントを開催し、そこから繋げる SNS 発信をします。

まずイベントを開催し、参加者を巻き込みます。例えば、リアル脱出ゲームです。謎解きの仕掛けには、「正しい農具の使い方」が暗号のヒントだったり、「作物を救う肥料の配合」が脱出の鍵だったり、農業の知識を凝縮します。参加者が必死に遊び、いつの間にか農業の面白さにハマり、農業について知りたい気持ちの土台を作ります。

そして、そのイベントで参加者が大興奮している様子や、おもしろい謎解きの裏側を動画にまとめ、SNS で発信します。その投稿を見た人たちが「農業普通に楽しそう！」と思い興味を持てるようにしたいです。農業はただ大変で楽しくなさそうというマイナスな固定観念をなくすことを目標にするべきだと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県富士見高等学校
園芸科 2年 牛山 蓮

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

富士見高校農業クラブでは、「F チャレンジ」というボランティア活動を行っています。この活動では、農業クラブ会員が地域のボランティア活動に参加し、地域の方々と協力しながら地域貢献に取り組んでいます。

具体的には、地元の小学生と一緒に川の清掃活動を行ったり、さまざまな年代の方々と地域の山で山野草の植栽や樹木の定植を行ったりしています。このような活動を通して、交流を深めながら里山整備に取り組むとともに、地域資源を活用したさまざまな活動を通して地域とのつながりを深めています。

2 第2分科会

**「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」**

富士見高校では、普段の授業や実習、F チャレンジなどを通して農業に関する知識や技術を学び、日々興味や関心を深めています。

学んだことを生かせる場のひとつに、農業クラブ員全員が参加できるFチャレンジがあります。活動のひとつである川の清掃活動では、農業クラブ員が小学生に向けて環境に関するクイズを行うなど、地域の方々と交流しながら環境や農業について学んでいます。そのため、F チャレンジは地域と農業をつなぐ大切な活動だと思います。

全国でも、このように地域の方々と関わりながら農業や環境への理解を深められる活動が増えていけばよいと思いました。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

今の時代、若い人たちに最も大きな影響を与えるもののひとつがSNSだと思います。そのため、SNSを活用して、まずは農業に興味を持ってもらい、農業について知ってもらうことが大切だと考えます。そして、その興味をきっかけに体験会や誰もが楽しめるイベントを開催することで、農業への関心をさらに高めてもらい、「自分もやってみたい」と思う人が少しでも増えていけばよいと思います。

また、SNSで発信する際には、単に畑での作業風景を伝えるだけでなく、ドローンや自動操舵トラクターなどのスマート農業を活用した現代的な農業の姿を紹介したほうが、若い世代の興味を引きやすいと思います。農業が先進的で魅力のある産業であることを発信していくことが重要だと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立安城農林高等学校

動物科学科 2年 長森 結叶

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地元野菜の収穫祭やマルシェなど、農産物を使った料理教室や農業体験と一緒に楽しむプログラムを企画することを提案する。例えば、学校で育てた野菜を収穫し、カレーなどを作る体験を提供できると年代や性別の枠を超えた交流ができると考えている。そのような料理教室や農業体験だけでなく、最新技術体験などを行い楽しみながら農業を知ってもらう機会を作ると良い。さらに、動物とのふれあい体験やフラワーアレンジメント、また地域の木材を有効活用した工作体験など、農林産物や動物そのものを活用した内容にすることで、老若男女問わず農林業の魅力を身近に、そして体験的に感じられる活動になると考える。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校の現状を考えると、そもそも生徒自身に「農業クラブ員」としての自覚が薄いように感じることが多い。執行部や選手として農業クラブ活動に関わらない生徒にとっては、農業クラブがどんな集団か、さらに何を目的として活動しているかを知る機会がないと考える。そんな生徒たちにクラブ員としての自覚を持ち、農業クラブ活動に対する意欲を持ってもらうためには、表彰・景品制度を活用すると良い。農業鑑定競技会の校内順位の公表など、校内行事の成果に対して生徒にとってやりがいや達成感を与えることができれば、農業クラブ活動に対する意欲向上が期待できる。また、定期的に農業クラブでやりたいこと、知りたいことなどのアンケートを行い自分たちの意見が農業クラブを動かすことを実感してもらうことも大切である。さらに、他校や他学科との交流を増やすことで自分がクラブ員であることを自覚してもらうことができると考える。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

まずは農業に興味を持ってくれている人をのがさないために SNS を用いて農業の魅力、やりがい発信を行うことが重要である。そもそも農業には 3K(きつい、汚い、危険)と呼ばれる三つのマイナスなイメージが定着してしまっている。農業のイメージアップを図るためには、まずはその 3K を解消するような手立てがあることを発信していくことが重要であると考え。そこでまずは、スマート農業などの先端的な技術を取り入れ、スマート農業体験や収穫体験など農業に関われる機会を増やすことを提案する。さらに、自分たち(農業高校生)だからこそ言える実際の経験の発信を行うことで、実際に農業をやっている人たちにしか分からない、伝えられない魅力、やりがい、大変なところを発信することができると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立相可高等学校
生産経済科 3年 細木 優亜

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

おじいちゃん、おばあちゃん、そして、お父さん、お母さんと子どもたちが一緒に農業を体験する。昭和の農業、平成の農業、現在の農業全てを体感している地域の方々も参加してもらい農業高校の農場で農業を体験する。世代間交流を楽しめながらできる産業こそ農業だと考えます。また、普段、関わる事のない家畜などの飼育体験を通して、もっと興味をもってもらうことで農業高校を知ってもらえることにつながると思います。また、体験も一回だけでなく何回も体験を行うことで、さまざまな季節の植物にふれあうことができ、関心をもってもらうことも重要だと思います。特に小中学生は農業のつらい辛いことの体験もしながら楽しいこともたくさん経験することで、農業の楽しさを知り、農業に興味を持ち、たくさんの人たちに農業高校を知ってもらえると思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブに興味をもつ前にまず、私たち幹部が農業に対し興味を持つことから始めなければならないと思う。そのためには、汗を流すことにより働くという意味を感じ、農業が社会に貢献しているさまざまな事がわかるのではないかな。そこから、農業の楽しさが分かり農業クラブの社会性・科学性・指導性の向上に繋がるのではないかなと思う。人間、何をするにも楽しく、幸せになることには興味をしめすものである。農業クラブのいろいろな活動で楽しく、幸せになるものは何かと考えても何も無いのが現実である。しかし、先輩から話を聞くと、全国大会での発表や競技への出場は終わってからの達成感は感動であると言っていました。その中でも、全国大会への出場は出来なくても、プロジェクト活動での仲間と一緒に調査・研究することから農業クラブの素晴らしさを感じたということでした。そのことから、入学したら何かテーマを見つけ仲間と共に活動し、プロジェクトへ繋げることから始めてはどうか。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業の魅力は自分で育てた野菜や果物を収穫し食べれることだと思います。その魅力を伝えるために私たちクラブ員が他の高校の生徒とともに活動し農業の楽しさを知ってもらうきっかけづくりが大切だと考えます。例えば2泊3日の日程で宿泊型の農業体験を行うことで農業を知ってもらえるような体験の場を企画するのが良いのではないかなと思います。また、私たち農業クラブ員が他の高校などに出向き、野菜などを栽培するのも良いのではないかなと考えます。そして、高校だけではなく中学校、小学校、保育園などにも訪問し一緒に農業体験することで農業高校の特色や良いところ、楽しいところをPRでき、農業高校への進学率も上がるのではないかなと思います。私たちの様にこれから担う若い世代が農業の楽しさを知り、広めていくことが大切だと思います。農業クラブ員としてたくさんの交流を持ち、将来的に農業関連産業従事者を増やしていけるようにもっと考えていきたいです。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 和歌山県立南部高等学校

食と農園科 2年 濱中 勇一

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、年に2回実施している「南高フェス」や 週2回実施している「うめっこカフェ」があります。そこでは、実習で栽培・加工した野菜やジャムなどを私たちが販売することで、地域の方と交流をしています。「南高フェス」では農業機械の展示などを行うことで地域の子どももたくさん来てくれています。また、うめっこカフェでは、年配の方から若い方まで幅広い年齢層の方と交流することができています。さらに野菜コースでは、保育園児とのサツマイモの収穫体験や小学生と野菜の定植体験を実施しました。このように子ども達との交流は農業体験がいいと思います。これらの体験を通して老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流ができると思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員が一人一人興味・関心を持って活動していくには、環境づくりから始めることが大切だと思います。現在は、イベントを行う際に先生達が計画を立てているため、一人一人が農業クラブ員としての自覚を持ちにくい状況です。本校では「南高フェス」と言うイベントがありますが、そういったイベントを農業クラブ員中心となって計画できたら全員が意欲的に取り組むのではないかと思います。例えば、「南高フェス」には、毎回同じクラブ員が参加しているので、そのクラブ員に、各クラスの農業クラブリーダーになってもらいます。そして、イベントの計画をリーダーが中心となり、各クラスで意見を出してもらい、その内容を持ち寄って、リーダー同士が集まり話し合いをし、計画を立てていきます。このように、自分たちで意見を出し合い、一から計画を立てることによって、農業クラブ員としての自覚が芽生え、意欲的に参加できると思います。また、このような活動を行うことによって、クラブ員全員が参加できる活動にもなると思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

SNS を使って、発信していくべきだと思います。私たちの学校でも、インスタグラムで野菜の収穫風景や「うめっこカフェ」などの様子を発信しており、地域の人や友人が投稿を見て、コメントやいいねをしてくれています。こういったところから、農業に興味のなかった周りの人も、南部高校について興味を持ってきているのかなと感じています。SNS で発信することで、「農業って楽しそう」「農業学んでみようかな」と思ってくれる人が増え、農業を学ぶ人が増えると、農業従事者を増やしていくことにも繋がると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立興陽高等学校

農業科 2年 原田 晴喜

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどんなものがあるだろうか」

現状

現在、本校では校内外での農産物販売会や、収穫祭など、地域の方と交流できる活動が数多くある。

問題点

せっかく活動があっても、参加する人が限られていたり、農業高校の活動自体を知らない人も多かったりする。

対策

農業クラブ員が中心となって、野菜や果樹の収穫や動物とのふれあい、農業機械の試乗などの体験会を企画し、子供から高齢者まで楽しんで参加できるイベントを実施することで、地域との交流の機会も増え、農業高校の魅力も伝えられる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

現状

活動内容によって参加する人が偏っており、自分の役割を認識して積極的に動く人が少ない。

問題点

活動において全体的に受け身になっている。

対策

栽培や飼育などの主要な活動だけでなく、販売、イベントの企画運営、SNSを活用した広報活動など明確に役割分担をすることで、一人ひとりが自身の関心や能力に合った役割を持てるようにする。また、目標を決めて互いにそれぞれの役割を協力しながら活動することで、責任感や達成感が生まれ、意欲的な取り組みとなることを目指す。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

現状

現在、農業は「きつい」「汚い」「危険」といった、イメージを持たれやすい。

問題点

上記のイメージから、農業に興味関心を持つ若い人が減っていることが課題である。

対策

農業クラブの活動や日々の実習の様子など、SNSを活用して発信、地域のイベントでの農産物販売会や動物とのふれあい体験、教育機関である強みを生かした積極的なスマート農業の導入と活用を通して、農業の楽しさややりがいを伝えることが大切だと考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 愛媛県立伊予農業高等学校

生活科学科 2年 芝 ここあ

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

活動としては、市民農園での野菜作りやボランティア、体験イベント、耕作放棄地を活用した地域型農作業など、年齢や経験を問わずに誰もが楽しめる活動ができると思います。現在でも、地域の中にはさまざまな活動が存在しており、そういったコミュニティの中に高校生が積極的に参加していくことで、世代を超えた知識や知恵の共有や情報交換、共同作業による連帯感などを生み出すことになると、その輪がさらに広まっていくのではないかと思います。具体的には近隣農家と連携してアグリワーケーションを展開するのが面白いと思います。農家の人手不足や農業に対する認識の向上など、農業の諸課題を解決することにも繋がっていくと思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校としては、SNSを活用した情報発信に力を入れていけば、農業クラブ員の興味・関心を高めていくことに繋がるのではないかと思います。他校の状況を見ると、SNSを活用することで様々な取組の状況や魅力をたくさん発信しており、生徒はそれらの情報を気軽に受け取ることができています。自分に関わっている活動が他者に伝わることで生徒たちが意欲的に活動に取り組むことに繋がると思います。クラブ員全員ができる活動としては、地域との連携活動があると思います。各学科や専攻班が取り組んでいる地域との連携活動はとても魅力的で興味・関心を持ちます。そういった活動を農業クラブ活動として学科や学年の垣根を越えて参加できるような方法で実施できると、クラブ員の活躍の場がさらに広がるのではないかと思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

SNSを活用した情報発信が最適だと思います。SNS＝若い人の情報手段ではなく、現代ではどのような人でも活用しているツールだからです。また直接対面したり、現地に訪れなくてもSNS上でできることも増えています。SNSでのリアルで新鮮な情報発信や若手農家をロールモデルとしたキャリア教育、体験型のイベントやコミュニティイベントなどの実施も可能だと思います。まずはそれらをきっかけに農業に対する良いイメージを持ってもらいたいです。そこから現地での農業体験やイベントに参加するといった段階を踏むことで、農業に対する認識を深めてもらい、農業をする人が増えていくことに繋がればいいと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 鹿児島県立山川高等学校
園芸工学・農業経済科 3年 下川床 咲弥

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

○学校が主催となって、地域でのボランティアや販売会を開催する。

○市と連携して、地元のイベントに積極的に参加していく。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

○農業クラブ員に農業高校の魅力と活動内容を伝える情報をSNS等で発信していく。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

○SNS等使って作物を育てる達成感と、人の食生活を支える誇りある仕事であることを発信していく。

○スマート農業を活用し、農業は「大変」「肉体労働が辛い」などの印象を変えさせる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック 香川県立笠田高等学校

植物科学科 3年 岡田 隼人

植物科学科 3年 石井 享次朗

植物科学科 3年 森川 翼

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、地域の方々との交流の場として「新鮮市」を実施しています。「新鮮市」は本校で収穫した農産物や加工食品の販売会で、農場内の専用会場にて年間 11 回（火曜日の 14 時～）開催しています。野菜・果物・卵・花・味噌・ジャムなど、農業系 3 学科 9 部門の生徒約 200 名が丹精込めて育てた成果物は大変人気があり、当日は開始 2 時間前の 12 時頃から多くのお客様が足を運んでくださいます。自分たちが育てた商品を嬉しそうに購入される地域の方々とは直接会話を交わす機会は、私たち生徒にとって大きな励みや学びとなっています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

今回、私たちは校内の安全な環境づくりを目的に「笠高生の通学路の危険箇所をなくす取り組み」を実施しました。全校生徒を対象としたアンケート調査を通して、クラブ員一人ひとりが地域の交通安全課題を「自分ごと」として捉え、行動することができました。「毎日使う通学路の危険を察知し取り除く」という意識や行動は、「日々の農作物を病害虫などのリスクから守る」という農業の基本姿勢にも通じるものです。このように自分たちの生活環境を自らの手で改善していく活動は、学科を問わず農業クラブ員全員が主体的に参画できる素晴らしい取り組みであると感じています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

私は環境クリエイトコースで造園について学んでいます。このコースでは、造園の学びを通して地域を発展させ、住みやすい空間を創造することも目的としています。また、園児や小学生との交流学习、地域の農家さんとの実習にも取り組んでいます。これらの活動を通して感じたことは、「私たちが元気に地域へ飛び出し活動することで、地域の方々に笑顔や喜びを届けられる」ということです。農業クラブ員が活気をもって生き生きと行動する姿こそが、最高の農業のイメージアップにつながると確信しています。そのために、まずは私たち一人ひとりが日々の学習で実力をつけ、自分のできることに一生懸命取り組んでいきたいと思っています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック連盟 愛媛県立伊予農業高等学校

食品化学科 3年 塩見 美桜

生活科学科 2年 三好 紫珠沙

特用林産科 2年 山本 めくみ

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

枠にとらわれず地域の人に参加できる活動や交流の条件として、全ての人にとって参加のハードルが低くなるようなものを考えることが大切だと思います。力や体力を必要としない、特別な技能や知識を必要としないといったことは最低条件になると思います。興味を持ったとしても、「ちょっと私には…」という思いを持たせない活動を企画できれば最高だと思います。しかし、完全には難しいと思いますし、そういった部分が農業の面白みであったりもします。例えば、サツマイモの収穫体験や田植え体験などは楽しい反面、体力が必要だったり、汚れたりするという面があります。そういった部分を完璧に排除するのではなく、ハードルに感じないような形で活動を展開できれば、どのような人でも参加できる取組になると思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全員が興味・関心を持つには、全員に役割があり、成果を感じられる活動であることが重要だと思います。活動を企画・立案する段階から、各自の得意分野を活かした小さな役割を全員に割り振ることで、当事者意識が生まれると思います。自分たちの力でアイデアを具現化し、その喜びを共有できれば、活動は自ずと活発になると思います。このように、全員が主役になり輝く場所を創造していくことが農業クラブ活動として必要だと思います。そのためには、まずは各単位クラブが自校で積極的な意見交換を行い、小さな活動からでも実現していければいいと思います。そして各地での一つ一つの活動事例を全国の単位クラブ間で共有することで、「こんなことがしたい！」というクラブ員の声を引き出していきたいです。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者が減っている中で農業のイメージアップを目指すには、情報発信において農業の魅力をなるべく日常的かつリアルな情報として伝えていくことが大切だと思います。現代において情報発信はどのような産業においても身近な存在ですが、農業においてはそれが特別視されている風潮があり、情報発信に丁寧になりすぎている部分があるのではないかと思います。農業の楽しさや面白さといった部分にピックアップして情報発信をすることは必要だと思いますが、大変な部分、難しい部分なども包み隠さず伝えていくことが大切だと思います。おそらく、そういったものを乗り越えて得たものこそ農業における本当の「やりがい」だと思います。若い世代に興味を持ってもらうために、学校や行政なども様々な体験活動を展開していますが、楽しさや面白さを意識した体験だけでなく、農業のやりがいを感じられる継続的な魅力発信活動を展開していくことが農業のイメージを変えていくことに繋がるのではないかと思います。

参加者課題レポート

第3分科会 第7会場

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第7会場	栃木県立真岡北陵高等学校	高知県立高知農業高等学校

第3分科会 第7会場

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	宮城県	小牛田農林高等学校	農業技術科	2	渡邊 将仁
2	群馬県	伊勢崎興陽高等学校	総合学科	3	矢内 瑠菜
3	埼玉県	いずみ高等学校	生物生産科	2	宮崎 遥真
4	千葉県	大網高等学校	農業科	3	鈴木 悠布香
5	神奈川県	平塚農商高等学校	都市農業科	3	高橋 孝大朗
6	静岡県	静岡農業高等学校	食品科学科	3	久保田 莉乃
7	長野県	上伊那農業高等学校	アグリデザイン科	3	池上 杏奈
8	愛知県	稲沢緑風館高等学校	生活科学科	2	三輪 礼美
9	三重県	愛農学園農業高等学校	農業科	3	中島 裕太郎
10	鳥取県	智頭農林高等学校	森林科学科	3	伊藤 瑛斗
11	岡山県	井原高等学校	地域生活科	3	川田 陽海
12	福岡県	行橋高等学校	農業技術科	2	赤波江 七海
13	鹿児島県	山川高等学校	園芸工学・農業経済科	1	椎葉 莉凰

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	栃木県	真岡北陵高等学校	食品科学科	2	島田 知歩
15	栃木県	真岡北陵高等学校	生物生産科	2	板木 海斗
16	栃木県	真岡北陵高等学校	生物生産科	2	齋藤 楓

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	高知県	高知農業高等学校	畜産総合科	3	山下 真心
18	高知県	高知農業高等学校	畜産総合科	3	小松 愛莉
19	高知県	高知農業高等学校	畜産総合科	3	西村 和真

「農業のイメージは、子どもの体験で変わる」

関東ブロック 栃木県立真岡北陵高等学校
食品科学科 2年 島田 知歩
生物生産科 2年 板木 海斗
生物生産科 2年 齋藤 楓

1 はじめに

栃木県は関東地方の北部に位置し、肥沃な農地と豊富な水資源、穏やかな気候を生かして、米麦、園芸、畜産など多彩な農業が営まれている。本校が位置する真岡市は、生産量日本一を誇るいちごの一大産地である。栃木県立真岡北陵高等学校は、明治41（1908）年に芳賀郡立農林学校として開校した専門高校で、現在は生物生産科、農業機械科、食品科学科、総合ビジネス科、介護福祉科の5学科を設置している。農業に関する3学科では、栽培、飼育、機械、食品加工などの実習を通して専門性を高めるとともに、地域と連携した活動に取り組んでいる。

農業従事者の減少と高齢化が進む中、若い世代に農業を将来の仕事として考えてもらうことが喫緊の課題である。私たちは、農業のイメージアップには、完成した農産物や実績を見せるだけでなく、子どもたちが土に触れ、作物を育て、自分で「できた」と感じる体験をつくることが重要であると考えた。

農業高校には、農場や実習施設、専門的な知識を持つ教員、そして日常的に農業を学ぶ高校生がいる。これらを地域に開くことによって、農業を教科書や映像の中だけでなく、身近な生活や将来の進路に関わるものとして伝えることができる。中でも高校生は、児童にとって年齢が近く、農業の楽しさや学ぶ喜びを自分の言葉で届けられる存在である。そこで私たちは、本校で行っている活動そのものを農業の魅力発信につなげることにした。

2 課題設定

農林水産省の「2025 年農林業センサス（確定値）」によると、全国の個人経営体における基幹的農業従事者は103万6千人で、5年前より24.0%減少し、平均年齢は67.7歳となった。本県でも、2025年の基幹的農業従事者は3万3,575人で、5年前より21.8%減少し、65歳以上が70.4%を占めている。

一方、栃木県高等学校教育研究会農業部会が実施した「令和7年度農業高校生の意識調査」において、県内農業科1年生の47.2%が「学科の学習内容に興味があったから」を入学理由に挙げ、学校や学科を知る主な機会として54.3%が「学校の日体験学習」を選択している（図2）。この結果から、実際に見て、触れて、体験することが、農業高校や農業全般への関心を高める重要な入口になり得ると考えた。



図1 栃木県内の農業関係高校等の所在図・学科名

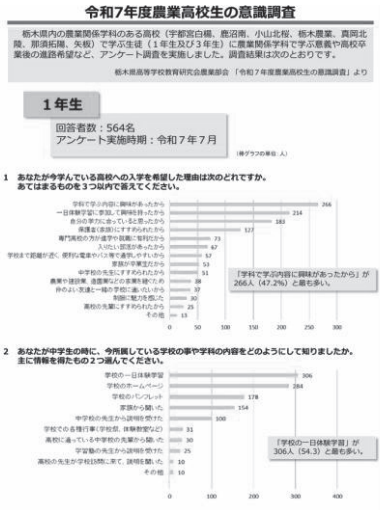


図2 令和7年度農業高校生の意識調査

3 方針

本校の活動を、「本物の土や作物に触れる」「高校生と一緒にやる」「収穫や調理、学校見学などの次の体験につなぐ」という三つの視点で整理した。一方的に情報を伝えるのではなく、参加者自身が農業の楽しさや価値を実感できる発信を目指す。

魅力発信の対象は、児童だけではない。交流授業を通して児童へ直接伝え、児童が家庭で体験を話すことで保護者へ広がる。「北陵ごはん」はJAの広報誌を通して地域の家庭へ届け、オリーブプロジェクトは商品開発と販売を通して地域の消費者へ届く。このように、学校から地域へ一方向に情報を出すのではなく、人と人との関わりの中で農業への関心が広がる仕組みをつくることを活動方針とした。

4 実践

(1) 地元小学校との交流授業～サツマイモの定植から収穫まで～

本校では、地元小学校の児童を対象に、農場でサツマイモの定植から収穫までを体験する交流授業を実施している(図3)。苗植えでは、本校生徒が写真やふりがなを入れた資料で植え方を説明し、見本を示した後、児童の隣で声を掛けながら一人一人の作業を支援する。

交流授業に向けて、高校生は植え付けの手順を確認し、児童に伝わりやすい言葉へ置き換える。当日は、全体説明、実演、苗の配布、植え付け支援などの役割を分担する。児童が安全に活動できるよう、道具の扱い方や畝の歩き方にも注意しながら進める。高校生が答えを先に示すのではなく、児童自身が苗の向きや植える位置を考えられるように声を掛けることも大切にしている。

児童は、土の感触や苗の形、植える深さなどを自分の手で確かめる。苗を植えた達成感は、「農業は難しそう」という印象を、「自分にもできる」「成長を見てみたい」という気持ちへ変えるきっかけとなる。高校生にとっても、専門的な学びを相手に合わせて説明することで、知識を確認し、伝える力や責任感を高める機会となっている。

秋には、児童が再び本校の農場を訪れ、高校生と一緒に、春から育ててきたサツマイモを収穫する。土を掘り、つるの先からサツマイモが現れる驚きや喜びを味わうことで、苗植えの体験が実際の実りにつながったことを確かめることができる。

苗植えと収穫を一連の活動として行うことで、児童は春から秋までの作物の変化を振り返ることができる。苗が成長して食べ物になるまでには、天候を見ながら管理を続ける必要がある。その過程を知ることで、児童は農産物だけでなく、それを育てる人の工夫や努力にも目を向けることができる。今後は、生育の様子を写真や短い動画で共有し、二つの体験のつながりを一層深めたい。



図3 地元小学校との交流授業(サツマイモの定植と収穫)

(2) 「北陵ごはん」～地域の家庭へ届ける発信～

食品科学科では、旬の食材を使い、地元特産品を取り入れたレシピ「北陵ごはん」を作成し、地元JAの広報誌に掲載している(図4)。誌面には、完成写真、材料、調理方法、栄養のポイント、生徒のコメントを掲載し、家庭で手軽に再現できる内容とした。

レシピ発信では、知識や料理の提案にとどまらず、読者が家庭で実際に作れることが重要である。分量や手順を整理し、視覚的に分かりやすく伝える工夫を行った。生徒が学ぶ食品加工や調理の知識を地域還元することで、農産物の新しい楽しみ方を提案し、地元農産物への関心を高めている。

この活動は、農業の魅力を作物生産の場から「調理する楽しさ」「食べる喜び」「家族との会話」へと広げるものである。今後は交流授業で栽培したサツマイモを題材にしたレシピを児童へ届けるなど、農場の体験を家庭の食卓までつなぐ取り組みを進める。



図4 地元 JA 広報誌に掲載された「北陵ごはん」2025 年 12 月号

(3) 総合ビジネス科とのオリーブプロジェクト～地域資源を商品へ～

総合ビジネス科では、市貝町オリーブ協議会と協働し、町の新たな特産品づくりを目指すオリーブプロジェクトに取り組んでいる。令和5年度には本校農場にもオリーブを試験植樹(図5)し、その葉を活用した商品開発を総合ビジネス科から食品科学科へ依頼した。食品科学科では、乾燥・粉末化したオリーブリーフパウダーを用いてパウンドケーキを試作し、両学科で試食を重ねて5%添加のマーブルタイプを完成させた。

令和8年5月、道の駅での販売会において、食品科学科が製造を、総合ビジネス科がラベルの考案、価格決定、販売を担当した結果、用意した約90個は1時間足らずで完売した。本取り組みは、農業の魅力を生産のみならず、地域資源の加工・商品企画・販売に至る一連のプロセスとして伝えるものである。なお、第三期県立高等学校再編基本計画では、令和11(2029)年度に本校と真岡工業高等学校が統合され、農業、工業、商業、福祉を備えた「未来共創型専門高校」が開校予定である。本プロジェクトは、再編後に推進される学科横断的な学びを先取りする実践例でもある。



図5 オリーブプロジェクトにおける本校農場への試験植樹

5 分析

3つの実践に共通するのは、「本物に触れる」「高校生が自分の言葉で伝える」「次の体験や行動へつなげる」という点である。小学校交流は農業への最初の「入口」となり、「北陵ごはん

ん」は家庭への「浸透」、オリーブプロジェクトは地域産業や多様な職業との「接続」を担っている。

このように、「体験する」→「身近に感じる」→「農業高校での学びに興味をもつ」という段階的な意識変化が期待できる。小学校での体験を、中学校での進路学習や本校の一日体験学習へ接続させることで、農業高校で学ぶ未来を具体的な選択肢として提示できる。

課題として、単発の交流体験が直ちに農業高校への進学や就農へ結び付くわけではない。「楽しかった」という小さな感情の変化を、継続的な体験や将来の進路選択へと段階的に導く仕組み作りが必要である。

6 評価と今後の課題

今後は、小学校交流の前後で統一したアンケートを実施し、農業へのイメージ、再参加意欲、農業高校への関心の変化を数値化・可視化する。児童の意識変化に加え、高校生の自己評価や小学校教員の意見も総合的に検証する。オリーブプロジェクトでは、販売実績だけでなく購入理由や商品へのフィードバックを収集し、改善に役立てる。

今後の課題は、①苗植えから収穫・調理までのストーリーの継続、②小・中・高校（一日体験学習）を通じたステップアップの確立、③学科間・地域機関との連携体制の維持、である。定量的・定性的なデータを蓄積し、意識変化のプロセスを追跡していく。

7 おわりに

農業のイメージアップとは、農業を実態以上によく見せることではない。日頃の活動を地域に伝え、子どもたちが土・作物・食に触れる機会をつくること、そして農産物が商品として消費者に届くまでの過程を知ってもらうことが大切である。

広報誌やSNS等による情報発信も不可欠であるが、その核となるのは実際に汗を流した体験と発見である。小学校との交流、「北陵ごはん」、オリーブプロジェクトで得られた発見や喜びを、写真や文章、レシピ、商品などの形にすることで、幅広い世代に農業の魅力を伝えることができる。

これらの取り組みは、地域の農業に対するイメージを変えるだけでなく、取り組んだ高校生自身の誇りや、地域農業を支える主体性を育む。一度の体験が、即座に農業従事者の増加へつながるわけではない。しかし、農業高校での学びを知り、農業を将来の進路や職業として考えるきっかけには十分なり得る。今後も一つひとつの活動を丁寧に積み重ね、地域とともに持続可能な農業の担い手育成に貢献していきたい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

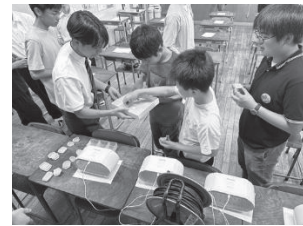
東北ブロック 宮城県小牛田農林高等学校
農業技術科 2年 渡邊 将仁

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

【本校の取り組み】

- ・稲章祭一般公開（農業機械の試乗会、ひょうたん細工体験）
- ・ボランティア活動（日本最大級のレタス工場のレタス祭り）
- ・全国高校生地方鉄道交流会のボランティア



【考え】

- ・町で農業イベント開催

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

【本校の取り組み】

- ・地域のイベントやボランティア活動に参加
- ・機関誌の発行
- ・SNS 発信
- ・自分たちでの野菜・果樹栽培

【考え】

- ・SNS の充実
- ・それぞれが何かしらの役割を持つ

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

【本校の取り組み】

- ・育てる楽しさ、食べる楽しさを知ってもらう活動（出前授業・学校給食への提供）
- ・SNS 発信



小牛田農林 Instagram

【考え】

- ・先輩たちの話を聞く会を実施

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立伊勢崎興陽高等学校

総合学科 3年 矢内 瑠菜

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、老若男女問わず地域の方々が参加できる活動として、農産物販売会「興陽フェスタ」を年に2回開催しています。当日は野菜や花の苗、興陽ピクルスなどを販売するほか、ボッチャやクラフト体験、アロマハンドマッサージといった幅広い世代が楽しめる企画も実施しています。さらに、地域企業と連携したオリジナル商品の開発・販売にも取り組んでいます。

これらの活動は、地域の方々に学校を身近に感じてもらうだけでなく、生徒と住民が関わり、世代を超えて絆を深める貴重な機会となっています。単に商品を販売するにとどまらず、地域の人々が楽しみながら交流し、学校と地域をつなぐこのような取り組みを、今後も積極的に続けていく必要があると考えています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に活動するためには、一人ひとりに役割があり、自分の行動が誰かの役に立っていると実感できる機会を増やすことが大切です。その具体例として、本校の農産物販売会「興陽フェスタ」や農業体験イベントの実施が挙げられます。農業体験では、小中学生を対象に高校生が主体となって野菜の育て方を教え、種まきから栽培、収穫までを一緒に行います。参加した子どもたちは、自ら育てた野菜を収穫することで達成感を得られ、農業や食への関心を深めるとともに、将来の選択肢を広げるきっかけにもなります。一方、教える側の高校生も、子どもたちの成長や喜ぶ姿に接することで大きな「やりがい」を得られます。クラブ員全員で協力してこうした活動に取り組むことで、主体性や責任感が養われ、活動への意欲をより一層高めることができると考えています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者の減少が続く中、農業のイメージアップを図るためには、若い世代にその楽しさや魅力を知ってもらうことが欠かせません。その手段として、まずはSNSを活用し、日常の農作業や収穫した野菜、体験イベントの様子などを積極的に発信することが基本となります。ただし、画面上の発信にとどまらず、実際に農作業に触れてもらう機会をつくることも同様に重要です。小学生から若手社会人までが気軽に楽しく参加できる農業体験を実施すれば、種まきから収穫までの過程を通して、農業の楽しさや達成感をダイレクトに実感してもらえます。さらに、その楽しそうな現場の様子や参加者の声を再びSNSで発信すれば、「農業＝大変そう」という固定観念を払拭し、将来の職業選択肢として興味を持つきっかけにもつながります。このように、「リアルな体験」と「SNSでの情報発信」を組み合わせることが、若者へ効果的に農業の魅力を伝える鍵になると考えています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立いずみ高等学校
生物生産科 2年 宮崎 遥真

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・老若男女問わず地域の人に参加できる活動（田植えや稲刈り、さつまいも掘りなどの農業体験や、収穫した農作物を使った料理体験・食事会など）
- ・地域の農業従事者や高齢者から昔の農法や体験談を聞く交流会。
- ・農産物の販売、祭りやスポーツ大会、清掃・ボランティア活動。
- ・農業高校が地域と連携し、「育てる・収穫する・食べる・学ぶ」活動を通して、地域の人同士が交流できる場をつくる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・一人ひとりの興味や得意分野を生かせる役割分担を行う。（栽培や研究、SNSでの発信、ポスター制作、販売など様々な分野に分かれ、自分たちで問題点や改善点を考えることで、主体性を高めることができる。）
- ・クイズ大会や料理、農業ボランティアなど、楽しみながら学べる活動を取り入れる。
- ・SNSやホームページで活動を発信したり、他校との交流を増やしたりする。
- ・クラブ員全員に参加できる活動として、畑の整備や農作業、作物を使った料理、研究発表、ボランティアなどを行い、全員が役割を持って楽しく活動できる環境をつくる。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・SNSなどを活用して、実際の農作業の様子や若い農業従事者のやりがい、スマート農業など、現在の農業の魅力を発信する。
- ・就農支援制度や補助金、企業での農業関係の仕事など、昔とは違う農業の働き方についても紹介することで、農業へのイメージを変える。
- ・小中学生を対象とした農業体験や高校生・農業従事者による講習、職業体験などを行い、幼い頃から農業に触れる機会を増やす。
- ・地域の飲食店や企業、有名人などと協力したイベントや、農業従事者へのインタビュー動画なども活用し、より多くの人に農業の魅力を知ってもらう。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立大網高等学校

農業科 3年 鈴木 悠布香

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域で採れた旬の野菜の収穫体験イベントなどがあると思います。

収穫し調理をするにあたり、地域のご年配の方から伝統的な郷土料理などを知れる貴重な機会です。高校生や子連れ家族といった若い世代が参加することによって伝統を次に伝えることもでき、多世代交流が生まれます

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

地域の花植えなど、その土地の特産物管理を各地区のクラブ員が行うことで、農業の関心を生み、農業クラブの知名度も上がると考えております。

また、自身が当事者となるために役員だけで活動内容を決めるのではなく、全クラブ員から農業にまつわるイベントなどのアイデアを募集します。これによって自分も農業クラブの一員という当事者意識を生み出せると思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

体験イベントを開催することで、興味関心のある人達に農業の魅力を知ってもらうことがいいと思います。対象者を子供だけにせず、多世代にわたって参加可能にします。収穫体験や農産物を使った調理体験など、実際に農業に触れる機会をつくることで、農業を身近に感じてもらえると考えます。また、農業高校や農業法人、地域企業などが協力してイベントを行うことで、農業の仕事や魅力を幅広く発信できます。体験を通して農業に対する理解や興味を深めてもらうことが、農業のイメージアップにつながると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立平塚農商高等学校
都市農業科 3年 高橋 孝大朗

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の小学校や自治会等の関係機関と連携し、年間を通じて高齢者から幼児まで幅広い世代が参加できる「地域参加型」の活動を展開する。具体的には、農作物の収穫体験や、収穫した野菜を活用した料理体験教室の開催、地域コミュニティ公園の花壇整備などを計画的かつ継続的に実施する。また、情報発信および周知活動として SNS を効果的に活用する。実施した地域参加型企画の写真や動画を積極的に投稿し、活動の認知度向上を図る。その際、参加した地域住民にも指定のハッシュタグを用いた投稿を促すことで、双方向のコミュニケーションを創出する。これにより、地域交流を活性化させるとともに、農業に対する取り組みや魅力を幅広い世代へ迅速かつ広範に認知させることを目指す。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全体の意識向上と活動への理解を深めるため、全国大会をはじめとする農業クラブ関連行事への積極的な参加、および見学を推奨する。参加・見学後は、校内において「報告会」を定期的の実施し、行事に直接赴くことができなかったクラブ員に対しても刺激や学びを共有できる環境を整える。さらに、農業高校ならではの豊かな自然環境を活かしたレクリエーションや、自ら栽培した野菜を用いた親睦 BBQ 等を企画する。その際、参加者全員に「企画」「調理」「記録」などの具体的な役割を割り振ることで、一人ひとりに当事者意識を持たせる。これにより、クラブ員相互の結束力を強化し、すべてのクラブ員が今後の活動へ意欲的かつ主体的に取り組めるよう促す。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のマイナスイメージを払拭するため、SNS 等のデジタルメディアを活用した広報活動を展開する。発信においては高校生の等身大の視点を活かし、日々の活動で感じるやりがいや楽しさ、旬の野菜を使ったレシピなどを分かりやすく紹介し、イメージアップを図る。さらに、地域のイベントや文化祭において「農業クイズ大会」などの体験型企画を実施する。景品として栽培キットや農業関連グッズを配布し、実際に農業に触れるきっかけを創出することで、多くの人へ農業の真の魅力を浸透させることを目指す。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立静岡農業高等学校

食品科学科 3年 久保田 莉乃

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私は、地域の人と交流を増やすためには、農業クラブ員が行っている「課題研究」での活動を活用することが大切だと考えます。農業高校では、農業に関するさまざまな課題をテーマに、クラブ員が調査・研究を行う「課題研究」に取り組んでいます。私は、この課題研究を学校内だけで完結させず、地域の企業や農家の方と連携したり、消費者と直接関わり意見を聞いたりして、共に活動することで交流につながると考えます。実際に私は、課題研究で二番茶を活用した加工茶の販売に向けて活動しています。お茶農家の方や地元の企業と協力したり、試飲会で幅広い年代にアンケートを行ったり、直接意見を聞くことで、地域の方と関わりながら活動に取り組んでいます。また、三保サーモンを活用した商品の開発に向けて活動している班もあり、企業との話し合いや広報活動を通じて、地域の方々と意見を交わす以外にも、販売を行い、実際に商品を手にとってもらいながら交流を深めています。このような農業クラブ員それぞれの課題研究を地域の交流の場とすることで、幅広い年代の方との交流につながると考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校でも、意見発表やプロジェクト発表などに取り組む生徒がいる一方で、発表を聞く側にとどまり、農業クラブ活動に積極的に参加する生徒は限られていると感じます。そこで、現在行われている活動をより多くのクラブ員に自分事として考えてもらうことが必要だと思います。例えば、静農祭でクラブ員が行っている課題研究の内容や成果をポスターにまとめて紹介します。ポスターを作成する過程で自分たちの研究を整理することで知識を深めるとともに、他のクラブ員と研究内容を共有することができ、今後の活動の参考となる情報やアイデアを得ることで自分たちの活動をさらに発展させようとする意欲につながると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

静岡県を含む地方では、進学や就職を機に若者が大都市へ流出することが課題となっています。その中で、若者が地域や農業に関心を持つきっかけを増やすことが必要だと考えます。そのためには、農業の魅力を伝えるだけでなく、実際に農業に触れる機会をつくることが重要だと思います。本校では、パンやお菓子の製造・販売を行う食品科学部が、「こども教室」を行っています。「こども教室」の活動は、農業高校生が地域の子どもたちを対象にパンの作り方を教え、自分で作る楽しさや食の魅力を伝えています。実際に体験した子どもたちは「たのしかった!」「またやりたい!」などの声があり、農業や食に興味を持つきっかけになったと考えます。この活動は食品分野ですが、栽培や収穫、加工、販売などさまざまな農業分野にも応用できると考えます。このように、子どもの頃から農業に触れる機会をつくり、農業の楽しさや多様な魅力を、体験を通して発信することで、将来、農業に関心を持つ人を増やし、農業のイメージアップにつながるのではないかと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県上伊那農業高等学校
アグリデザイン科 3年 池上 杏奈

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

学校行事では、農作物販売での交流が多く地域の方と関わることができると思います。各コースでの農作物や、各コースや課題研究で生産したものを販売することで、多くの農業クラブ員が地域の方と交流することができます。校内だけではなく、農業クラブ員が校外に足を運び地域の病院やお店で販売活動を行うことで多くの方と交流することができると思います。

また、地域の役場の方と協力して、地域の企画の中で地元の野菜を使って家族で調理するなど様々な参加者の交流や活動ができると思います。

2 第2分科会

**「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」**

興味・関心を持って意欲的に活動に取り組むためには、農業クラブ員一人一人が活躍する場を作ることが大切だと思います。そのためには、校外での交流や活動を行っていくこと、地域の問題に対して全員で取り組むことが必要だと思います。このような活動を通して、農業クラブ員の意識を向上させることができると思います。

また、全員ができる活動は、農産物販売のような自分たちが作ったものを自ら販売する機会を作ることや各学科やコース学習の中で地域の方と交流する活動をしていくべきだと思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

魅力を発信していく手段として、まず、SNSの活用による発信をすることが大切だと思います。幅広い世代に現状の農業について知ってもらうために、スマート農業などの先端技術の活用や農家さんそれぞれの活動を積極的に発信していくことが大切になると考えます。

また、これから農業に関わっていく世代たちに興味関心を持ってもらうためには、農業体験などの実際に体験してみる機会を作り、自分の手で農業に触れてみることで、興味・関心を持ってもらうきっかけづくりになると考えます。また、実際にやってみることでイメージとは違った農業を感じ取れる機会になると思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立稲沢緑風館高等学校
生活科学科 2年 三輪 礼美

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私たちは、花壇や農場を活用して地域の方々と交流できる活動を増やしていきたいと考えました。そのためには、子どもから高齢者まで幅広い世代が楽しめる体験型のイベントを実施することが大切だと思います。例えば、学校で収穫したミニトマトを使った大食い大会や、規格外などの理由で販売できないトマトを活用した調理の体験会を行うことで、食品ロスについて学びながら交流する機会をつくることができます。

また、松の葉を使ったサイダー作り体験や、花の定植体験を実施することで農業や自然に親しんでもらえると考えます。さらに、畑をチームごとに区画分けし、野菜の栽培や管理を行うイベントを開催すれば、参加者同士が協力しながら農業の楽しさを感じることができます。

このような活動を継続することで地域との交流により農業が身近な存在になると考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

私たちは、農業クラブ員全員が楽しみながら積極的に活動へ参加できるような取り組みが必要だと考えました。その提案として、学年対抗や学科対抗で行う「草抜き大会」を実施したいです。大会では制限時間内に抜いた草の量や、決められたミッションを達成した数を競うことで、普段の作業をゲーム感覚で楽しめるようにします。また、優勝チームにはお菓子などの景品を用意したり、「ミッションを多く達成したで賞」といった特別賞を設けたりすることで、参加意欲を高められると思います。

さらに、作業中に手袋や鎌を交換しながら協力するルールを取り入れることで、チームワークも育まれると考えます。そして農業クラブの恒例行事として定着させることで農業への興味・関心を高められるとともに、農業クラブ全体の活性化にもつながるのではないかと考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

私たちは、農業従事者が減少している現状を踏まえ、農業の魅力をより多くの人に発信する取り組みが必要だと考えました。そのために、実際に農業の仕事をしている方へインタビューを行い、仕事のやりがいや魅力だけではなく、大変なことについても紹介することが大切だと思います。そして、その内容を顔写真や勤務先の紹介とともにSNSで発信することで、より多くの人に農業が身近なものということを知ってもらえると考えます。また、農業体験や農作業体験ができる機会を設けることで、農業に触れ、実際に農業の魅力を体感してもらえるようにすることも大切です。なので、ショッピングモールなど多くの人が集まる場所で農業体験イベントを開催することで幅広い世代の方に農業のことを知っていただけると同時に、将来農業従事者を目指す人材を増やすきっかけになると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛農学園農業高等学校
農業科 3年 中島 裕太郎

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

イベントやマルシェなどの外部での販売に積極的に参加することだと考えます。顔が見える形でのつながりを持っていくことが大事なことだと考えます。SNSなどを用いて校内での農業クラブ活動を発信していくことも地域の方に自分たちの活動を知ってもらうために大事なことです。自分たちが生産者としてどのようなこだわりを持って農業に取り組んでいるか、農業クラブ員としてどのような活動をして、プロジェクトなどでどのような取り組みをしているか、SNSが広まっている昨今だからこそ、直接的な交流の重要性がより強くなっていると考えます。そのためにSNSを有効に使ってより多くの人に外部販売について、学校内行事について広く知ってもらうことが重要だと考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

校内では自分たちで育てた農産物をクラブ員同士で共有しあえる場を設けることで、でクラブ員同士が交流できる機会を作ることができると考えます。それぞれが実施しているプロジェクトの経過報告などを共有し専攻ではない分野にも興味を持ってもらえると考えます。他にも専攻をまたいで合同実習を行ったり、農産加工品などの共同開発やアイデアボックスなどを用いて新製品の提案ができたりすると農業クラブ活動がより活性化すると考えます。

校外では、地域向けに収穫体験をしたり、マルシェやイベントに参加したりして農業クラブ員が主体的に交流を深めていくことが活性化につながると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

まず自分たちが楽しそうに農業に取り組む姿勢が重要です。次に自分たちの姿を見てもらうことが重要だと思います。愛農高校では就農率40%を超える状態ですが、それは農家実習を住み込みで1～2週間体験することや、先輩の農家の方の話や生き方を見る中で「農業が尊い仕事だ」「カッコいい」と強く思えるからです。私たちが経験したことは私たちの農業に取り組む姿勢に反映されて来ていると思っています。その姿をどうしたら見てもらえるのか。自分たちが大切だと思うことを、確かに伝えていくことが大切だと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 鳥取県立智頭農林高等学校

森林科学科 3年 伊藤 瑛斗

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- 現 状**
- ・智頭町との交流を通して格子戸を制作し、提供をしている。
 - ・智頭町内にて即売会を開き、実習で制作物（加工品や農作物など）の販売を行い、地域活性化につなげている。
 - ・智頭町の小学生向けの森林教室を開催している。
- 問題点**
- ・そもそも他学科の人たちが何をしているのかがわからない。
 - ・交流も少なく、受け身になりがちで面白みを感じにくいいため、参加者が少ない。
- 対 策**
- ・参加者全員で取り組む体験活動をメインにする。
 - ・SNS を活用した発信、年齢を問わず「スゴイ！」となる実演（ドローン等）の交流会を開く。若者はスマート農業に強い関心を持っている。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- 現 状**
- ・農業クラブの活動内容がわかっていない生徒が多く、意欲と関心のないクラブ員が増えている。また、農業クラブの活動が特定の人だけになっている。
- 問題点**
- ・農業クラブの活動内容が分かりにくい。
 - ・大会等で結果を出せず、情報が目立たない。また、多くのクラブ員が受け身な姿勢をとっている。
- 対 策**
- ・大会で結果を出す。
 - ・SNS に農業クラブの楽しそうな写真をアップする。
 - ・全国大会など遠方での楽しそうな活動、体験を中心に広報する。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- 現 状**
- ・実習のしんどそうな農作業などをアップしている
 - ・SNS があまり動いていない。
- 問題点**
- ・昔のままの「重労働」なイメージが抜けていない。
 - ・発信者の主体性がなく、人材不足で魅力を十分に発信できず、また、発信のバリエーションが少ない。
 - ・SNS を見ている人にとって身近ではなく、重要性が分かりにくい。
- 対 策**
- ・スマート農業を全面的に押し出す。
 - ・様々な視点を持った人と関わり協力しあって盛り上げる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立井原高等学校

地域生活科 3年 川田 陽海

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域では、公民館での植栽活動や苗・野菜の販売、文化祭への出店、保育園との交流など、さまざまな世代が参加できる活動が行われている。しかし、交流する機会はまだ少なく、特に若い世代が参加しにくいことが課題である。これからは、ただ活動を行うだけでなく、「誰に知ってほしいのか」「どんな人に参加してほしいのか」など、目的を意識して広報することが大切だと考えた。SNS で活動の様子を発信したり、福祉施設や地域のイベントと協力したりすることで、子どもから高齢者まで参加しやすく、世代をこえて交流できる機会を増やしていきたい。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブでは、活動の目的や内容をよく知らない生徒もおり、積極的に参加する人とそうでない人に差があることが課題である。そのため、まずは全員が参加しやすく、楽しみながら取り組める活動を増やすことが大切だと考えた。また、一人ひとりに役割を持たせることで、自分も農業クラブの一員であるという意識につながると思う。文化祭での模擬店や農産物の販売、農業体験イベントなど、農業科の生徒全員が関われる活動を企画し、協力して一つのことをやり遂げる経験を増やすことで、農業クラブへの興味や関心を高めていきたい。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業では、働く人の減少や高齢化が進んでおり、これから農業を支える人を増やしていくことが課題となっている。また、農業には「きつい」「大変」といったイメージを持っている人も多い。そこで、作物を育てるだけでなく、農産物の販売や地域の人との交流などを通して、農業の楽しさや魅力を伝えていくことが大切だと考えた。さらに、学校で行っている農業の活動や新しい取り組みを SNS など積極的に発信することで、若い世代にも農業を身近に感じてもらいたい。農業の大変さだけでなく、楽しさややりがい、将来性を伝え、農業に興味を持つ人を増やしていきたい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 福岡県立行橋高等学校
農業技術科 2年 赤波江 七海

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- 五感で楽しむ体験イベント**：八女農業高校では地域住民が動物と触れ合える「ふれあい動物園」、糸島農業高校や行橋高校では生徒が手がけるファッションショー、朝倉光陽高校では地域への食育事業など、農業の枠を超えて地域全体で楽しめるイベントを主催しています。
- 子ども食堂の運営と高齢者施設訪問**：福岡農業高校による子ども食堂の運営や、遠賀高校の生徒による高齢者施設への訪問など、農業と福祉の連携した取り組みが行われています。
- 地域おこし・お祭りへの参画**：地域のイベントや商業施設と協力した農業体験を通じ、より多くの人に農業を身近に感じてもらうよう田川科学技術高校が地域の「コールマインフェスティバル」に参加するなど、市や地域と連携した取り組みを行っています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- 細分化された役割で臨む「農産物販売会・地域交流イベント」**：福岡農業高校で有名な「福農卵」の販売会では、一部の学科や生徒だけで行うのではなく、「案内係」「ポスター・チラシ作成」「SNSでの実況・広報」「会計」といったように、細分化した仕事を全員に割り振ることで、クラブ員全員が活動できます。全員が農業クラブ活動に取り組むことでクラブ員全員が興味関心を持ち、意欲的に取り組めるようになると考えています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- 知的な「スマート農業・データ活用」の魅力**：八女農業高校では、ハウス内に温度・湿度・CO₂・土壌 EC などのセンサーを設置し、タブレット 1 台でリアルタイムに数値をモニタリングするスマート農業を実践しています。また、牛の首輪にセンサーを取り付けて生育行動データを蓄積しています。また、GPS を搭載した「運転アシスト付きトラクター」を使い、生徒たちが「自分で確かめる」実習を行っています。こうした最新機械を軽やかに使いこなす姿は、スマート農業のリアルな進歩として農業のイメージアップにつながると考えます。
- 大手企業や行政とタッグを組んだブランド発信**：福岡農業高校では、カルビー株式会社と共同で、太宰府市産の梅を使用した受験生応援商品「ポテトチップス合格する梅」シリーズを 13 年連続で開発し販売しています。企業と連携し、SNS で情報発信することで、農業分野の楽しさを伝える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 鹿児島県立山川高等学校
園芸工学・農業経済科 1年 椎葉 莉風

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- 校内での農産物収穫祭などを計画し、多くの方々に学校に来てもらう機会を作る。
- 地域の環境美化作業などに高校生が参加して、交流を深める。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- 他校と集まり、農業高校で一つの販売会を作って、売れ行きなどを競ったり、一緒に協力したりする。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- 農業経営がうまくいっている方々の話を聞いて、農業の魅力を自分たちの言葉で伝える。
- 地域おこし隊の方と連携しながら、一緒に農業体験ができる場を増やしていく。

クラブ員代表者会議 参加レポート

関東ブロック 栃木県立真岡北陵高等学校

食品科学科 2年 島田 知歩

生物生産科 2年 板木 海斗

生物生産科 2年 齋藤 楓

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

SNS（InstagramやXなど）を活用して、農業クラブで行っている活動内容や農業の魅力を発信することで、同年代や小・中学生に農業への関心を持ってもらうきっかけをつくる。また、地域の小・中学校に高齢者や農家の方を招き、野菜や稲の植え付けなどを一緒に行う交流会を実施することで、世代を超えた交流を深め、地域全体で農業への関心を高めていく。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

学校で育てた花や農作物の販売会を行ったり、学校祭や地域イベント、地元のスーパー・道の駅などでPR活動を行ったりすることで、クラブ員が主体的に活動できる機会を増やす。また、クラブとしての目標だけでなく、「日本の農業を自分たちがどのようによりよくしていくか」という大きな目標を共有し、全員が同じ方向を向いて活動することで、興味・関心を深め、より意欲的に取り組めるようにする。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージアップには、農業を実態以上によく見せるのではなく、子どもたちが実際に土や作物、食に触れ、農業を身近に感じられる体験をつくることが大切である。小学校との交流や農産物を活用した商品・レシピづくりなど、農業高校で行っている活動を地域に広げ、楽しさだけでなく、生産の大変さや工夫も含めて伝える。その上で、体験や成果を写真や文章、SNSなどでも発信することで、農業への興味・関心を高め、将来の進路や職業として考えるきっかけにつなげていく。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック連盟 高知県立高知農業高等学校

畜産総合科 3年 山下 真心

畜産総合科 3年 小松 愛莉

畜産総合科 3年 西村 和真

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の伝統行事であるお祭りに、特産品等の「販売」と並んで「昔遊びの体験コーナー」を設置することを提案いたします。

お年寄りが子どもたちにコマ回しやけん玉などを教える場を設けることで、多世代が自然に触れ合えるコミュニティを形成します。シニア世代にとっては知識や技術を活かした「活躍の場」となり、子どもたちにとっては地域の人々と親しむ「学びの場」となります。体験スタンプラリーや座って交流できるお座敷スペースの設置などを工夫し、老若男女誰もが主役となり、笑顔で交流できるお祭りの実現を目指します。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が興味を持ち、意欲的に取り組むためには、「自分たちの活動の成果を実感すること」と「全国のクラブ員との繋がりを感じること」が重要だと考えます。

具体的には、現在行われているタンポポ調査のように、自分たちが集めたデータがどのような結果につながったのかを単位クラブ内で丁寧に報告・共有する仕組みを作ることが不可欠です。自分の行動が社会や地域の成果として可視化されることで、次の活動へのモチベーションが高まります。また、全員が一体感を持って取り組める活動として、全国のクラブで同じ作物を栽培し、その過程や桜の開花状況などをSNS でリアルタイムに共有・比較する取り組みを提案します。気候による違いを楽しく学ぶと同時に、他校の頑張りが刺激となります。

さらに、農業に造詣の深い城島茂さんのような方とのオンライン交流イベントなどを企画できれば、クラブ員の農業に対する誇りと興味をより一層引き出すことができると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者が減少する中でイメージアップを図るには、従来の「大変」という固定観念を塗り替え、農業の「楽しさ・面白さ・価値」をダイレクトに届ける発信活動が必要です。

第一に、若手農家によるSNSを通じた主体的な発信の推進です。若い世代の感性で、スマート農業の導入や美しい農園の風景、農家ならではの食のこだわりなどを画像や動画でリアルタイムに発信することで、「新しくてかっこいい農業」の姿を若年層に届けることができます。

第二に、実際に土や作物に触れられる「体験の機会」を増やすことです。収穫体験や農園イベントなどを通じて、自分で収穫して食べる感動を直接味わってもらうことで、農業に対する親近感や感謝の気持ちが芽生えます。

情報発信で興味を引き、リアルな体験でファンを増やす。この両輪の取り組みによって農業の魅力を多角的に伝え、未来の農業を支える人材の確保につなげていくべきだと考えます。

参加者課題レポート

第3分科会 第8会場

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第8会場	滋賀県立八日市南高等学校	愛媛県立西条農業高等学校

第3分科会 第8会場

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	福島県	相馬農業高等学校	食品科学科	2	宝槻 なつ子
2	群馬県	藤岡北高等学校	生物生産科	3	新井 祐貴
3	埼玉県	児玉高等学校	生物資源科	3	吉田 颯樹
4	千葉県	茂原樟陽高等学校	農業科	3	古山 蒼空
5	神奈川県	中央農業高等学校	畜産科学科	3	高橋 果鈴
6	静岡県	磐田農業高等学校	食品科学科	2	藤野 慎平
7	長野県	下伊那農業高等学校	栽培科学科	2	吉澤 奈乃葉
8	愛知県	佐屋高等学校	生物生産科	2	伊東 桃子
9	三重県	伊賀白鳳高等学校	生物資源科	3	山内 龍希
10	鳥取県	倉吉農業高等学校	生物科	3	松田 夏帆
11	岡山県	真庭高等学校	食農生産科	3	前田 ひなみ
12	佐賀県	唐津南高等学校	食品流通科	3	坂本 柊弥
13	沖縄県	中部農林高等学校	熱帯資源科	2	玉城 虎勇

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	滋賀県	八日市南高等学校	食品科	3	北川 莉愛
15	滋賀県	八日市南高等学校	食品科	3	河村 奏歩
16	滋賀県	八日市南高等学校	花緑デザイン科	3	鳩 楓駕

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	愛媛県	西条農業高等学校	食農科学科	3	石川 いろは
18	愛媛県	西条農業高等学校	食農科学科	3	宇野 真織
19	愛媛県	西条農業高等学校	生活デザイン科	3	西坂 聖愛

近畿ブロック 滋賀県立八日市南高等学校

食品科	3年	北川	莉愛
食品科	3年	河村	奏歩
花緑デザイン科	3年	鳩	楓鴛

(1) 近畿ブロックの紹介

(2) 滋賀県連盟の紹介

滋賀県連盟の紹介

新潟県立高校
3学科4クラス

甲南高校
総合学科2コース

長浜県立高校
3学科3クラス

八日市南高校
3学科3クラス

滋賀県の農業は、琵琶湖を中心に周りの山を源流とする約450本の河川の豊かな水資源と、大都市圏に近い立地を生かして発展してきた。特に水稻栽培が盛んで、「近江米」は滋賀県を代表する農産物です。また、日本三大和牛の一つとして知られる「近江牛」の生産も盛んで、長い歴史と高い品質を誇ります。さらに、琵琶湖や周辺の環境を守るため、化学肥料や化学合成農薬の使用量を減らす「環境こだわり農業」や琵琶湖と共生する農林水産業（琵琶湖システム）は千年以上受け継がれています。近年は、高温に強く食味にも優れた「きらみずき」や、2026年にデビューした新品種「ことさんさん」など、気候変動に対応した品種の導入も進んでいます。米や畜産だけでなく、野菜や果樹など地域の特色を生かした農業も行われている。

滋賀県立八日市南高等学校は、琵琶湖の東側：湖東地域と呼ばれる東近江市に位置し、滋賀県内でも特色ある農業教育を行う専門高校である。本校には「農業科」「食品科」「花緑デザイン科」の3学科があり、動植物の生産から食品の加工・製造、庭園や公園などのデザインまで、農業を基盤とした幅広い学びを実践している。本校の学びの特徴は、教室で知識を得るだけでなく、実際に「つくる・育てる・加工する・デザインする・伝える」という体験を通して学ぶことである。農業クラブ活動やインターンシップ、地域との連携活動などにも積極的に取り組み、専門的な知識や技術だけでなく、課題を発見し、仲間と協働して解決する取り組みを行なっている。

2 事例発表①【企業とコラボ】

・東近江スマイルネットにおける園芸コーナー担当

農業科の野菜専攻と園芸専攻を中心に地元のケーブルテレビ“東近江スマイルネット”で、月に一度、園芸コーナーを担当している。ここでは自分たちが普段学んでいることを地域の方へ広め、一人でも多くの方に家庭菜園に挑戦してもらい、収穫の喜びを共有したいという“想い”から始めた活動である。主な内容としては、季節野菜の栽培方法、プランターを使ったナスやトマトなどの定植方法を紹介、その後の管理や収穫方法なども紹介している。またこれまではサンドアートやドライフラワー、多肉植物や切花の活用方法などを紹介した。地域の方から好評であり、放送回数は第50回目となり、現在も継続している。

・かなめカフェとのコラボ商品の開発と販売

地元にある「かなめカフェ」との連携事業がコロナ禍をきっかけに誕生した。本校は、滋賀県内の農業高校で唯一の乳牛を飼育しており、日々生乳を生産している。コラボのきっかけは、コロナ禍の生乳出荷停止である。自分たちの生乳を生かした何かを生み出したいという“想い”から、「かなめカフェ」と共に“アイスクリーム開発”に取り組んだ。

“かなめ”は、物事を中心になることを願ひ付けられており、地元食材に触れ、季節を感じられ、子どもたちが安心して食べられるアイスクリームを作りたいという“想い”から開業されました。今では、『八南みるく』として、販売されている。この他にも、学校で栽培したサツマイモや政所茶、夏みかんなどを使用したアイス開発に畜産専攻生が携わり、季節を感じられるアイスクリーム作りに取り組んだ。

事例発表①【企業とコラボ】

かなめカフェ
2018.5 東近江市にOPEN
“かなめ”=「要」
物事を中心になること。
「地元食材に触れ、
季節を感じられ、
子どもたちが安心して食べられる
アイスクリームを作りたい。」

お店の外観

事例発表①【企業とコラボ】

“八南みるく”の販売
R2.9月から
新しくメニューの
一つに加わり
販売開始!!

キャッチ
フレーズ
「八南牛乳が
アイスになり
ました。」

おすすめ
アイスクリーム
「八南みるく」

カップアイス
蓋のデザイン
畜産部の牛豚
と本校の校章
& かなめカフェ
のロゴ入り!!

・地元小学生との交流会

滋賀県内の農業高校では、20年以上継続されていた“ふれあいスクール”という事業を受け、現在でも異年齢交流を続けている。本校では、小学生と一緒にさつまいもを育てる活動「さつまいも交流」を実施している。5月の中旬までに畝立てやマルチ貼りをを行い、小学生と一緒にサツマイモの苗を定植する。小学生は、サツマイモの育ち方や植え方などを高校生から教えてもらいながら、楽しそうに作業に取り組む姿がみられた。

また定植後には、高校生が育てる畑を見学し、小学校で育てている野菜の育て方を質問する小学生に“分かりやすく丁寧に説明する”にはどうすれば良いか苦戦することが多くある。

10月には収穫作業を行なっています。小学生は、サツマイモを傷つけないように慎重に掘り上げ、時に大きなサツマイモに出会った時には大きな声を出して喜んでくれます。小学生と一緒に作業を体験する貴重な学びの機会となっている。

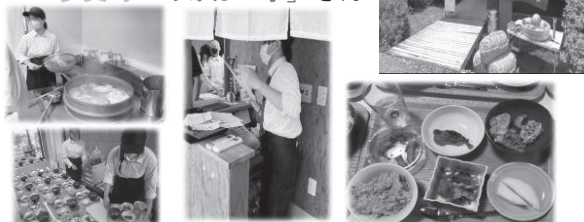


3 事例発表②【地域への還元】

・15年以上継続する高校生レストラン

地元食材を利用したメニューを考案し、自分たちでレストランを運営する「高校生レストラン」は、地元の飲食店舗を使用して取り組みます。これまでいろんなメニューを考案し、地元の方々や保護者の方へ提供してきた。昨年は、多賀町にある「あけぼの亭」さんで、料理の提供だけではなく、過疎化で廃村となった多賀町桃原地区を深く知ってもらうために、夏祭りの計画を行なった。現状を知ってもらい、昔からの伝統食や伝統文化など、見て・触って・体験していただく企画をした。その結果 人を呼び、人の流れをつくることができ、利用者の皆さんには、地域の特徴や魅力を深く理解していただく取り組みができた。

事例発表②【地域への還元】
高校生レストラン
多賀町「あけぼの亭」さん



・政所茶の栽培と販売

奥永源寺の政所地域の茶園において「幻の銘茶 政所茶」を栽培・管理・販売し、地元の方々と共に資源を守り、茶の普及に努めている。学校から数十キロも離れた茶畑へ移動し、丁寧に「一ごき摘み」で手摘みを行なっていきます。約2年前まで玉露を栽培するときに太陽を遮るために昔から使われてきた藁でできたコモを使っていたが、コモを編むのに時間がかかること、また雨を含むと重くなるなど重労働であった。そこで黒い寒冷紗による被覆栽培に変更したところ、重労働が軽減され、それらを改善することができました。いろんな課題がある中でも、地域の方と一緒に貴重な地域資源を守り抜く活動は大切である。

事例発表②【地域への還元】

政所茶



4 事例発表③【行政との連携】

・小さな土地を有効活用したポケットパークの作製

東近江市役所との連携で、道路建設に伴って生じる道路残地を活用した「まちなかポケットパーク」のデザインを選考し、実際に建設会社と連携し施工実習を行い、完成させた。デザインでは、緑を感じられるように、植栽や花壇を設け、通行する人が休憩できるようにベンチを設置した。

行政と企業との連携で生まれる“産学官”を行うことでそれぞれの良さを活かすことができる。日々の学習の成果を制作物として残せることは、貴重な経験となった。



5 事例発表④【地域に向けた販売イベント開催】

・定期的な八南マーケットの開催

生徒が運営する「八南マーケット」で毎週木曜日夕方に地域住民へ販売している。毎回多くの方々が購入に訪れるなど大変好評を得ており、地域に愛される活動となっている。約4年前までは昔ながらのレジを使用していたが、打ち間違えや品目別集計が出ないなど不便な面が多かったため、エアレジを導入した。バーコードリーダーでバーコードを読み込むだけになり会計が以前より高速化ができた。また売り上げや客数が自動的に集計されたりと便利になり、より学習に意欲的に取り組める環境になった。



・毎年恒例、農産物販売会である“南校販売会”の開催

南高販売会は年に1回秋に実施しており、校内農場にて収穫物・加工品の販売を実施している。毎回多くの地域の方々や保護者が来校され、農業クラブ執行部生徒が中心に運営し、本部から全体把握をして放送、案内、誘導等で活躍している。日々農業クラブ執行部として多くの活動を経験しているため、常に一步先を見据えた状況判断ができたり、状況に応じて話すスピー

事例発表④【地域に向けたイベント】

「南高販売会」



ド、言葉選びもすることができようになったと感じる機会の一つである。

また地域の方と直接交流することができる貴重な機会であり、対面販売する中での励ましの言葉や農産物・加工品の感想を聞くことができ、農業のやりがいを感じる場面である。

6 まとめ

「農業をもっと身近に。」-知る・見る・体験することから始まる農業のイメージアップ-

1：農業を知らない人へ、農業を知る機会を増やす。

2：農業を見る機会を増やす。

3：農業を体験する機会を増やす。

そして、農業を体験して感じた魅力を自分の言葉で誰かに伝えてもらう。

「農業を知っている人」を増やすことが、「農業を応援する人」を増やし、

やがて「農業を仕事にしたい人」を増やすことにつながる。

その第一歩は、私たち農業を学ぶ高校生である。私たちが農業の魅力を感じ、将来において農業に常に関心を持ち続けること。

そして身近な人に農業の魅力を発信していくことが大事だと考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東北ブロック 福島県立相馬農業高等学校

食品科学科 2年 宝槻 なつ子

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、幅広い世代に相農を身近に感じてもらうため、地域の小中学生や地域住民との継続的な交流活動を実践しています。

「生徒が先生」と「学校開放講座」

地域の小中学生を招き、生徒が先生役となって家畜の給餌や収穫・製造体験を行うことで「またやりたい!」という声を多くいただいています。また、一般の方向けに藍染め体験や門松作成、パン作りなどを体験できる学校開放講座を毎年実施しています。

地域美化と復興への参加

毎年50名以上が「南相馬市鎮魂復興市民植樹祭」に参加し、海岸防災林の育成に貢献しています。また、環境緑地科が中心となり、南相馬ICでの40mに及ぶ花壇造成や、学校周辺の「フラワーロード」整備を行い、地域に癒しを提供しています。

産学連携による地産地消の推進

株式会社紅梅夢ファームや株式会社マルトと連携し、南相馬市での地産地消を目指した商品開発を行い、地域の方々から大変好評を得ています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

ICTを活用した全員参加型「FFJ環境調査」

任意だった環境調査をGoogle Classroomを活用した新様式に変更し、全クラブ員参加型で実施（提出率97%）。これが1年生にとって学校の取り組みを「知る」第一歩となっています。

全員所属の「郷土芸能継承活動」

98年の歴史を持つ郷土芸能において、クラブ員全員が6つの部いずれかに所属し、コロナ禍でも途絶えることなく芸能披露を行うことで、全員参加の活動を実現しています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

企業連携による新しい農業の魅力発信

食品科学科では、アクセンチュア株式会社等の協力で伝統食「ベンケイ」をスナック菓子「ハレノヒ」として開発・販売。さらに「ツユアカネ」の商品開発など、産学連携による新しい取り組みで地域を盛り上げています。

「見られている意識」を持った情報発信

1日1回のホームページ更新やInstagramでの発信を継続しています。情報を常に発信することで、生徒自身に「見られている」という意識が芽生え、活動への意欲向上に繋がっています。

生徒の頑張りを地域に披露する場の創出

年々来場者が増加している農場での生産物販売会やJA主催の販売会に加え、地元企業や地域住民を招待する「校外課題研究発表会」を開催。「生徒の頑張りを知ることができた」と評価していただくことで、農業高校と農業のイメージアップを図っています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立藤岡北高等学校

生物生産科 3年 新井 祐貴

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

老若男女問わず地域の人に参加できるものといえば、お祭りやワークショップ、清掃活動などがあると考えます。

○お祭り・・・とにかく楽しいイベントで、お祭りに来た人や屋台の人など多くの人とコミュニケーションを取ることができるので良いと考えます。本校にもアグリフェアという農産物販売会がありますが、地域の人にも心待ちにしてくれているし、自分たちにとっても、それぞれのコースで作ったものを喜んで買ってもらえるので、やりがいを感じています。

○ワークショップ・・・ものづくりを通してコミュニケーションを取ることができ、比較的容易に達成感を得ることができます。

○地域の清掃活動・・・自分の住んでいる地域でも行っており、多くの人に参加しています。地域もきれいになり、地域への愛も深まるため良いと考えます。

以上のような活動も、アグリフェアのように『自分たちで運営する』という点が加わると大変な面もありますが楽しさややりがいが増すと思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全員が興味・関心を持ち意欲的に農業クラブ活動に取り組むには、普段農業クラブ活動への関わりが少ないクラブ員のために、全員が関わられるような活動が増えれば良いと思います。本校では収穫祭として、生徒クラブとPTAが準備に携わる『全校バーベキュー』を実施しています。本校で栽培した米を食べながら行うバーベキューは、生徒の楽しみな行事でもあります。農業高校生として、命に感謝し、次の豊作を願うとても大切な行事なので、ただ楽しかった、美味しかったで終わらせないことが重要です。そして、収穫祭に限らずどの活動も、その意味を丁寧にクラブ員に伝え、理解して参加してもらうことが大切だと思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業の魅力を多くの人に発信するためには、テレビがよいのではないかと考えます。世代問わず多くの人が見ており、SNSよりデマ情報も少なく、多くの人に認知してもらえます。例えば『ダッシュ村』のように、明るく前向きな農業関連番組が増えれば農業のイメージアップに繋がると 생각합니다。農業は大変というイメージが先行していますが、スマート農業のような先端技術のことや農業の成功事例や魅力をテレビで流れてくるコマーシャルのようにもっと気軽に知りたいです。新聞は取り寄せている家庭が減少しており、若者があまり読まないため、若年層への発信には向いていないと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立児玉高等学校
生物資源科 3年 吉田 颯樹

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・ 地元の農家さんや酪農家さんの実際の仕事を体験するイベント
(牛の乳搾りや餌やり、野菜の収穫体験など)
- ・ 農業高校や大学の収穫祭を県で行う。
(お祭りなどは老若男女が集まるので、野菜の直売所や農業の楽しさを発信するコーナーなども作ると良いと思う。県の農業高校、農業の分野がある大学などの人たちも集めたら生徒の保護者なども来てくれそう)
- ・ 地元の高齢の方を講師としてお招きし、地元の親子や、普段農業に関わりのない高校生達と一緒に保存食や郷土料理を作る。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・ 農業クラブの中で部門を作る。
(昆虫や魚、野生動物、植物など)
- ・ それぞれの部門でテーマを掲げ、それについて探求・研究していき発表する。
(高校の課題研究みたいな感じで行う)
- ・ 部門を申請して何人集まれば実施できるみたいにできたら良いと思う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- ・ 農業高校生が地元の飲食店や子ども食堂などと協力して、高校で育てた家畜や野菜などをお客さんに提供してもらう。
- ・ 県でそれぞれの農業用 SNS を作り、その県ではどんな野菜や畜産に力を入れているのか、またどこがほかの県とは違く、多くの人に知ってもらいたいアピールポイントを発信する。
- ・ 将来の農業従事者を増やすため、小中学生に「キツそう、やりたくない」というイメージを「楽しい!」に変えるために、農業用機械の操縦やドローンなど、スマート農業の体験型イベントを開催する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 千葉県立茂原樟陽高等学校

農業科 3年 古山 蒼空

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

親子連れや子ども、大人などの幅広い世代が気軽に参加できる農業体験や収穫体験を開催し、地域住民同士や学校とのつながりを深める機会を創出したい。このような交流が地域全体に広がることで、新たなコミュニティの形成や地域の活性化につながると考える。

また、農業に関心のある人だけでなく、これまで農業と接点のなかった人にも来校してもらえるよう、ひまわり迷路やフォトスポットの設置など、誰もが楽しめる企画を実施したい。これらの活動を通して、農業高校の魅力や農業への理解を広く発信していきたい。

さらに、現在実施している農産物販売会についても、地域住民と学校をつなぐ貴重な交流の場として継続的に開催し、地域との連携を一層深めていきたい。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が興味・関心を持って活動に取り組むためには、高校生が楽しみながら参加できる活動を充実させることが重要であると考え。栽培や収穫だけでなく、収穫した農産物を活用したレシピの考案や加工品の製造・販売など、6次産業化の学びを取り入れた活動を実施することで、農業について実践的かつ主体的に学ぶことができる。

また、農業をテーマとしたフォトコンテストやポスター制作など、多くの生徒が興味を持って参加できる活動を取り入れることで、部活動に所属している生徒を含め、より多くのクラブ員が活動に参加しやすくなると考える。このように、一人ひとりの興味や得意分野を生かせる活動の機会を増やすことで、農業クラブ全体の活性化につながると考える。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージアップを図るためには、農業の楽しさや魅力を積極的に発信することが重要であると考え。SNSを活用し、農業を体験したことのない人でも興味や関心を持てるような情報や体験活動の様子を発信することで、農業をより身近に感じてもらうことができる。

また、収穫した農産物を活用した料理や加工品を紹介することで、農業に直接関わったことのない幅広い世代に対しても、農業への理解を深めてもらう機会を提供できると考える。さらに、農業が人々の生活を支える重要な産業であることを発信することで、その社会的な価値や役割について理解を深めてもらうことができる。

加えて、近年はドローンやICT技術を活用したスマート農業の導入が進み、作業の省力化や効率化が図られている。このような先進的な農業の姿をSNSなどを通じて発信することで、「農業は大変な仕事」という従来のイメージを改善し、魅力ある職業としての認知を高めることにつながると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立中央農業高等学校
畜産科学科 3年 高橋 果鈴

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

中央農業高校では酪農教育ファームや、食品加工部による製造体験会など地域の子供たちや保護者のみなさんと交流できるイベントを行っている。また農業総合科による校内販売会や海老名駅構内での販売会や卒業生の生産物を販売する絆マルシェも行っている。

他にも草花部によるイベント参加や近隣保育園との芋掘りなどもあり、収穫体験やフラワーアレンジメントなど、地域の人に参加できるイベントも多い。

より知ってもらうためには SNS を利用した若者への呼びかけや、子供たちへ農業の魅力や楽しさを知ってもらえるようなイベントがあれば良いと考えている。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

学校内でキャンプをして、校内の生産物で BBQ や果物狩りなどを通して農業クラブ委員の仲を深め、農業に対する気持ちを上げる。FFJ の歌を踊り農クを盛り上げる。

また他の科と協力しつつ、作物の栽培や、野菜や果樹を加工したり、自分が所属していない科の知識を取り入れた実習を協力して横断的に行う。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

SNS で情報を発信する。

地域の人に作業を体験してもらいながら、より農業を知ってもらう。

子供向けの体験会を行う。

スマート農業の普及、それに伴い「大変」「暑い」「寒い」「汚れる」などのイメージを払拭する。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 静岡県立磐田農業高等学校

食品科学科 2年 藤野 慎平

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

(1) 文化祭

文化祭では、地域の高齢の方々も野菜や果物、作ったものを買いに来るし、卒業生などの若者も多く来校するため、交流の機会が増えるし、自分たち自身も来校してくださった様々な方と交流ができる活動なため

(2) 軽トラ市

軽トラ市では出店している様々な人（老若男女問わず）が、来てくださった地域の方々と交流ができ、老若男女問わず交流ができる場だと思う。また、自分たちも手伝いや活動で、交流ができるためより機会が多い

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

(1) FFJ の踊りをみんなで覚える

最初はあまりやる気にならないかもしれないけど、やり始めれば一緒にやっていく仲間と意欲的に取り組めて、クラブ員の仲も深まるため。また、この踊りを覚えて新入生歓迎会などをやれば、「農業クラブ」の活動に興味・関心を持つ人が多くなるかもしれないため

(2) 校内農クリーダー研修会

前農ク会長が農業クラブの活動をしてよかったことなどを話してくれて、活動への意欲や興味・関心も高まり、農業クラブ員のみんなで一緒にご飯を作ることで、仲も深まり、より農業クラブの活動を意欲的に行うことができるようになる

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

(1) SNS の活用

SNS を使えば、農業従事者それぞれのよさを、より多くの人に発信することができるし、自分のやりたいように動画を制作し、日本の農業の現状を多くの方に知ってもらえる。

また、若者が多く見ていると思うので、次世代につなぐという面でも、いい活用だと思う。

(2) イベントなどで直接伝える

地域のイベント（軽トラ市など）の際に少しスペースを作り、そこで来場者の方に日本の農業の現状を伝えるとともに、農業の良さ（やりがいや、最新の農業など）を直接伝えていく。

(3) 直接農園に来てもらう

直接栽培しているところに来てもらうことで、みんなが思っている農業とは違うところ（AI技術を活用するなど）を見れて、農業に対する気持ちというのが1番変わりやすいと思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県下伊那農業高等学校

栽培科学科 2年 吉澤 奈乃葉

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の人が老若男女問わず参加できる活動として、種まきから野菜を育て、収穫し、その野菜をみんなで料理して食べる活動が考えられる。作業を分担することで、子どもから高齢者まで無理なく参加でき、世代を超えた交流にもつながる。

このように一連の体験とすることで、参加者の満足感や達成感が高まり、継続的な参加につながると考える。子どもは食育や成功体験を得ることができ、大人は家庭菜園や調理の知識を学び、高齢者は農業や料理の知恵を伝える役割を担うことで、生きがいにもつながる。

交流を深める工夫として、収穫した野菜の持ち帰りやレシピの配布、「一番大きな野菜賞」などの表彰を行うことが考えられる。また、料理教室では郷土料理を取り入れることで、地域の食文化を知り、若い世代へ知識や技術を受け継ぐ機会にもなる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

生徒一人一人の意見をアンケートや話し合いを通して活動に取り入れ、自分たちで決めた活動という意識を持つことが大切である。また、栽培・収穫・販売など成果が目に見える活動や、具体的な目標を設定することで、達成感ややりがいを感じることができる。そのため、一部の人だけが活躍するのではなく、全員が役割を持ち、達成感を味わえる活動を取り入れることが重要である。クラブ員全員ができる活動として、農場や校内環境の整備、農産物販売、研究・プロジェクト活動などが挙げられる。農場整備では除草や清掃を通して協力する力を高めることができる。農産物販売では、栽培だけでなく接客や会計、袋詰め、展示・運営など多くの役割があり、全員が参加できる。研究・プロジェクト活動では、班ごとに調査や実験を行い、協力しながら知識や技術を深めることができる。

このように、全員が役割を持って参加できる活動を増やすことで、農業クラブへの興味・関心や意欲の向上につながると考える。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

自分で育てた作物が商品になり、消費者のもとに届く喜びや、自然の中で働く気持ちよさ、地域の人とのつながりなど、農業には多くの魅力がある。こうした魅力を伝えることで、「農業＝大変な仕事」というイメージを変えていけると考える。特に若い世代に向けては、InstagramやYouTube、TikTokなどのSNSを活用し、農作業の様子だけでなく、農家の日常やライフスタイルなども発信していくことが効果的だと思う。農業を仕事として紹介するだけでなく、実際に農業をしている人の生活や楽しさを見せることで、「農業をする生活も楽しそう」と感じてもらえるからである。

さらに、ドローンやAI、自動運転農業機械、データを活用した栽培など、最先端の技術が農業に取り入れられていることも発信するべきだと考える。農業は昔ながらの大変な仕事というだけでなく、最新の技術を活用しながら効率化や品質向上を目指す仕事でもある。このような新しい一面を伝えることで、農業に対する「カッコいい」「面白そう」というイメージを広げることができると思う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立佐屋高等学校

生物生産科 2年 伊東 桃子

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

佐屋高校では「さつまいもプロジェクト」として、地元小学生や福祉施設の方と一緒にさつまいもの植え付け体験を行っている。そこでは、小さな子どもから高齢者まで、また障がいのある方も一緒になって楽しみながら活動することができている。家庭菜園レベルの農作業は特別な技術がなくても参加しやすく、協力しながら取り組むことで自然と会話が生まれ、地域の交流を深めることにもつながる。また、上記の活動以外に本校アニマルコースの専攻生は地元小学校や高齢者施設に出向き移動動物園を実施している。授業で学んだアニマルセラピーの知識や技術を活用し、世代を超えた地域の方々との交流の機会を創出している。植物や動物に触れながら活動することで、子どもから高齢者まで幅広い世代が楽しく交流でき、地域のつながりをさらに深めることができると考える。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が意欲的に活動するためには、成果や達成感を実感しやすい活動を取り入れることが大切だと考える。例として農産物の販売会や農業体験活動がある。本校では今年度から、農産物即売会を実施している。3年生が中心となって地域の方へ販売を行うことで、流通について学ぶ機会となり、また消費者の方と直接やりとりをすることで、次の生産に向けた意欲にもつながっていると感じる。さらに、クラブ員一人ひとりが活躍できる役割をつくることも重要であり、リーダーや記録係、広報係など、それぞれの得意なことを生かせる場があれば、全員が主体的に参加しやすくなると思う。また、先に述べた「さつまいもプロジェクト」は植え付けから収穫までの過程をみんなで協力して行うことができ、収穫時には達成感を味わうことができた。この活動は、地域の人々との交流にもつながり、誰でも参加しやすい活動であった。このような活動を増やしていくことで、クラブ員全員が楽しく意欲的に取り組める農業クラブになると考える。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージアップを図るためには、SNS を積極的に活用し、農業の魅力を多くの人に発信していくことが重要だと考える。例えば、農作業の様子や作物の成長過程、収穫したときの喜びなどを写真や動画で発信することで、農業の楽しさややりがいを知ってもらうことができる。本校の農業クラブではInstagramでの発信を不定期で行っており、今後は実習の風景などもリール動画で投稿していきたいと考えており、農業を身近に感じてもらえるように努めていきたい。さらに、農産物販売会を通して生産者である私たち生徒自身が作物への思いや栽培の苦勞、こだわりを伝えることで、消費者の農業への理解や関心を深めることができる。このように、SNS での情報発信や販売会での交流を通して農業の魅力を伝えていくことで、農業に対する良いイメージを広げ、将来の担い手の増加にもつながると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 三重県立伊賀白鳳高等学校
生物資源科 3年 山内 龍希

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私たちが現在参加している地域の催しには、友生地区・寺田地区のバザー、ガス展、いきいき未来伊賀、甘いもんトレイン、サンピアマルシェなどがあります。また、週に2日校内販売所での販売、3年に1度イオン津南の商業施設での販売を行っています。このような「地域密着・既存イベントの活用」することで地域の人と交流を続けていければと考えています。

地域の人と交流する接点を増やしていくことも大切になってくると思います。単に農産物や加工品の販売だけではなく、地域住民が「一緒に参加・体験できる」活動が出来ればと思います。加工品の試食会の実施、子どもの農業体験会の実施、次世代を担う子供達を中心に多世代が自然や食を通じて 集まれるイベントなど農業・食・商品開発をテーマにした地域を巻き込む体験型交流を実施することで、もっと地域の人との交流を活発化できればと考えます。また、白鳳フェスなどの学校行事を活かし、地域住民の方にもっと足を運んでもらえる場になればと思っています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

生物資源科・フードシステム科の専門コースの枠を超え、共同・連携して取り組むことで、お互いの専門性を活かした交流を生み出せればと思っています。クラブ員全員が親しみやすい「食」を通じての活動が出来ればと考えています。具体的には、餃子作り、餅つきを計画しています。本校には、農業科以外の学科の生徒もいるので、搗いたお餅を文化祭などで振る舞うことで、自分たちの活動を外部や他の生徒へ伝える場（農業クラブのPRの機会）となる、参加するクラブ員のやりがいや意欲向上につながると 생각합니다。

クラブ員の農業に興味・関心を高めるために、身近な先端的農業施設やテーマパークを訪れ、五感で農業の魅力を再発見する活動（体験型ファームステイ）が出来ればと考えます。具体的には、日帰りで地元の農業体験施設（モクモク手づくりファーム）を訪れ、体験や見学をしたいです。また見学だけでなく、現地でバーベキューなどの親睦体験に取り組むことで全員が楽しく気軽に参加できるイベントにしたいです。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

「きつい・大変」という古いイメージを覆すため、最先端の格好の良さ（スマート農業）や、泥臭くも感動的成長ドラマ（ストーリー）で共感を持たせるようなものを発信していくことが重要だと考えます。例えば、若者が「やってみたい」と思えるようなドローンや自動運転、データ管理といった「スマート農業の良さ」視覚的にアピールする。効率化されてスマートな姿と、農業本来の「やりがい」をセットで発信し、「大変な仕事」から「先進的でクリエイティブな仕事」へとイメージアップさせるような動画を作成し、発信していければと思います。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 鳥取県立倉吉農業高等学校

生物科 3年 松田 夏帆

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では科の特色を生かし地域との交流を行っている。生物科畜産コース応用動物専攻では乗馬交流を行い、親睦を深める機会づくりに取り組んでいる。また、地域に開けた学校を目指し、学校の生産物を販売する「のうこう市場」を年に二回、さらに倉吉駅での販売を行う「駅パル販売」や文化祭である「倉農祭」にて販売を行うなど年間を通じて販売活動を行い、生産した作物をお客様に届ける流通について学んでいる。

この度の会議では、他校ではどのような取り組みを行いながら老若男女関係なく繋がりを生み出す機会づくりを行っているか知る機会としたい。



図1 乗馬交流の様子

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校では行事として「農業クラブ総会」を年に1度実施している。未だ農業クラブについての理解が深くない1年生にも活動の理解を深めてもらうため、農業クラブについての説明や関連競技についての説明、FFJ検定の解説、練習問題に取り組む時間や、昨年度の生徒の受賞結果など、活動報告を行う機会としている。

この度の会議の中で、どんな取り組みをすることで活発化を図っているか、考えを共有したい。



図2 農業クラブ総会の様子

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップを図るためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

本校生物科畜産コースでは乳牛だけでなく和牛や豚、鶏や馬など多くの家畜を飼育している。基本的な飼育方法や管理技術について学ぶ中で、重労働による厳しさを感じると同時に動物への愛着や観察から得る気づきなど実際に体験することでしか得られない喜びも感じている。メリットの提示ややりがいをつたえながら交流を通じたアピールも効果的であると考えている。また、生物科園芸コースには植物工場にて葉菜類栽培に取り組んでおり、その取り組みやすさから経験のない方へも農業の間口の広さをアピールできるのではないかと考えている。

他校での取り組みについて知り、今後に生きる視点を得たい。



図3 第37回鳥取県ブラックアンドホワイトショウの様子

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立真庭高等学校
食農生産科 3年 前田 ひなみ

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

現状 これまでに地域でのマルシェ等に参加しハーバリウムやレジンクラフト、多肉植物の寄せ植えなどのワークショップを実施。文化祭でもワークショップを行い、幅広い年齢層の方が参加・体験できた。また、地元の遊休農地を活用した草花の植栽を地域の高齢者で行ったり、地元の異校種、高校と植栽・クラフトなどで出前授業や交流を行っている。

問題点 テント、椅子、物品などの輸送が必要。クラス全体など授業単位での参加は難しいため役員や有志生徒が固定化される。消耗品購入のため予算が必要な内容が多い。

対策 輸送については先生の車や学校の車両で対応。ドライフラワーの準備など全体で行い、科全体で取り組む意識を持つ。適正な価格を考え参加してする人が参加しやすいようにする。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

現状 各校の代表生徒は県連盟の行事で交流が盛んにあり、幹部講習会では役員を中心に多くの生徒と交流が深められている。真庭高校では各競技の参加や役員の立候補は積極的である。役員など代表の生徒は楽しみながら責任感を持って校内行事や各種発表・競技に取り組んでいる。農ク主体での活動は競技・発表会以外には取り組めていない

問題点 校内クラブ員同士の交流や連携する行事が少ない。農業科の生徒であるが農業について興味がない人が多く競技に参加する人が固定化されている。他校生徒と交流する機会は設けられているが少ないように感じる。意見発表など全員で取り組むものに消極的な生徒が多い。

対策 先生と相談して校内クラブ員全体でできる行事ができないか相談する。校外での行事の準備をクラブ員全体で取り組めないか検討する。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

現状 授業の中でも就農者を増やすための取組を考える時間が設けられているが授業や実習の中でしか農業に触れていない。真庭市内でも高齢化が進んでいるが法人化したり組合やグループで農業に取り組んでいるケースもある。少子高齢化が特に進んでいる地域で農家の戸数自体が減少している。

問題点 慣行型農業では化学肥料や農薬の多用により土壌や水への負荷が大きい。スマート農業導入には高価な農業機械や施設の導入費やそれらの使用に必要な資格取得の費用など金銭面での課題。授業の中で考える活動は行っているが実行には移せていない。重労働や収入の不安定さなど農業のイメージが悪い。燃料費や資材費、飼料費などの高騰があっても価格へ反映しにくい。消費者は安価な農産物を求める傾向にある。

対策 学校で持続型農業を実践し買いに来た人に持続型農業のメリットを広める。金銭面での課題を緩和するための国や自治体などのサポートがあることを農業高校も広める。授業の中で考えた就農者を増やす取り組みを文化祭や学習発表会など学校外へPRできる行事の中で広報する。自分たちと同世代やさらに若い世代へアピールするために農業での取り組みを中学校や小学校、こども園などで交流学习を行う。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立唐津南高等学校

食品流通科 3年 坂本 柊弥

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、日本三大松原の一つである虹ノ松原の保全活動に取り組み、白砂青松の景観を取り戻すための研究と実践を続けている。景観保全を目的とした清掃活動を中心に行っており、農業クラブ員はそのボランティア活動の企画・運営を担っている。活動には、子どもから高齢者まで幅広い世代の地域住民が参加しており、清掃活動が地域の人々の交流の場となっている。また、参加者が虹ノ松原の歴史や自然環境について理解を深める機会にもなっており、地域への興味・関心の向上につながっている。世代を超えた協力やコミュニケーションが生まれることで地域住民同士のつながりが強まり、地域コミュニティの活性化にも貢献していると感じている。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に活動するためには、まず農業クラブの活動内容や目的を理解することが大切である。本校では、校内販売会や文化祭への参加を通して農業クラブ活動の魅力を知る機会を設けている。販売会では農産物や加工品の販売、文化祭では活動展示や体験コーナーの運営を行い、クラブ員全員が役割を持って参加している。

これらの活動では、来場者から感謝や激励の言葉を直接受け取ることができ、生徒の達成感ややりがいにつながっている。また、農業クラブの意義や魅力を再認識する機会となり、活動への意欲向上にもつながっている。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者が減少している中で、農業のイメージアップを図るためには、農業の魅力や将来性を積極的に発信することが重要である。

①お祭り（地域行事）を活用した農業の魅力発信

地域のお祭りで農産物の販売や地域のイベントで農業体験、料理教室などを実施することで、普段農業と関わる機会が少ない人にも農業の大切さや楽しさを伝えることができる。また、SNSや動画配信を活用して活動の様子を発信することで、より多くの人へ魅力を届けることが可能と考える。



写真 I 料理教室の様子

②スマート農業を活用した農業の魅力発信

スマート農業機器や農業用ロボットの展示会を開催し、ICTやAIを活用した先進的な農業の姿を紹介することも効果的と考える。農業が「きつい仕事」というイメージだけではなく、時代とともに技術が進む魅力ある産業であることを知ってもらえる。

地域行事や最新技術を活用した情報発信を通して農業への関心を高め、将来の担い手確保につなげていきたい。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 沖縄県立中部農林高等学校

熱帯資源科 2年 玉城 虎勇

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では年に4回ほど、小規模な生産物即売会「中農市」を開催している。しかし平日開催が主であるため、来校者の年齢層に偏りがあるのが現状である。その対策として、近隣のファーマーズマーケットや地域イベントに出店ブースを設け、幅広い客層と交流する機会を増やしたい。また、校内での即売会を休日開催に切り替えることで、平日仕事や学校がある方々も参加しやすくなるを考える。さらに、単なる販売にとどまらず、校内で飼育する動物や植物を活用した体験型イベントを併設することも効果的だと考える。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブの執行部役員は行事の運営や研修会などを通じて主体的に活動しているが、一般クラブ員は各種大会以外に直接関わる機会が少なく、積極性を発揮しにくい状況にある。そのため、全クラブ員が気軽に楽しめてワクワク感を実感できるイベントの企画が必要である。具体的には、各クラスの農ク委員と連携し、全学科が参加できる「校内農業クイズ大会」を提案する。学科ごとに出题を担当し、難易度や範囲を統一して運営することで、学科を超えた交流が生まれ、農業への関心も高まるはずだ。加えて、通常の農場実習とは別に、放課後や休日の農場管理を手伝った際に収穫物の一部を還元する仕組みを作ることも、参加意欲（モチベーション）の向上につながると考える。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業は屋外での重労働が多く、寒暖差などの環境面から「きつい」というイメージを持たれやすい。このネガティブな印象は、本校生徒の間にも少なからず定着していると感じる。この状況を改善するため、イラストが得意な生徒と協力して「校内公式イメージキャラクター」を作成することを提案したい。完成したキャラクターを行事や掲示物、広報で積極的に活用することで、自分たちの農業学習への愛着が深まる。その結果、卒業後も生徒自身が良い思い出や誇りを持って、周囲へ農業の魅力を発信できるようになると期待できる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立八日市南高等学校

食品科 3年 北川 莉愛

食品科 3年 河村 奏歩

花緑デザイン科 3年 鳩 楓駕

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人が参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私は、実際に野菜や草花を育て、収穫できる体験を開くことを提案します。

なぜこの提案をしたかという、議題の通り、老若男女全員が楽しめると思ったからです。実際に私が幼稚園児の頃、体験学習として高校で芋ほり体験をしたことがあるのですが、とても楽しかった記憶があり、小さい子でも楽しんでもらえるのではないかと思います。もちろん、大人も参加できますし、収穫の様子を見守ったり、そのあとで一緒に調理をしたり、食べたりすることができれば、さらに交流が広がると考えます。

私は、ニュースやインターネットを始めとする SNS で見るだけでは分からないことが、農業にはたくさんあると考えています。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためには、実際に農業を体験し、農業を知ってもらうことが大切だと考えます。なぜかという、口頭の授業のみでは農業の楽しさや魅力が伝わりづらく、「面倒くさそう」「大変そう」といった先入観のみで終わってしまうことも少なくないと思ったからです。実際に体験することで、実物を見て触れられる素晴らしさを体感することができます。

農業クラブ員全員ができる活動として、私は草花を用いて住宅街を華やかにする活動が良いのではないかと考えます。例えば、プランターに草花を植え、住宅街の空きスペースに配置するといったことです。なぜこのような活動を考えたかという、草花を配置することで、住宅街に彩りが増え、街が華やかに見えたり、季節を感じたりすることができるからです。さらに、街が華やかに見えることで、景観が良くなったり、人口や観光客が増える一助になったり、地域の発展にも繋がると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

私が農業のイメージアップに効果的だと考えることは、実際に今農業に従事されている方にインタビューのような形で農業のやりがいや魅力を語っていただき、その様子を SNS で発信することです。私たち農業クラブ員の経験を伝えることも大事ですが、実際に働かれている方のお話は、気持ちや説得力が段違いだと考えるからです。SNS だけでなく、出前授業のような形式もできれば、参加者が質問をする機会もできて良いと思います。

また、これまで農業に触れてこなかった人達に、実際に農業を体験してもらうことも効果的だと考えます。経験談を聞いているだけでは伝わりづらいことも、実際に体験することで農業の魅力が伝わりやすくなると考えたからです。農業は、作物・野菜・草花・果樹などの栽培だけでなく、畜産業もあります。家畜には、牛や豚、鶏などいます。自分が興味のある分野の体験ができれば、さらに魅力が伝わりやすくなると考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック連盟 愛媛県立西条農業高等学校

食農科学科 3年 石川 いろは

食農科学科 3年 宇野 真織

生活デザイン科 3年 西坂 聖愛

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

学校全体の活動

全国有数の規模を誇る「西条まつり」に毎年多くの生徒が参加し、地域の方々と一緒に汗を流し、熱く交流しながらお祭りを盛り上げている。

食農科学科の活動

企業と協力した販売イベントや、毎年4月に地域の皆さんが楽しみにしている「野菜苗販売」を行って、食と農を通じた交流を深めている。

環境工学科の活動

放置竹林の竹を活用した「竹灯ろう」の制作や環境学習会を実施している。また、地域の方と協力しながら「千町棚田」の保全活動など、地域の自然を守り継ぐ活動にも力を入れている。

生活デザイン科の活動

年に4回「高校生レストラン」をオープンし、地元食材を使った手作りメニューを振る舞って地域の憩いの場を作っている。さらに、食生活改善の講話や郷土料理教室なども開催している。



2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

3学科の特色を掛け合わせた「全員参加型イベント」を実施したい。

例えば、環境工学科が会場の装飾を作り、食農科学科が野菜を育てて販売し、生活デザイン科が農作物を使ったメニューを提供するなど、それぞれの学科の得意分野を生かしてコラボレーションすることで、全員が自分の役割を持ち、楽しみながら参加できる活動を作りたい。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージアップには、「SNSの発信」と「リアルな体験」の掛け合わせが大切

本校のInstagramで私たちが楽しく実習する姿を発信し、同世代に興味を持ってもらう。また、地域の幼稚園、小・中学生を招いた「農業体験」の場を作り、一緒に土に触れ、収穫の喜びを直接共有することで、画面越しでは伝わらない本当の魅力を伝えるのがいいと思う。SNSで興味を引き、実際の体験で心をつかむ。私たち農業高校生が架け橋となり、地域農業の魅力を楽しく伝えていきたい。

参加者課題レポート

第3分科会 第9会場

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

会場	事例発表校	運営担当校
第9会場	宮崎県立高鍋農業高等学校	香川県立飯山高等学校

第3分科会 第9会場

【一般参加生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
1	茨城県	水戸農業高等学校	畜産科	2	國府田 心瑚
2	群馬県	安中総合学園高等学校	総合学科	3	中重 茶々
3	埼玉県	羽生実業高等学校	園芸科	3	中村 瑞希
4	東京都	園芸高等学校	食品科	2	菊地 慧琉
5	神奈川県	吉田島高等学校	都市農業科	3	佐藤 陸
6	新潟県	新発田農業高等学校	食品科学科	3	山口 友菜
7	長野県	木曽青峰高等学校	森林環境科	3	岸 俊介
8	愛知県	田口高等学校	林業科	2	栗永 瀬奈
9	滋賀県	長浜農業高等学校	食品科	2	藤原 幸帆
10	鳥取県	鳥取湖陵高等学校	食品システム科	2	中田 稔々
11	岡山県	高梁城南高等学校	環境科学科	3	大月 結愛
12	佐賀県	佐賀農業高等学校	環境工学科	3	大鋸 勇仁
13	沖縄県	中部農林高等学校	熱帯資源科	2	比嘉 嬉乃

【事例発表生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
14	宮城県	高鍋農業高等学校	園芸科学科	3	大山 柚紀
15	宮城県	高鍋農業高等学校	畜産科学科	3	松元 音弥
16	宮城県	高鍋農業高等学校	フードビジネス科	3	鶴丸 玄樹

【運営担当生徒】

No.	都道府県	学 校 名	学 科	学 年	参 加 者
17	香川県	飯山高等学校	総合学科	3	山西 純
18	香川県	飯山高等学校	総合学科	3	宮武 紗希
19	香川県	飯山高等学校	総合学科	3	坂下 葵

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

九州ブロック 宮崎県立高鍋農業高等学校

園芸科学科 3年 大山 柚紀

畜産科学科 3年 松元 音弥

フードビジネス科 3年 鶴丸 玄樹

1 はじめに

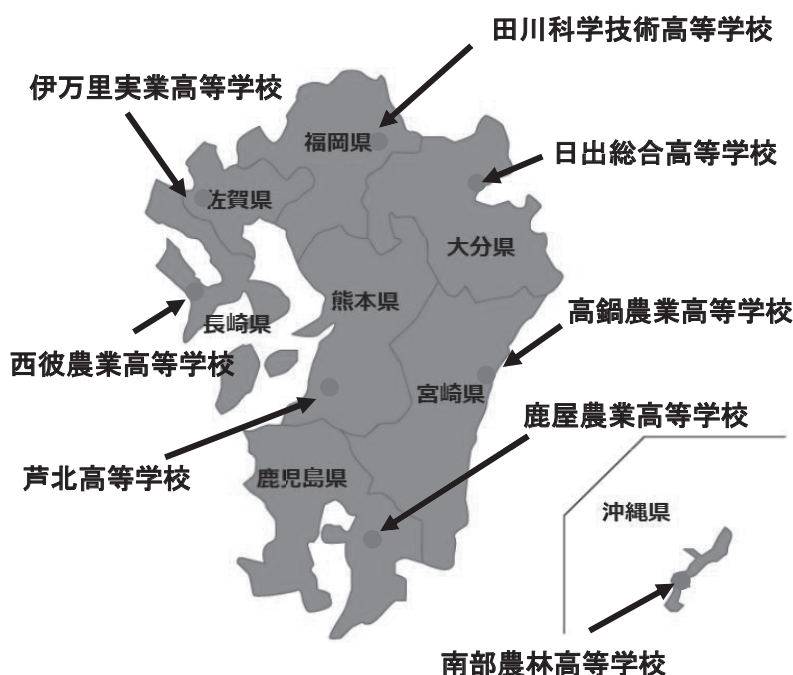
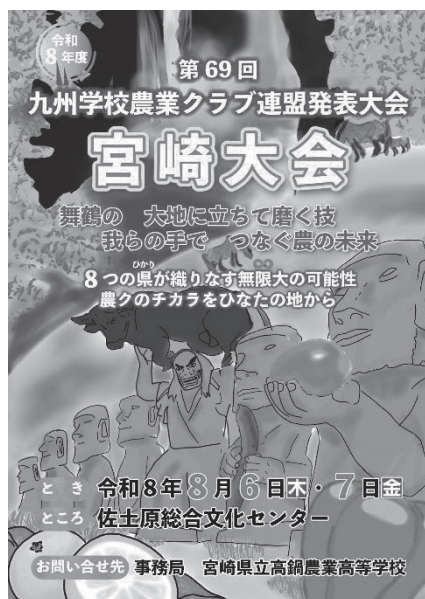
(1) 九州ブロックの紹介

九州学校農業クラブ連盟は、昭和33年10月に熊本県と沖縄県を除く九州6県で「九州ブロック予選会」を開催し、歴史が始まりました。その後、昭和34年に熊本県、昭和47年には本土復帰を果たした沖縄県が加入し、現在の8県におよぶ大きな連盟となりました。

今年度の各県連事務局校は、宮崎県立高鍋農業高等学校、沖縄県立南部農林高等学校、福岡県立田川科学技術高等学校、長崎県立西彼農業高等学校、佐賀県立伊万里実業高等学校、熊本県立芦北高等学校、鹿児島県立鹿屋農業高等学校、大分県立日出総合高等学校です。

現在、各県のクラブ会員数は、宮崎県 1,555 名、沖縄県 2,072 名、福岡県 2,221 名、長崎県 1,444 名、佐賀県 1,140 名、熊本県 2,545 名、鹿児島県 1,640 名、大分県 759 名となり、合計 12,800 名の仲間が活動しています。

全国的に見ても大きな規模を誇る九州ブロックですが、昨年度と比較すると 75 名減少しており、近年は会員数の減少傾向が続いています。しかし、このような課題に直面しているからこそ、私たちは「九州はひとつ」という言葉を胸に、互いに高め合いながら日々の農業クラブ活動に取り組んでいます。九州のクラブ員が一致団結し、日本の農業の未来を担う大きな希望となって成長していくこと、それが私たち九州連盟の目指す姿です。



（２）本年度 九州学校農業クラブ連盟事務局校「宮崎県立高鍋農業高等学校」の紹介

本校がある宮崎県高鍋町は、県の沿岸部ほぼ中央に位置し、豊かな歴史や文化遺産が多く残る町です。県内で最も面積が小さい町ですが、豊かな宮崎平野の北部にあり、九州有数のキャベツ生産地でもあります。また、特産品の一つである餃子を活用した“餃子の町、高鍋町”として町ぐるみで地域活性化に取り組んでいます。さらに、2025年には「SDGs 未来都市」に選定され、持続可能なまちづくりを地域全体で推進している点も大きな特徴です。



本校は1900年（明治33年）に創立され、今年度で123年目を迎えた歴史と伝統のある農業高校です。校舎は舞鶴城跡にあり、お堀や大手門跡などの史跡と豊かな緑に囲まれた、とても素晴らしい環境の中で学んでいます。設置学科は**園芸科学科・畜産科学科・食品科学科・フードビジネス科**の4学科です。このうち、将来の農業経営者育成を目指す園芸科学科と畜産科学科の生徒は、3年間の寮生活を通して仲間とともに切磋琢磨しています。

本校では、私たち農業高校生が楽しく学び、生き生きと実習に励む姿こそが、農業のイメージをポジティブに変える一番のきっかけになると考え、学科の特色を活かした地域連携の取り組みを学校全体で進めています。

- **園芸科学科**：地元の小学生を対象とした「花育」活動を通じ、植物を育てる喜びを伝えています。
- **畜産科学科**：宮崎大学や地元企業と連携した先進的な課題研究に取り組んでいます。
- **食品科学科**：令和5年度から宮崎県立農業大学校と連携し、お互いの酪農部門を生かした手作りチーズやヨーグルトを販売する「ミルクフェス」を毎年、秋に開催しています。
- **フードビジネス科**：令和7年度から高鍋駅の「月市」に参加し、地域の高校生や生産者、事業者の方々と共に街の賑わいを創出しています。

このように各学科がそれぞれの強みを生かし、農業の魅力を発信するために日々努力を重ねています。



2 九州学校農業クラブ連盟リーダー研修会 分科会協議報告

【研修会概要】

7月22日(水)～24日(金)の2泊3日、宮崎県青島青少年自然の家において「第60回九州学校農業クラブ連盟リーダー研修会」が開催されました。初日の交流会・事例発表から始まり、各分科会に分かれて熱心な協議を行いました。2日目には協議をさらに深めてまとめを行い、最終日には、その成果を全体発表として共有しました。



テーマ：「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか」

(1) 実態

分科会での協議を進める中で、私たちを取り巻く現状として以下の実態が浮き彫りとなりました。

1. **ネガティブなイメージの残存** 特に若い世代を中心に、農業に対して「きつい」「稼げない」「休みがない」といった先入観やネガティブなイメージが根強く残っています。ワークライフバランスが重視される現代において、この固定観念が大きな障壁となっています。
2. **魅力・情報の絶対的な発信不足** 農業という産業や職業自体の本来の魅力、そして現場のリアルでポジティブな情報が世の中に十分に届いていません。
3. **地域交流の減少と偏った情報接触** 地域住民と直接交流する機会が少なく、ポジティブな取り組みよりも、メディア等によるネガティブな報道に触れる機会が多いのが現状です。
4. **地域特有の深刻な課題** 沖縄県をはじめとする離島地域では、若い世代の人口減少が特に著しく、農業の担い手不足がより深刻な問題となっています。



(2) 問題点

上記の実態を踏まえ、私たちは「なぜ魅力を伝えきれていないのか」という問題点を深掘りしました。

● 発信力の不足と質の課題

現在、多くの農業高校やクラブ員が SNS を活用して活動を発信しています。しかし、その多くが単なる「作業体験の紹介」にとどまっており、「農業の本質的な魅力」や「やりがい」といった深い部分まで伝えきれていないことが大きな問題点です。



- **体験機会の規模と限界**

地域や学校で農業体験イベントや農業祭を開催していますが、規模が小さく、参加者が農業の本当の魅力を実感する機会としてはまだ十分ではありません。

- **社会・環境の変化への対応遅れ**

地球温暖化をはじめとする環境の変化、さらには人々の働き方やライフスタイルの変化に対し、農業の魅力をどのように適合させて発信していくかという課題に対応しきれいていません。

(3) 問題解決のための具体的な取り組み

これらの問題点を解決し、農業のイメージアップを図るため、分科会では以下の3つの具体的な取り組みを提案・協議しました。

① 高校生主体のポジティブな発信

小中学生を対象とした体験学習の企画・実施について考えました。私たち農業高校生が生き生きと楽しく実習に励み、誇りを持って学ぶ姿を直接見せることで、次世代へ農業への親しみやすさと「やりがい」を直感的に伝えることができると思います。高校生自身の熱意こそが、最も説得力のある発信となります。

② 実際の「プロの魅力」の発信

地域で経営に成功し、生き生きと働いている農家の方々から直接「農業の魅力やビジネスとしての強み」を学ぶことについて考えました。そして、そのリアルな声や実績を私たちの視点でSNS等を活用して発信し、現実的で魅力ある農業の姿を世の中に伝えたらよいと考えました。

③ 地域密着型イベントの展開

学校内にとどまらず、地域と密接に連携した体験型イベントを企画・プロデュースしたらと考えました。より多くの人々が日常の中で農業や農作物と触れ合い、その価値を直接実感できる機会を増やす取り組みを広げることが有効だと考えました。

(4) まとめ

今回の分科会協議を通じて、農業のイメージアップを図るためには、**SNSの積極的な活用が必要不可欠である**という意見で一致しました。特に、同世代である中高生をターゲットとし、各農業高校の特色ある魅力や日々の活動内容を分かりやすく発信していくことが重要です。

また、画面上の情報発信だけでなく、実際に土や動物に触れる**体験型農業**を通じ、良いイメージを実感してもらう取り組みを組み合わせることが求められます。そして、これらの取り組みは一朝一夕で解決できるものではないため、**継続して挑戦し続ける**ことが何より大切です。

3 おわりに

今回の研修をとおして、農業従事者の減少という深刻な課題に対し、私たちは現状を悲観するのではなく、農業が持つ本来の魅力を時代に適した方法でポジティブに発信していく必要があると感じました。

「かっこいい」「面白そう」「やってみたい」—。農業を学ぶ私たち高校生自身が主役となり、このようなプラスのイメージを地域や社会へ広げ、農業がやりがいと可能性に満ちた素晴らしい産業であるというイメージを創り出していくことを決意し、本報告のまとめとします。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 茨城県立水戸農業高等学校
畜産科 2年 國府田 心瑚

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の人と一緒に農業体験を行ったり、地域の特産品を集めたイベントを開催したりすることで、老若男女問わず地域の人に参加できる交流の機会を増やすことができると思う。幅広い世代が参加できる活動を行い、地域とのつながりを深めていきたい。

【具体例】

- ・田植え・収穫体験
- ・地域の人を巻き込んだ収穫祭

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ全体で目標を決め、一人一人が得意なことを活かせるように役割分担をすることが大切だと思う。農産物の収穫や販売などを全員で協力して行うことで、活動に参加する意欲や協力することの大切さを感じられるようにしたい。

【具体例】

- ・栽培や収穫、農産物の販売、イベントの準備などの分担
- ・イベントの準備

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージアップをするために、SNS を活用して農業の魅力を発信することが大切だと思う。農業の楽しさややりがいを伝え、少しでも農業に対するイメージを変えられるようにしたい。また、農業や食に関するイベントを行い、農業に興味を持つ人を増やしていきたい。

【具体例】

- ・SNS で農作業の様子や収穫した農産物農業クラブの活動などを発信
- ・収穫体験や農産物販売、料理体験などのイベントを行う

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 群馬県立安中総合学園高等学校

総合学科 3年 中重 茶々

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

① 施設見学会

農産物や加工品の販売会だけでなく、バラ園開放などといった販売活動ではない施設見学会を設ける。地域の方に来校してもらうことで、農業高校を身近に感じてもらう機会になる。

② 農業体験会

草花の寄せ植え教室や、農作物の種まき・収穫・加工までができる食農教育の場を設ける。子どもからお年寄りまで幅広い年齢の方に参加してもらうことで、子どもたちの農業への関心を高めたり高齢者の経験や知恵を生かした栽培指導などが期待できる。

③ 地域課題解決ワークショップ

地域の課題について住民と生徒が一緒に考えることで、地域農業の発展が期待できる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためには、各自の意見を出し合い、農業クラブ員として目指す目標を設定することから始める。各自は、その目標に向かってどう取り組むかを考える。そして、活動をしたら報告会をし、実践した成果をお互いに共有して、次につなげていく。

農業クラブ員全員ができる活動としては、授業で取り組んだ学習の成果発表会での役割分担がある。計画を立て、実践して、日々の活動の記録をつける。そして、研究をまとめ、プレゼンテーション原稿を作り、発表をすることである。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業が敬遠される原因を解消することである。そして、農業の魅力を知ってもらうことが重要である。今日では日常生活の色々な場面で機械化が導入されており、農業分野においても自動運転トラクターやドローンを使った農薬散布、自動灌水装置などスマート農業が浸透しつつある。

そこで、農業を学んでいる私たち農業高校生が、小学生に実践を取り入れながらわかりやすく教え、「農業って面白い」と体験させることで、将来、農業をしたいと思う機会を増やすことにつなげる。

今の若い世代の人はSNSを日頃からチェックしてる人が多いので、教えている様子や機械を使った農作業の様子などをSNSに投稿することで、農業の魅力をより多くの人目のとまらせ、農業のイメージアップが達成できると考えられる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 埼玉県立羽生実業高等学校
園芸科 3年 中村 瑞希

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・体験・見学： 播種・収穫体験、田植え・稲刈り、農場開放、搾乳・重機操作体験、花植え
- ・食育・料理： 多世代型子ども食堂、収穫物での料理会・パン作り、地産地消の食事交流
- ・イベント： 収穫祭・マルシェ、農業クイズ・カルタ大会、スポーツ・音楽イベント
- ・学び・交流： 農家講演会、今昔の農法を学ぶ世代間交流、特産品の紹介
- ・地域貢献： 除草・清掃、農作業ボランティア、防災訓練・ハザードマップ作成

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- ・個性の活用： 得意分野別の役割分担、分科会での調べ学習、マルシェプロデュース
- ・探究・SDGs： 実習の課題解決・改善の議論、SDGs 目標と活動の紐付け
- ・広報・発信： 公式 SNS・HP・ポスターでの活動記録と目標の可視化
- ・組織・他校連携： 他校との交流・データ収集、本部と役員の連携強化
- ・実践・楽しさ： 収穫物での調理、クイズ、遊びを取り入れた農作業やボランティア

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- SNS・動画： 作業風景や若手農家のやりがい発信、偏見を払拭する Q&A・インタビュー
- 先端技術・制度： スマート農業や海外技術、雇用就農・補助金制度の紹介
- 次世代教育： 小中学生向け出前授業・講習、早期の農業・自然体験
- 外部連携： 影響力のある人の体験発信、地元企業・飲食店とのコラボ
- 本質・SDGs： 環境配慮農法・食品ロス削減の発信、「命を支える誇り」の周知
- 体験・販売： 直売所での PR、文化祭出店、スイカボウリング等のユニーク企画

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 東京都立園芸高等学校

食品科 2年 菊地 慧琉

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

地域の人が年齢層、性別に関係なく交流できる活動として農業体験や収穫体験、地域の食材を使った料理教室、農業祭などが考えられる。特に農業体験では子供から高齢者まで一緒に作物を育てたり収穫したりすることで自然と会話が生まれ、世代を超えた交流につながる。また、高齢者から昔の農業や郷土料理について教えてもらうことで地域の伝統や知識を次の世代へ受け継ぐこともできる。このように、地域の人それぞれの経験や知識を生かして参加できる活動を増やすことで世代間の交流が深まり、地域全体のつながりを強くすることができる。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が意欲的に活動するためには、一人ひとりが興味をもてる活動を取り入れ、自分の得意なことを生かせる役割をつくることが大切だと考える。例えば、野菜や花を育てる活動、農産物を使った加工品づくり、文化祭などでの販売、地域の清掃活動などがある。また、活動内容をクラブ員同士で話し合っで決めることでより主体的に取り組めると思う。全員が協力して一つのものを作り上げる活動を増やすことで農業への興味や関心を高めるだけでなく、クラブ員同士の交流や協力する力も身につけられると考える。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージアップをするためには、農業の大変さだけではなく楽しさややりがい、魅力を多くの人に知ってもらうことが大切だと考える。例えば、SNS や動画を活用して農作業の様子や作物が成長する過程、農業を通して地域の人と交流する様子などを発信することで、農業を身近に感じてもらうことができる。また、農業体験や収穫体験など実際に農業に触れる機会を増やすことも効果的だと思う。特に若い世代に向けて、農業は「食を支える大切な仕事」であるだけでなく、「自分で作物を育てる楽しさ」や「地域に貢献できる仕事」であることを伝えることで農業に対する興味や関心を高め、将来農業に関わりたいと思う人を増やすことにつながると考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

関東ブロック 神奈川県立吉田島高等学校
都市農業科 3年 佐藤 陸

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

【体験交流】

- ・野菜の栽培・収穫体験寄せ植え体験 ・農産物を活用した調理・製造体験
- ・花や動物とのふれあい ・フラワーアレンジメント体験

【広報活動】

- ・SNSを活用した若い世代への情報発信・参加の呼びかけ
- ・幼稚園や小学校での農業に関する説明や体験学習

野菜の栽培から収穫、さらに収穫した農産物を活用した調理・加工までを一連の流れとして体験することで、地域住民との交流を深めるとともに、農業への理解を深めることが重要だと考えました。また、その活動の様子をSNSで発信することで、幅広い世代へ情報を届けることができます。さらに、幼稚園や小学校で農業体験の機会を設けることで、子どもたちが農業に興味・関心を持つきっかけづくりにつながると考えられました。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

私たちの世代は、目を引くものに反応しやすい傾向があります。いわゆる「映える」「バズる」といった要素がなければ、興味を持ちにくいこともあります。そのため、SNSの公式アカウントを活用し、活動内容を積極的に発信していくことが効果的だと考えました。しかし、そのための動画やポスターの制作には時間や技術が必要です。そこで、AIを活用することで、誰でも目を引くスライドや動画、ポスターを作成できるようになると考えました。また、その運用方法を仲間や後輩へ継承していきたいと思います。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

【農業を身近に感じてもらう】

- ・世間では農業に対するイメージが悪く「きつい」「汚い」そんなマイナスイメージ払拭のためスマート農業をアピールしたいと考えています。

農業を身近に感じてもらうためには、まず世間で持たれている農業のイメージを変える必要があります。現在、農業には「きつい」「汚い」といったマイナスイメージがあります。そのイメージを払拭するために、スマート農業の取り組みを積極的にアピールしたいと考えています。例えば、ドローンによる農薬や肥料の散布、AIによる生育状況の管理、センサーを活用した温度・湿度・土壌水分の管理などがあります。これらの例からも、一般的な農業のイメージと実際の農業には認識の違いがあることが分かります。このように、「農業＝昔ながらの仕事」ではなく、「農業＝最先端技術を活用する未来の仕事」というイメージを発信していくことが重要だと考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 新潟県立新発田農業高等学校
食品科学科 3年 山口 友菜

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

農業体験イベントが一つであると考える。

農作物を一から栽培し、収穫まで体験できるイベントを開けば、老若男女が参加できるのではと考えた。

苗を定植する場合は、苗作りに使用する土作りから体験してもらえればどのように苗ができるのかということも知れるので良いと思った。

実際に本校でも保育園児や高齢者との農業体験活動を毎年行っている。その時の参加者からの感想の中にも農業への楽しさを感じられるような意見や農業は色々な世代の方とコミュニケーションをとれる良い機会だとの意見があったことから農業は交流活動における大きなポイントの一つではと考えた。

このような体験であれば農業の大変さと楽しさを知ることができて良いのではと考えた。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全員ができる活動は農産物の販売だと考えた。販売時に、買って頂いた人から農産物への良かった点や改善点をもらい、その意見を元に改良しようとするとき農作物の栽培や食品製造に関心をむけるのではないかと考える。

また、改良する以外にも意見をもらう中で褒められてさらに生産・加工に力を入れて取り組もうと意欲的になる。農産物の販売が困難な分野を専攻している場合でも自分と違う農業高校の同じ専攻の人同士での意見交換を行うことで同一の効果が狙えたと考えた。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者の確保について若者の農業への意識改革が重要であると考える。

そのために、

- 農業はワークライフバランスを保ちやすいこと
- 作物（商品）に付加価値をつけることができる魅力があること
- IT化やAIを使った農作業の省力化が見込めること
- カッコイイ農業・・・デザイン性の高い作業服の考案
- 農家になりたいと思えるようなロールモデルを増やす
- 若い農業従事者が発信することで親しみ、憧れにつながる
- 農業体験を増やす（子ども向けイベントなど）→ 実際の体験で楽しさを知ってもらう

これらについてSNSや雑誌等を通じて発信することで様々な若者の目にとまり、農業の魅力を伝えることができると考えている。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

北信越ブロック 長野県木曽青峰高等学校

森林環境科 3年 岸 俊介

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では毎年12月に地域の方々と木曽地域の伝統食である「すんき」作りを行っております。この活動を通して地域の方々からは、高校生が伝統食に関心を持つとても良い機会であり、素晴らしい活動だといった、ご意見をいただくこともあります。また、こういった伝統食づくりでは、年配の方が若い世代に伝統を継承することができる数少ない機会であり、年代を問わず参加することができる数少ない活動だと考えられます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

農業クラブ員全員が参加できる活動としては、物販販売や活動発表等を通してイベントに参加し他校の生徒と交流することだと思います。本校では昨年より全国募集を開始しておりその活動の一環で東京・大阪の交流イベントに参加しております。そのイベントでは農業クラブの生徒が作成した木曽絵のベンチやコースターなどを全国の中学生及び保護者の方々に触れていただき、本校のPRなどを行っております。また、このイベントは他校の生徒たちの活動について知る機会にもなっており、自分たちでは考えつかないような他校の素晴らしい活動を知ることができます。

そして、こういった全国の学生の活動を知ることによって今まで気づくことのなかった新しい発見や、自分たちの活動の素晴らしさを再認識することができました。

その結果、農業クラブの活動に対して興味・関心を持つことができ、活動への意欲向上につながっていると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのような魅力を発信していくべきか。」

農業のイメージをアップさせるためには、「きつい」・「きたない」といったマイナスなイメージを払しょくする情報を発信していくことが重要だと考えます。近年では、酷暑の中の収穫を農家の代わりに機械が自動で収穫をしたり、今までは重い機材を背負いながら散布していた作業をドローンなどの無人航空機が肩代わりしていたりと農業のICT化が進んでいます。

そういった今まで人がやっていた「きつい」・「きたない」といったイメージが付いていた作業環境の改善が進んでいることを多くの人たちに知ってもらい、今まで農業が抱えていたマイナスなイメージを払しょくすることによって農業のイメージアップにつながるのではないかと考えます。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

東海ブロック 愛知県立田口高等学校

林業科 2年 栗永 瀬奈

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校は愛知県北設楽郡の中学校と連携型中高一貫教育を実施している。その活動の一環で文化祭に参加する中学生へ、販売実習などを通して林業科の魅力を発信している。中学生にとって面識のある先輩の姿をみることは、農業高校で身につけられる知識や技術を知る絶好の機会であると共に入学後の自分を想像する場となっている。地域の方と、12月に行う門松講習会を通して交流を行っている。講習会で使用する草花や木箱は実習で製作したものを使用し、本校の活動を紹介している。



2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校は林業科と普通科があり、林業科では2つの専攻に分かれてプロジェクト活動を進めている。それぞれの専攻が地域の課題を解決する方策を考え、実践している。地域が抱える課題は各授業で話を聞いているが、地域で暮らす方々の話を聞く機会は少ない。そのため、役場や地域のために尽力されている方と繋がり、課題の聞き取りや解決に向けた様々な活動に御協力いただいている。

農業クラブ役員が中心となって、農業鑑定競技会の勉強会を開催している。学校全体で農業鑑定競技会に取り組む体勢へと変えることができた。その結果、県大会では7年連続で分野森林において最優秀を獲得し続けている。また、1年生の農業クラブ活動への関心を高めることができた。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

本校は、自然豊かな山間部に位置し、自然環境を生かした学習や実習を行っている。また、地域とのつながりを大切にし、地域の方々と関わる機会が多くあり、農業・林業の魅力を身近に感じることができる。しかし、一般的には「農業・林業は大変」などといった印象を持っている人が多い。仕事内容や魅力が十分に伝わっていないことが従事者の減少が進む1つの要因であると考えられる。

農業・林業のイメージアップを図るためには、農産物だけではなく、それらができるまでの工夫や過程、生産者の思いを発信していくことが重要であると考えた。そこで、栽培しているサツマイモを地元の保育園児に芋ほり体験をさせながら、楽しい農業に繋げている。

また、学校のInstagramを使って演習林で楽しく実習を行っている写真などを発信することで、3Kのイメージが強い林業のイメージアップをできるような情報発信を行っている。



クラブ員代表者会議 参加者レポート

近畿ブロック 滋賀県立長浜農業高等学校
食品科 2年 藤原 幸帆

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

私たちは花や野菜の苗を配布したり、植栽のボランティア活動を行ったりするのが良いと考えました。農業クラブで育てた季節の花や野菜を近くの商店街や福祉施設などに届け、地域の方々と一緒に植栽活動を行うことで、地域の方と交流するだけでなく、街の美化にも貢献できると考えます。

また、私たちが農業学習を通して培った押し花の作成やクッキーづくりなどを、地域の小中学生を対象に講座を準備して発信し、農業体験で学びながら楽しんでもらえるワークショップなども良いと考えます。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員全員で活動内容を募集する。自分たちの意見が反映されることで参加意識や主体性が高まると考えています。

全員で取り組む活動だけでは、一部の部員に負担が集中したり、受け身になってしまう部員が生まれたりする可能性があります。3～4人程度の少数チームをつくり、チームごとに仕事やイベント企画を担当し、一人一人の責任感を持たすことができると考えました。販売会の際にクイズの企画などを設け、それに成功した場合の景品をチームごとに考える活動を行うことが良いと考えます。

また、日々の活動の成果をこまめに報告（共有）することが大切だと考えます。農業クラブ執行部員の中では、ルールを決めてSNSを活用し、各担当者が「どのようなことを行ったか」を共有することが大切だと考えます。校内の農業クラブ員にも同様にSNSを活用することや、月1回の活動報告新聞等を作成し、農業クラブの活動を知ってもらおうと同時に、自分達の活動のまとめや、改善点を生み出すきっかけにもなると考えています。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

小中学生を対象に収穫体験を実施します。学校の農場を活用し、地域の親子が参加できる農業体験の企画を計画し、野菜や果物の収穫を体験してもらいます。私たち自身が育て方や収穫の方法のコツを教えることで参加した人に農業の魅力がより伝わると考えます。また同時に私たち自身の指導力も鍛えられます。

日々の活動を、SNSを通して、幅広い世代の人に見てもらうことが大切です。特に農業には魅力があることを知ってもらうために表現方法にも工夫が必要だと考えます。具体的には、種まきから収穫までの一連の流れを時系列で表現し、成長の過程を確認することで、農業の魅力が伝わると考えています。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 鳥取県立鳥取湖陵高等学校
食品システム科 2年 中田 稔々

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- ・近隣の園児・小学生とのパンづくり・ケーキづくり体験や園芸交流を主催。本校生徒が指導者として交流活動を実施している。
- ・近隣公民館主催のみそづくり教室を本校で開催し、主婦や高齢者が参加。参加者と本校生徒が共同でみそづくりを実施している。
- ・鳥取市文化財課主催で「鳥取城跡大手門」の門松づくりをしており、地元の若手造園従事者と共同で門松を制作している。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

積極的に活動せずに先生の指示されたことしかないクラブ員が多く、役員の負担が大きいのが現状である。そこで、少しでも農業クラブ活動に興味・関心を持ってもらうために、校内プロジェクト発表会および校内意見発表会で、発表終了後の審査会の時間に過去の全国大会最優秀受賞者の動画を視聴している。また、今年度は本校が中国ブロック連盟の事務局であったため、全クラブ員が中国ブロック連盟の運営および聴衆として参加し、他校の農業クラブの取り組みを知るよい機会となった。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業を学んでいる私たちクラブ員でさえ、「大変、力仕事、もうからない、天候に左右される…」といったマイナスのイメージを持っている人が多い。しかし、そのマイナスのイメージは実習を積み重ねてきた3年生になると少なくなり、「楽しい、人の役に立っているという実感がある…」といったプラスのイメージを持つ人が多くなっていく。このことから、単発の体験活動ではなく継続的な体験活動を企画して、農業の魅力を実感してもらう取り組みをしてはどうかと思う。

農業の魅力を伝えるには時間がかかるため、落ち着いて時間をかけて丁寧に情報を伝えることができるチラシや新聞、回覧板などのアナログ的な情報発信も必要でないかと考える。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

中国ブロック 岡山県立高梁城南高等学校

環境科学科 3年 大月 結愛

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

現状 本校周辺には多くの高齢者が居住しており、学校との日常的な接点も多くある。3学科（環境科学科・デザイン科・電気科）ともに、毎年授業や地域イベントで様々な交流（田植え体験・収穫体験・ワークショップ・販売実習・専門科に関する講座・生態調査・花の寄せ植え、花壇の植栽交流）を行っている。



問題点 決まった団体や地域住民の参加が多くなっている。交流経験の少ない地域住民にとっては、学校が「何をしているのか見えにくい場所」になっている可能性がある。

（写真）干潟の生態調査

対策 学校に地域の婦人会や老人会の方々をお呼びして諸先輩方の伝統技術継承会（地域の農業について教わる等）や、短時間でも参加可能なワークショップを開催して広報する。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

現状 農業クラブ活動への積極的な参加が自身の成長に繋がるという実感が持てている生徒とそうでない生徒がいる。

問題点 農業に関するネガティブなイメージや科の男女比率なども影響してか、2年生で行われるコース選択（農業系 or 家庭科系）でも例年、家庭科系の志望生徒が多い傾向にある。

対策 新入生に農業クラブの活動内容や魅力について、今まで以上に周知する。（今年も校内役員総会でクラブ役員が農業クラブについてスライドを用いて説明した。）

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

現状 最近 SNS による発信を積極的に行う農業従事者が増え、関連する内容の投稿を目にすることが増えたように感じる。

問題点 汚いや大変などの悪いイメージや生産業ゆえの収入の不安定さ、大型機械が必要な場合は新規参入が難しいなどの課題がある。

対策 農業に関するショート動画やポップを公開することで「関心の入り口」を作りつつ、そこから実際の「農業体験」へと繋げる動線を構築する。デジタルで興味を持った層に対し、五感を使う実体験を提供することで、情報の裏付けとなる感動や発見を直接届け、見るだけでは得られない農業へのポジティブな印象を強く定着させる。（農業の魅力紹介や農業関連のイベントの内容、やり方次第で稼ぐことができるといった内容）

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 佐賀県立佐賀農業高等学校

環境工学科 3年 大鋸 勇仁

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では、地域の方々との交流を大切にしています。地元の道の駅では、高校生がケーキを販売する「サノ・ボヌール」を行ったり、地元商店街では、生徒が作った農産物などを販売する「サノマルシェ」を行ったりしています。また、地元の保育園児や小学生を本校に招いて、田植えや稲刈りなどの農業体験や、動物とのふれあい体験も行っています。各学科で学んでいることを生かして、子どもたちに農業や動物について知ってもらおうとともに、私たち生徒も子どもたちとの交流を楽しんでいます。このように、本校では子どもから高齢者まで、幅広い年代の方々と交流する活動を行っています。

今後は、農業クラブが中心となって、販売や体験活動など、地域の方々と交流できる機会をさらに増やしていきたいです。また、単に地域の方を学校に招くだけでなく、地域の方々と一緒に活動内容を考えたり、企画や運営をしたりすることで、より多くの方に参加してもらえる活動にしていきたいです。そして、地域の方々とのつながりを深めながら、農業クラブの活動の輪をさらに広げていきたいと思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

現在、クラブ員としての自覚が十分になく、農業クラブの活動に興味・関心を持ち、意欲的に取り組んでいる生徒が少ないことが課題となっています。

そこで、佐賀県内にある農業高校が、日頃の実習で栽培・製造している農産物や加工品を販売するイベントや、農業に関する体験型イベントを共同で企画・開催してはどうかと考えます。学校の垣根を越えて、生徒同士が協力しながら一つのイベントをつくり上げることで、普段とは異なる交流や新たな刺激が生まれ、農業クラブ員としての自覚や活動への興味・関心、意欲を高めることができると思います。また、各学校の特色や取り組みを知る機会にもなり、学校間の交流を深めることにもつながると考えます。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業には「きつい」「汚い」「儲からない」など、マイナスなイメージを持っている若い世代が多いと思います。しかし現在では、ドローンや自動走行トラクターなどのスマート農業が普及し、「楽しそう」「やりがいがある」と感じる人も増えていると聞きます。

私たちも農業を学ぶ高校生として、農業のイメージアップをするために、実習や農業体験を通して感じた農業の魅力を本校の SNS や地域イベントなどで発信したいです。また、私たちが先生役となって農業体験会を実施し、農業の楽しさや魅力を実際に体験してもらいたいです。

こうした活動を通して、農業に対するイメージを少しでも良くしていきたいです。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 沖縄県立中部農林高等学校

熱帯資源科 2年 比嘉 嬉乃

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

本校では年に1回、農業祭や生産物即売会を開催している。しかし、情報発信が公式ホームページや保護者向け連絡にとどまっているため、来校者の層に限られているのが現状である。その解決策として、ラジオやテレビのほか、インスタグラムをはじめとするSNSを活用した情報発信を取り入れることが有効だと考える。これにより、これまで農業高校に馴染みのなかった幅広い層への認知・集客が期待できる。さらに、多世代が参加しやすいよう休日開催の行事を拡充し、近隣の小中学生を対象とした野菜の収穫体験や製パン実習など、体験型イベントを企画することも効果的だと考える。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。」

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

本校の農業クラブ役員は各種大会への出場やイベント運営の機会が多く、主体的に活動している。一方で、一般クラブ員は各活動に触れる機会が少なく、関心や意欲が高まりにくい状況にある。この課題に対し、農業祭後に後夜祭を開催し、互いの努力をねぎらう場やレクリエーション要素を取り入れることを提案したい。そうする事で、全員の参加意欲を高めるきっかけになると考える。また、学科対抗で売上を競う仕組みや、近隣のファーマーズマーケットでの出張販売などを通じ、クラブ員同士が刺激し合える場を作ることも有効だと考える。さらに、学校公式SNSで日頃の活動を発信することで、新たな役員立候補者や自主的な活動に挑戦する生徒の増加につながると考える。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

農業従事者の高齢化と後継者不足は深刻であり、農業高校の卒業生でも農業関連の職業を選ぶ生徒はごく一部にとどまる。それは「きつい・汚い・稼げない・かっこ悪い・危険」という、いわゆる「5K」の負のイメージが定着していることも一因である。このイメージを払拭するため、実際の農家を訪問し「就農のきっかけ」や「やりがい」について聞き取り調査を行うことを提案する。この現場の生の声を聴くことで、農業の本質的な魅力を発見できるきっかけになると考える。併せて、農業高校生自身へのインタビューも実施し、その内容を小中学生向けに発信していく。さらに、収穫体験や農産物の試食など、五感で魅力を味わえる体験型イベントを企画することで、5Kの先入観を打ち消すきっかけ作りも意味があると考ええる。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

九州ブロック 宮崎県立高鍋農業高等学校

園芸科学科 3年 大山 柚紀

畜産科学科 3年 松元 音弥

フードビジネス科 3年 鶴丸 玄樹

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

- 学校全体の取り組みとして、年に1回の即売会を実施しています。即売会では、幅広い年齢層のお客様がいらっしゃるので多くの人との交流を図ることはできますが、高校生以下の年齢層とは交流が図りにくいことが現状です。
- 各学科で、学科の特色を活かした販売会を実施しています。例えば、本校のフードビジネス科では、高鍋町の活性化を目的に、駅で月1回、役場や地域の普通科高校とコラボしてイベントを企画・運営をしています。学校外の方と協力して取り組むので交流が生まれ、地域の方との絆が深まっています。
- 三世代体験型のイベントを開催してみてもどうかと考えました。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。
また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

- 今回、九州ブロックの発表大会の運営を私たち役員だけでなく、3学年の生徒を巻き込んで行ったところ、私たちが想像していたよりも皆が協力的で、責任を持って大会の運営に当たってくれました。それを見て、自分の役割ややるべきことを分かっていたら、クラブ員は積極的に行動できることを肌で感じました。まずは単位クラブとして、地域のために、あるいは誰かのために取り組みたいことを考え、その目的や意義をしっかりと伝え上で活動ができれば理想であると考えました。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

- 私たち農業を学ぶ高校生としてできることを考えたときに、授業や実習を通して感じる楽しさや面白さ、やりがいなどをSNSで中高生向けに発信したら良いのではないかと思います。
- 他校のインスタを見て、楽しそうに感じ、入学してみたいなと思ったことがあります。本校もHPやインスタで学校行事を発信していますが、発信回数が少ないことや先生方の目線なので、生徒会あるいは農業クラブ役員が生徒目線で発信できたら、同世代の人に農業高校の魅力（農業の楽しさ）を伝えることができ、農業のイメージアップにつながるのではないかと考えました。
- 農業従事者が減少する一方で、転職して農業を始める方もいらっしゃるようで、そのような方と交流の場を持ち、農業の楽しさや面白さ、やりがいなどのお話を聞き、その内容をSNSで発信すれば、農業の本当の魅力を伝えることができるのではないかと考えました。

クラブ員代表者会議 参加者レポート

四国ブロック連盟 香川県立飯山高等学校

総合学科 3年 山西 純

総合学科 3年 宮武 紗希

総合学科 3年 坂下 葵

1 第1分科会

「老若男女問わず地域の人に参加できる活動や交流はどのようなものがあるだろうか。」

飯山高校では、1年生が育てたひまわりを使って迷路を造り、近隣の幼稚園や保育所の園児を招待しています。生徒と園児との交流を中心とした、本校の伝統的な行事です。しかし、「どうすればより多くの地域の人たちに参加してもらえるのか」「どうすれば若い人から年配の人まで幅広い世代に来てもらえるのか」という視点で、これまで十分に考えてこなかったように思います。みんなで意見を出し合い、話し合い、計画することが必要だと感じました。また、校外から高校生に対するボランティアの要請も多くあります。時間や距離の問題で参加が難しい場合もありますが、実際に参加すると、とても喜ばれていることを感じます。自分たちでイベントを考えて行動を起こすことも、地域から要請のあるイベントに参加することも、子どもから高齢者まで幅広い世代の人たちと関わり、交流する機会につながると思います。

2 第2分科会

「農業クラブ員全員が興味・関心を持ち、意欲的に取り組むためにはどうすればよいか。

また、クラブ員全員ができる活動はどのようなものがあるだろうか。」

クラブ員の興味・関心を引くためには何が必要かを考えたところ、まず「楽しいこと」が大切だという意見になりました。一方で、もっと身近に取り組めることは何かと考えたところ、「栽培の喜びや達成感をみんなで共有する」という意見になりました。授業や実習で得た体験をみんなで共有することです。それぞれが取り組んだ内容をレポートにまとめ、クラブ員全員が閲覧できるようにすれば、他の人の取り組みや感想を知ることができそこから新しい視点や考え方に気づき、お互いの学びをさらに深めることができると思います。このような活動が、クラブ員一人ひとりの興味・関心を高め、意欲的な取り組みにつながるのではないかと考えました。

3 第3分科会

「農業従事者が減っていく中で、農業のイメージアップをするためにはどのように魅力を発信していくべきか。」

InstagramやX、YouTubeショートなどのSNSやホームページを活用して、農業の魅力を発信することが効果的だと考えます。作物が少しずつ成長し、変化していく姿を発信することで、「農業って楽しい」と感じてもらえると思います。また、「農業や栽培を始めるまでの壁は意外と低い」ということを発信することで、実際に栽培を始める第一歩を踏み出してもらえるかもしれません。SNSのコメント機能やDM機能なども活用し、困っていることや質問に答えたりしながら、双方向のコミュニケーションをとることも大切です。まずは栽培の「はじめの一步」である種まきから始め、その様子を自分たちのできる範囲で発信していくことが、農業のイメージアップにつながるスタートになると思います。



氏 名		高等学校	年	科
-----	--	------	---	---